

て云ふのに、「悲しいことは春が第一である。花の前に於て林の中にほつほつと落ちる花片はそれがすぐ其の儘悲哀のあは即ち悲しいはかないものではないか。月の下に於て大に悲む一曲は愁の響を長く絶えず引いて、いや長いではないか、ゆたかに萌え出た草を褥として横に臥すると、涙がはら／＼と落ちてまばらなる痕がある。春風の吹くのを琴の音かとして耳を傾けると心ふれて感極まつて早やもう腸をたつ響のやうに聞きなされる。あゝ思ひを解きやる事の出来ないこの春の愁ひよ。響が散つて春風の中に混じて悲しく聞きなされるものは、たゞ洛陽遊子の笛だけであらうか」と。

【一〇八】 左ノ全文ヲ解釋シ且ツ右側ニ縦線ヲ施セル部分ヲ摘出シテ其ノ意義ヲ明示スベシ  
詩を讀みて當然起り來る美意識以外、心はいつしか一步その奥を辿りて、覺えず實在を撞着して、嗚呼神よこ叫ぶこゝあり。神に一念の誠をさゝぐる刹那、心はいつしか歡喜の態度にすべりて、あはれ／＼風月の情をどろなるこゝあり。詩よりして神に之き、神よりして詩に之く。此の如きは辿りふかき人の經驗する事實なり。

(網島梁川「病問錄」)(大正二二、小樽高商)

【語釋】 ○美意識 美を認ること、この美とは詩趣を感得したるをいふ。○實在 Reality 主觀以外に實際に存在すること。本體。○撞着 ショウチャク 前後矛盾すること。つきあたる。○風月の情 天

然の美を樂む情、即ち美的觀賞の心。

【通解】 詩を讀めば當然詩趣を感じて、そこに美の意識が起つて、あゝ快哉と思ふ以外に、心はいつの間にか、それよりも一步深い所にいり込んで、思はずこの世の眞實客觀的存在につきあたり、「あ、神よ」と叫ぶことがある。又反對に、神に自分の誠心をこめて祈つてゐる瞬間に、心はいつの間にか美的觀賞の態度にうつつて、あゝ／＼と天然を樂む情が、動いて來るまどがある。かうして詩から神に近づくのである。神から詩に入るのである。是れは其の道に長く親しんでゐる人の經驗する事實である。

【摘釋】 (一) 覺えず實在と撞着す——つひ知らず現象の奥に横はる宇宙の本體、靈、精神につきあたる  
(二) あはれ／＼と風月の云々——あゝ／＼といつて、自然に美的觀賞の心が湧いて來る。  
(三) 辿り深き人の經驗——その道の奥底に沈潜することの深い人の經驗。

【一〇九】 明治の革新は壽永の昔の如き、偉人の健闘して人目を眩せしむるものなし。これ權力授受の、樽俎折衝の間に穩かに局を結びたるにもよるべしといへども、今や氣運は移りて英雄の時代は過ぎ、民衆の時代は來れるなり。非凡の手腕ある個人を中心とし、その歎美者も憎惡者もが集れるは、もはや歴史の夢にして、文化の弘通に過敏なる社會組織は、一個人をして高く群集に擢んでしむることを許さず。上下貴賤、緊密に共同して働くは現代の事實なり

(藤岡東圃「東圃遺稿」)(大正二二、金澤醫大)

【語釋】 ○壽永の昔 安徳帝の年號、源平の頃。○樽廻折衝 樽は酒、廻はまわした。魚。折衝は敵の衝いて来るのを折くこと。これより外交の策を酒杯の間に上手にやること。○局を結ぶ 時局の始末をする。○弘通 グツウ 普くゆきわたる。○緊密 固く結びつく。

【通解】 明治維新の時には、丁度壽永の源平争闘史に見えるやうな、偉大の人物が大いに奮闘して人目をまぶしくさせるやうなものはない。是れは明治維新は政治上の権力を授けたり受けたりする事が、外交上のかけひきを酒杯の間に稼かに行はれて、何事もなく始末を着けたことにも因るであらうが、今日と異つて、時代の大勢がかはつて、古の英雄時代が去り、多数の人民が相依つて仕事をす時代が来たのである。非凡の腕前のある或る一人を中心として、その周圍にその人を賞讃するものと憎み嫌ふものとが集つて、濫りに黨同異伐の政治をするやうなことは、既に歴史上の夢となつて去つた。今日では、文明教化が普くゆきわたつてゐること、敏感な社會組織になつて、昔のやうに黨を組むこと出来ず、一人抜群といふことは許されない時代になつた。つまり上下貴賤、固く結びついて協同して働くのが、今の時代の事實實際の状態である。

【一一〇】 踏むは地を思へばこそ、裂けはせぬかこの氣遣、起る。戴くは天を知る故に、稻妻の米嚙に震ふ怖も出来る。人争はねば一分が立たぬ浮世が催促するから、火宅の苦は免れぬ。東西のある乾坤に住んで、利害の綱を渡らねばならぬ身には、事實の戀は響である。目に

見る富は土である。握る名を奪へる譽は、小賢かしき蜂の甘く醸す蜜を見せて、針を棄て去る蜜の如きものであらう。所謂樂は物に着するより起るが故に、あらゆる苦しみを含む。

(夏目漱石全集)

【語釋】 ○火宅 佛語、火の燃えてゐる家の義、此の世の安樂でないことを譬へたもの。○響 執着すること。

【通解】 踏むのは地であると思ふからして、裂けはせぬかとの心配も起る。戴くのは天であるを知つてゐるからして、稻妻がこめかみに震ふ怖も出来る。人と争はなければ男の一分が立たぬ、世の中の状態がしかあるべく催促するから、火宅の様な娑婆の苦みを免れぬ。東西の方角ある此の天地に住んで、利害關係からはなれる事の出来ない、即ち利害の綱をうまく渡つて行かなければならぬ身には、事實上戀は響である、目に見る富は土芥である。奮闘して得た名譽は、恰度こがしこい蜜蜂のうまくつくり上げたと見せて、針を棄て去る蜜のやうなもので、結局身を苦めるものである。世間に云ふ樂は、物に執着するから起るので、樂には一面あらゆる苦みを含んでゐる。

【一一一】 智に働けば角が立つ。情に棹せば流される。意地を通せば窮屈だ。さかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、心安い所へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいま悟つた時、詩が生れて、畫が出来る。(夏目漱石全集)

【通解】人の心には智、情、意の三方面があるが、智を以て事を處理した時には、冷やかで物事に角が立つ、情にまかせて事を處理すると、舟のをし流される様に、失敗に終る。意志を通すと物事が窮屈である。どちらにしても世の中は住みにくい。其の住みにくさが高じると、安氣な所へ引越したくなる。何處へ引越しても住みにくいと悟つた時、其の苦痛を免れる方法として、詩が作られ盡が描かれる様になる

【一〇二】世界の大勢は日本人を體して、如何なることを世界に宣傳せんぞしつあるか。大勢は無聲無言なり。識者先覺は大勢を悟りし、これをして聲あらしめ、形あらしめざるべからざるの大任を負ふなり。若し偉大なる先覺者ありて、此の大勢の言はんを欲して言ふ能はざる所を國民に宣傳するあらんか、國民の心に譬へばせられたる水の堰を開かれたる如く、滔々大河となりて、其の進むべき所に流れ行かん。(大西祝『思潮評論』)

【語釋】○日本人を體して。普通は其の意を深く心にとめ守つて、などの意味であるが、茲では日本人を云ふ。体形と透して、体形によつての意となる。○先覺者。孟子に出てゐる。先に事情に通じた賢者。

【通解】世界のなりゆきは、日本人と云ふ形體を透して、どの様な事を世界に言ひふらせようとするか、世界のなりゆきは、無聲無言である。世の物事をわきまへた人や、先、世界の狀態に達した者は、世界のなりゆきをして、形あらしめ聲あらしむる大任務を負ふものである。もしすぐれた先覺者があつて

此のなりゆきの言はんとして言ひ得ない所を、國民にのべつたへるものがあつた時には、國民の心は譬へて言ふと、水の堰をひらかれたやうに、盛に流るる大きな河となつて、其の進んで行くべき所に流れてゆくであらう。

【一〇三】學究の徒、やゝもすれば驕慢に陥り、英雄崇拜を以て兒戯こなし、唯、人は自ら恃むべきを謂ふ。理は即ち理なり、然れども、生命の裏には感情あり。春花を看れば則ち怡び、秋月に對すれば即ち傷むもの、これ人生の自然にあらずや。然らば即ち人中の人を崇び、士中の士を拜するも、亦人生の自然のみ。(福本日南)

【語釋】○學究の徒。學問研究を事とする人だち。○驕慢。キョウマン。驕は高ぶる、慢も自ら高しとする。故におごりたかぶること。○士。立派な人物。

【通解】學問研究ばかりをやつてゐる輩は、どうかすると、おごりたかぶつてすぐれた人物をたつとび慕ふことを以て子供の戯れの様なこととし、唯人は自分で自分を恃みにすべきであると云ふ。これは道理は即ち道理である、けれども生命のうちには感情がある。春花をみるとびのびと、よるこび、秋月に對すると、うら悲しくなるのは、これは人生の自然ではないか。であるならば、則ち人中の中ですぐれた人をたつとび、人物中に於て立派な人物を敬ひしたふのも、亦人間の自然だと云ふまでである。

【一四】 次の文章中傍線ヲ施シタル箇所(イ)、(ろ)ヲ解釋セヨ  
 天然ニ親む時に於ては、面上三斗の塵、忽焉ニして消失するなり。胸中一片の靈火勃  
 然ニして燃え來るなり。若し天れ愈々遽く、愈々親み、道ニ通リ天地有形外ニ思入ル浮雲變態  
 中ニ至つては、是れ實に天然ニ同化したるなり。然れども天然ニ親むは未だ幽寂の極にあ  
 らず。寧ろ如かんや、一室の裡、又立又臥、意象極めて分明なるに、是の時に於て、意志收縮  
 凝りて氷の如し、水晶の如し、燭星の如し、敬虔、警發、身は上帝の聖壇に近づきたるを覺ゆ  
 るのみ。(德富蘇峯ニ蘇峯文選) (大正一二、神戸高商)

【摘釋】 (イ) 道通天地有形外云々——我が行ふ道は天地の形のあるもの、外に通じ、即ち無形の眞理に  
 通じ、我が思は時一時と移り行く現象の中に入る、即ち我が思は天地自然の中に交つて遊ぶとい  
 ふ程になると、是れ天然自然と一身同體になつたのである。

(ロ) 寧ろ如かんや云々——どちらかといふと、一室にとち籠り、更に幽玄に、更に沈黙に、心の作用  
 が極めて澄明になるやうにした方に及ぶまい。かうなると、心(我意我慾)が収まり縮まり、凝り固  
 まつて氷の如く、透明なること水晶の如く、明輝なることキラ／＼光る星の如くである。そして  
 自然と神とを崇め尊み、心の眼がめざとく悟つて、天帝の御前に近づいたやうに感ずるばかりで

ある。

【語釋】 ○面上三斗の塵 眼前に推積する浮世の塵の無數の煩しき。○忽焉 コツエン たちまちに。  
 ○靈火 魂のもえる火、即ちかゞやき。○勃然 ボツゼン 盛に起るさま。○遽く フカク。○幽寂の  
 極 イウジヤクのキョク 神祕郷に入つたほど、ひっそりした奥深い趣。○意象 意識の現象、心の作  
 用、心の中に起ること。○敬虔 ケイケン Picty. うやまひつゝしむ ○警發 Vigil. めざとく悟る。  
 ○聖壇 Alter place. 最も神聖な所。

【附記】 道通天地の句は、宋の程頤の秋日偶成に、

「閑來無事不從容。睡覺東窓日已紅。萬物靜觀皆自得。四時佳興與人同。道通天地有形外。  
 思入風雲變態中。富貴不淫貧賤樂。男兒到此是豪傑。」といふのがあるを引用したのである。

【一一五】 次ノ文章ノ大意ヲ五行以内ノ短文ニテ答ヘヨ

芭蕉は一俳人なり。されき十年の生涯を自然の渴仰にさへけて、あるは奥羽象潟の時雨に  
 腸を絞り、あるは佐渡北海の荒波に魂を削りて、一樹の假の宿りにも、こく／＼の雪結び  
 もあへず、旅魂そらに枯野の風雲に追へりし彼が姿をしのぶもの、誰かその魂に鑄られたる  
 實の一字を否むべき。彼は自ら謙して、花鳥に情を役して、この一寸に繋るさいへり。しか

旅に病んで夢は枯野をけけめぬ

一七八

現代文新釋法

も行くくしばく大自然の幽玄の一路に分け入りて、覺えず涙下りしその意識よ。あはれ彼は趣味の門より入りて趣味の太源に道交しぬ。(綱島梁川)(大正一二、神戸高商)

【大意】芭蕉は一介の俳諧者であら。彼が生涯を自然の渴仰にまげ、天下を周遊し、死ぬる際にまでも、夢は枯野をかけまわつた。彼の魂は誠に實の一字に存する。彼は謙遜して自ら一俳人といつた然し實は趣味の門から趣味の本源なる造化と深く交つたのである。

【語釋】○象潟 キサガタ 「きさがたや雨に西施がねむの花」の句がある。○シグレ 秋から冬にかけてバラくと降る雨。○住庵記に、「まづ頼む椎の木もあり夏木立」の句を意味す。○西行の歌に「とくとくと落つる岩間の苔清水、汲みほすほどもなき住居かな」とあるを採つた。○旅魂をいふに「旅に病んで夢は枯野をかけ巡る」の句がある。○意識 Consciousness 知覚情意等、一切の心的作用の稱。○趣味 自然の本眞。○太源 本源に同じ。○蓮華 佛語で、感應道交の略、衆生と佛菩薩と至誠の心を以て交ること。

【二一六】そのしはがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜人去り草木眠つて居る中に、たゞ暗中に端坐して鐵槌を揮つて居る了海の姿が、墨の如き闇に在

つて、尙實之助の心に歷々映つて來た。それはもはや人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、たゞ鐵槌を揮つて居る勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめた太刀の柄が何時の間にか緩んで居るのを覺えた。(菊池寛||菊池寛全集)(大正一二、山口高商)

【語釋】○喜怒哀樂の情の上にあつて 喜怒哀樂の四情を超越して、それ以上の立場にゐて。これは人間の感情的全部を、この四情によつて言ひ表したのである。○勇猛精進の菩薩心 一心不亂、他念なく佛道を修行する菩薩の心。勇猛は不屈不撓の強い心。精進は一意専念、決して外をかへり見ずやりぬくこと。菩薩は梵語 Bodhisattva の意譯。勇猛心を以て菩提を求め、大慈悲を以て衆生を濟ひ、已に妙覺の果に近づきたる人の事で、佛の次に位する凡人以上の大士である。

【通解】そのかすれた悲壯な聲が、水を浴びせかけるやうに、心頭まで徹つて實之助の心にこたへた。夜が更けて、人は散り失せ草木までも眠つてゐる中に、たゞ獨り暗闇の中に正しく坐つて、鐵槌を振上げて岩壁を掘つてゐる了海の姿が、眞闇の闇の中にあつても、はつきりと實之助の心に映つて來た。その時は既に人間の普通心ではなかつた。其の時、彼の心は、喜怒哀樂の人間四情を超越して、只鐵槌を振上げてゐる一心不亂、他をかへり見ない佛道修業の菩薩心であつた。實之助は今先まで、刀の柄を握りしめてゐた手が、いつの間にか緩んでゐることを感じた。

【附記】實之助は小説中の人物で、市九郎が殺害した主人の子。父の殺された時分は嬰兒であつた、今通解摘釋大意篇

仇討に出て、市九郎に出會し、一旦は仇討を後日と定めて別れたもの、無念やる瀬なくて堪へず、深夜忍び入つて之を殺さうとした。その刹那の心情を描いたもの。

【一七】 國家に禍するは口に愛國を説かざる者ならず、頻りに之を説き、行の之に反する者のり。歴史上に忠義振りて、最も不忠なる者の例を絶たず。古來大奸は忠に似たり云へり。富貴を私する勢利者流は、外を忠愛にし内を非忠愛にす。(大正一二、米澤高工)

【語釋】 ○忠義振りて 忠義らしく見せかけて。○大奸は忠に似たり 呂誨の語に「大姦似忠、大詐似信」とある。○富貴を私する 富貴の地位にありながら、私利私慾のみ食ふこと。○勢利者流 權勢利益を獨占せんとする仲間。

【通解】 國家に禍をかけるものは、口に愛國を説かないものではなく、却つて頻りに愛國を説いてゐながら、實際に於ては、之に反する行爲をやつてゐる者である。いつの歴史にも、表面は忠義らしく見せかけて、實は大不忠者である例は幾らでもある。昔から「大奸は一寸見ると忠のあるやう見える」と言つてゐる。富貴といふものは國家のお蔭で得られるのに、之を私利私慾の爲に獨占しようとする、權勢利益をねらつてゐる仲間は、表面はいかにも忠義振つて見せかけるが、内心は忠君愛國に反對した行爲をなすものである。

【一一八】 青春年少、況んや心花の如く、情火の如き時に於ては、意馬の奔逸殆んご羈絆する能はざるもの多し。一日の内彼は三たび樂み、三たび疑ふことを禁する能はず。動き易きものを算すれば、彼は先づ自己の心に指を屈せざるを得ざるなり。或時は一躍、所謂寶珠乾坤に飛び入るがごとく思ひ、或時は一落、紅蓮大紅蓮の地獄界にさまよふかき疑ふ、かくの如きものは青春の常なるべし。(鳥崎藤村—藤村文集)

【語釋】 ○青春年少 又は春の如き若き年頃。○意馬 心を馬に譬へたもので、意の慾の狂ひ動くことを譬へたもの。○羈絆 キハン きづな、はだし、こゝでは人を束縛するもの。○寶珠 ホウシュ 佛語、寶の玉求めるものを何でも意の如く出すと云ふ玉。○乾坤 天地のこと。○紅蓮大紅蓮 八寒地獄の中で、酷寒のため、體が紅く裂けて蓮の花のようになること。

【通解】 春の様な若々しい年頃、まして心は花の様美しく、感情は火の様熱烈な時に於ては、心の胸の強き力を以て、動きはしつて、殆どつなぎとめる事が出来ないものが多い。彼青年は一日の中數回愉快を感じ、數回疑問を起すことを禁することができない。動き易いものを數へ立てると、彼青年は、先づ自分の心に指を屈しないわけにいかないのである。或る時は、彼青年は、一足飛びに所謂寶珠の様、自分の求めるものが何でも得られると云ふ天地へ飛び込んだやうに思ひ、又或時は、一落に落ちて

酷寒の爲に身體が眞赤になつて、紅の蓮華や大蓮華の辨の様に裂けるといふおそろしい地獄界にうろづいて居るのではないかとまで疑ふ。こんな事は、青年にありがちの事である。

【二一九】 邦人の外國崇拜は往古より之れあり、必ずしも今日に始まれに非ず。殆ど傳統的因襲云ふべし。曾て範を支那に取り、宛然其の屬國の如き思想を抱き、言論をなせるものありき。今人之を笑はんも、而も現に英米に對して、如上の態度に出でざるもの幾何ぞ。

(大正一二米澤高工)

【語釋】 ○傳統的 代々承けついで來た。祖先傳來の習慣。○因襲 前からの仕慣に因ること。○宛然 エンゼン 恰も、さながら。

【通解】 日本人が外國をえらく思つて崇拜することは、遠き昔からあることで、何も今に始まつたことではない。殆ど祖先傳來の習慣といつても、餘り過言ではなからう。過去の時代においては、支那を文物の手下として、さながら支那の屬國のやうな思想を有ち、さういふやうな言論を平氣でしたのもあつた。今人は之を馬鹿な話だと笑うであらうが、現に英米に對して、今述べたと同じ態度に出でないものがどれだけあるか。同じ態度のものは少くないであらう。

【二二〇】 左ノ文章ノ意味ヲ説明セヨ

【二二〇】 實に沈黙は金である。雄辯は銀である。けれども、アントニウスの熱辯は灼熱せる鋼鐵である。何千度の猛火に發止し火花を散らせば、乾坤は碎け、地軸は折れ、靜平の天地に狂瀾を捲き起さずば止まぬ。舌の力はかくしてローマの歴史を動かしたのである。

(大正一二、和歌山高商)

【語釋】 ○灼熱 シヤクネツ 焼けてあつく眞赤なこと。○發止 ハツシ 劍を受け止める音の形容。○地軸 チヤク 古昔この地球は軸に乗つてゐると考へてゐた。

【意味】 誠に沈黙を守るは最肝要なことで、譬へて云はゞ、沈黙の價値は黄金に相當する。それに對して滔々たる雄辯ではその價値は銀にしか相當せぬ。しかしアントニウスの熱烈な辯の如き雄辯は、眞赤に焼けた鋼鐵(ハガネ)に相當する。この劍が何千度とも知らぬ烈しい火に發止と富つて、火花を四散すると、天地が碎け、地軸が折れ、今まで靜かであつた天地に、忽にして荒れ狂つた大波を逆巻き起さねばおかない程の威力がある。かうしてアントニウスの雄辯の力は、ローマの歴史に大影響を與へて動かしたのである。

【附記】 (二) アントニウスはローマの有名な雄辯家。シイザーの屍前でなした弔演説(古のローマ、今のフランスでは葬儀の時に棺前で弔演説をする習慣がある。このアントニウスの演説にブルーダス等が懼れてシイザーを殺害し、遂に帝政が興つて共和政治の自由は滅びた。)

(一) 沈黙は金である云々——スイスの諺に、Silence is gold, eloquence is silver.

【二二二】 太宰府の配處は、菅公に取りて絶好の詩境なりき。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。公や靜に往時を懷慕し、現境を思料し、詠歎によりて、その衷情を遺るべきなり

(高山樗牛—菅公傳)

【語釋】 ○配處 罪を受け下された土地。○危殆 あやふいこと。○詠歎 なげき、詩歌に詠むこと。○衷情 心の中。

【通解】 太宰府の配處は、道眞公にとつては非常によろしい詩を作る場所であつた。外に名譽、利益を競争する相手なく、内に危険だと云ふ心配はない。公は靜に過ぎ去つた昔の事を思ひ、したひ、現在の身の上を思ひ、詩歌によつて、其の心の中をのべて、思ひを慰めるべきである。

【二二三】 孔孟は處世の道を論じて、其の性理を説くや、未だ精微ならず。釋氏は解脱の妙あるも、世間を離る、弊なき能はず。而して世の英雄豪傑も、學問の大本領なければ、萬變に酬酢して誤なき能はず。陽明は高く心鏡を掲げて、宇宙の萬象を照し、道德事業一以て之を貫き後世の爲に實學の基礎を開く。孔孟を以て釋迦を兼ね。實に豪傑の事業を成せるものといふべきなり。余の陽明を仰止するは、則ち之が爲のみ (末廣鐵腸—古人評論)

【語釋】 ○孔孟 孔子と孟子。○性理 セイリ 人性と天理。人性は天の命ずる所で、心は衆理を具へその本體は善であるを説く學說。○釋氏 シヤクシ、釋迦牟尼。○解脱 ゲダツ 煩惱を解き捨てて悟を開くこと。○酬酢 シウサク、洒林のやりとり、應對すること。○仰止 仰ぎ慕ふこと、止は助辭。

【通解】 孔子や孟子は世に處する道を論じて、人性と天理の事を説くことはまだ精しくこまかではない釋迦は煩惱をときすてて、悟を開くと云ふよい所はあるが、世の中と離れてゆくと云ふわるい點が無いとは謂はれない、而して世の中の傑出した人物も、學問の上に大なるもちまへ(特色)がないと云ふと、萬事萬物の變に應對して誤りのない事は出来ない。陽明は高く鏡の様な心を抱いて、天地間の萬事萬物を照し、考へ、道德と事業とを一つの精神を以て貫いて、後の世の爲に社會に實際役に立つ學問のどたいを開いた。孔孟であつて釋迦を兼ね、實に傑出した人物としての事業を成就したものといつてよろしい。私が陽明を仰ぎしたふのは、即ちこの爲である。

【附記】 王陽明は浙江省餘姚の人、名は守仁。明時代の儒者、宋の陳象山の學說に基いて、知行合一説を唱導した。この學派を陽明學派又は餘姚派といふ。

【二二三】 世俗の美術を談ずる者、或は傳説に従ひ、或は他人の言に盲從するこま多くして、自らこれを戀ひ、これにあくがるこま少し。才徳は人の尙ぶこころなり、愛するこころなりしかもよく自ら進んでその尙愛するこころに達せんこあせるもの少きが如く、世の美を語り、



藝をいふ者に往々雷同の徒を見るぞうたてき。(上田敏「文藝論集」)

【語釋】○尙愛 たつとび愛すること。○雷同 雷が鳴つて萬物が皆これに應じて鳴り響く様に、むやみと人の説に共鳴すること。

【通解】 世の俗人の美術の事を話をする者、或は昔からの云ひ傳へに従ひ、或は他人の言葉に、何の辨別もなく従ふことが多くて、自分から此の者を憚ひ、此の者に心のひかれ慕ふものが少い。才智德行は人の尙ぶところである。愛する所である。しかしよく自分から進んで其のたつとび愛する所をやりとほさうとあせるものが少い様に、世の美術の話をし、藝術を論ずる者に、まゝ自ら意見を立てよとしたい、是非善悪を問はず、他人の意見に従ふものがあるのは、なさない事である。

【二二四】 左ノ文ノ意義ヲ十分ニ解釋セヨ

統一とは、單に集合したる多數を一纏めにした謂でもなければ、~~一歩を進めて、それ等相互の間に~~調和や秩序を存在せしめた謂でもなく、更に一歩を進めて、それ等相互の間に、調和や秩序を存在せしめた謂でもなく、更に一歩を進めて、集合した各が、一同の目的を有して、それを果すからでもない。眞の統一は、部分がよく全體性を表して居るのでなければならぬ。部分以外に全體なきものであらねばならぬ。全體性は一切の部分若しくは要素が、直接我々の

意識裡に上るものでなければならぬ。(大正一二、東京女高師)

【語釋】 ○統一 Unite. 一つに統へ、まとめること。○集合 Congregate 事柄の秩序も統一も聯絡もその間になく、唯時と處とを同じくして集つたものをいふ。○調和 相互の間に各の個性を破らずに、而かも協同の目的に一致協力して生活するの謂であるから、之を保つには、全と個とが同一性たるべき要はない。○秩序 Order 相互にその分を守ること。順序。○全體性 全と個との性質が同一である意識。

【意義】 全體と部分、多と一、全體と個體といふ觀念より、統一、秩序、協同目的に進む觀念を批判して、形式上、外面的の調和、秩序、一同目的などとの眞意義を説明したものである。譬を以ていはず、國家、社會と之を構成する分子、要素たる個々の團體乃至一個人との關係、相互間のは單に外面的形式のものではなく、國家社會のための一個人、一個人のための一國家、一社會である。一手一足は一身體相互の密接の關係で、是が調和、秩序、共同目的とを完全に遂行しなくては、眞の統一にあらずといふことを説明したのである。

【二二五】 (イ)英雄豪傑の偉業は、榴花朝の榮にして、多くの星霜を経たる後には空しく山丘ミ化し了れども、ひそり文學者藝術家の大作品は、長へに日月を懸く。(坪内逍遙「作と評論」)  
(ろ)日晷、一たびうつれば、千歳再來の今なし、形神すでに離るれば、萬古再生の我なし。學

藝事業、あに悠々たるべけむや。(大正一二、大分高商)

【語釋】 ○**權花**一朝の榮 キンクワ一テウのエイ、權花はムクゲの花、ムクゲの花は朝開いて夕にしほむから、はかないことの譬に用ひる。そこで、權花の朝の中だけの榮光である。一名アサガホ、白樂天の詩句に「松樹千年終自朽、權花一日自成榮」とある。○**日輪** ニツキ 晝は地上に立てた物の影(古は)の影の長短で時刻をはかった) ○**形神** 身體と精神(魂)

【通解】 (い) 英雄や豪傑のやつた立派な事業は、丁度權花の朝開いて夕にしほむやうに、一時的の榮光であつて、多くの年月が経つた後には、英雄豪傑の榮えた處も、すっかり崩れて山や丘となつて了ふしかし文學者や藝術家の立派な作品は、日月が天に懸つてゐるやうに、永久に世人に瞻望される。

(ろ) 光陰一たび過ぎて了へば、千年萬年待つとも、今といふものは再び來ない。丁度それと同じやうに、身體と精神とが一たび離れて死んで了へば、萬年たつても我といふものは再生せぬ。それ故に學問なり事業なり、何としてゆつくり暢氣にしてゐられやうか。努力せねばならぬ。

【二二六】 英雄も汝が彼はかくあるべし信する如くに完全ならず。敵も汝がかくあるべし思想ふ如くに黒しからず。一年の數日富士山は畫家の好んで描くが如き美觀を以て、其榮光を現するのみ。されど、また其の山容の全く隠れて現はれざるが如き、暗黒荒涼なる日は尙少なし

(大正一二、士官豫科)

【語釋】 ○**榮光** 最もはえあるかゞやき。to be bright. ○**山容** 山のすがた。

【通解】 英雄も諸君が、「彼はきつと斯うだらう」と信用するやうに、完備の人格と力量とを具へてゐる人間ではない。敵もまた諸君が、「彼はきつと斯うだらう」と思つたほどの悪者ではない。完全に榮光のものとか、全く極悪のものといふのは實際にあるものではない。それは恰も秀麗な富士山は、畫家の好んで描くやうな美しさで、その榮光の姿を現すのは、一年中僅々數日のみである如くだ。しかし山の姿も全く隠れて見えないほど、暗く物すさまじい日は尙更數へるほどあるのみと同様である。

次ノ文中傍線ヲ施シタル箇所(い)(ろ)(は)ノ解釋ヲセヨ

【二二七】 曹丕の魏を以て漢に代り、自立して皇帝を爲りしは、豈に成功に非ずや。劉備、諸葛亮の才を稱し、不に十倍す爲ししも、亮自ら成敗利鈍逆め觀る所に非ず言ひ、終に陣中に斃れ、子孫亦事に死せり、不成功を謂ふべきのみ。孔子は生を終ふるまで、惴々焉として喪家の狗の如くなりき。基督は齡三十歳にして盜賊にもに磔刑に處せられぬ。不成功もこゝに極まる。惟ふに、成功といひ失敗といふは凡庸の事。俊傑は則ち唯人事を盡して天命を俟ち、俊の俊なる者に至りては、即ち我が天職を事として俟つ所ある無けん。(大正一二、神戸高商)

【摘釋】 (一) 亮自ら成敗利鈍云々——諸葛亮は自ら成功するか、失敗するか、うまく行くか、行かぬ

かは豫め知ること出来ませんと言つて、遂に五丈原頭の陣中に死に。

【二二】孔子は生を終るまで云々——孔子は死ぬるまでおどろして、不幸のあつた家の犬が、食物を與へられないで、瘦せ衰へたやうに、みぢめであつた。

【三】私は思ふに、成功とか失敗とかいふことは、平凡の者のいふことで、すぐれた人たちは、人間に出来るだけの事は盡して、それ以上は天の與へる運命に任せるし、またすぐれぬいた人物になると、我が天分のつとめを専心するだけで、その結果としては別に當てにはしないであらう。

【附記】(一) は前出師表中の言。(二) は論語の中の言。(三) の人事を盡して天命を俟つも、論語の中の語。

【二二八】世に佛に願ひて、涅槃の寂寞を求むるものあり。されど形骸を離れて魂魄なきを如何にすべき。又その墳墓を壯大にし、金を鑿め石に刻して、名の後世に傳らんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標獨全きを得べけんや。かくの如きは永生の道にあらざるなり。(高山樗牛「樗牛全集」)

【語釋】○涅槃の寂寞。ネハンのジャクマク、涅槃は梵語、入滅と譯す、絕對究意の樂地で、死を意味す寂寞。さびしく靜かなこと。○桑滄。うつり變りの早く且つ甚しい事を云ふ「桑田變じて滄海となる」と

涅槃のま

云ふ語より來る。

【通解】世の中には、佛の力にねがひたよつて、絕對究意の樂地のしづかなるを求めるものがある。であるけれども、身體をはなれてたまじひがないと云ふ事をどうしようか。結局詮ない事である。又自分の墓を立派に大きくし、金にはりつけ、石にきざみつけて、名を後世まで傳へようと求めるものがある。であるけれども、時は總ての物を破りこぼつものである。風や雨がふり、幾年も年月が立つて、時が移り、人がかはり、桑田變じて滄海となり、幾度かはりかはつて後は、墓じるしが唯それだけ完全に残らうか。こんなのは、永く生きる道ではないのである。

【二二九】一念の執着に必衰の運命をものごもせず、三世の因果を身に引いても、なほ怨敵にむくいむことを必せり。(高山樗牛「樗牛全集」)

【語釋】○一念の執着。我執でかうと思ひこんだ心をいふ。○三世の因果。過去、現在、未來、の世の因果即ち其世に於て爲した行爲が、現世に於ける報となり、現世に於ける行爲が未來の世に報の原因となることを云ふ○怨敵。チンテキ。怨みある敵、あだがたき。

【通解】深く心に思ひこんだ心かられて、必ず衰へる運命も願みず、三世の報を身に引受けても、矢張りきつと仇敵に對して怨を報いようとした。

【二三〇】彼が勇斷徑行や、時に或は恣情に走るものあり。雖、彼が如き偉人傑物にありては

蓋し尋常凡介の品彙四備を以て論ずべからざるもの、群小の批判や、衆愚の是非や、竟に彼が冷笑だも値せざらんなり。(白河鯉洋「秦始皇」)

【語釋】○勇斷徑行。イウダケンケイカウ。思切つてとりきめて真直ぐに行ふこと。○尋常凡介。ツンジヤウボンカイ。普通なみなみの貝類。○品彙四備。ヒンヰヒツチウ。たぐひ、韓念の文「非常鱗凡介之品彙匹備也」とあり。品彙、しな、たぐひ、匹備もたぐひ。○批判。批評して判断すること。

【通解】彼が思切つて真直ぐに行ふ事は、時には感情の欲するがまゝに走ると云ふ風があつたけれども彼の様なすぐれた人物にあつては、思ふに普通なみくしのたぐひと一緒にして、彼は云ふべきものでないので、多くの人づれの批判や、多くの愚人の彼は云ふことは、つまり彼にとつては彼が冷笑にも値しないのである。

【一三二】左ノ文ノ大意ヲ記セ

嗚呼プリンヂイシイの港を出で、よりの、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にこよせて房の裡にのみ籠りて同行の人々にも物言ふ事の少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり。此の恨は初め一抹の雲の如く我が心を掠めて、瑞西の山色をも見せず。伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中

ろは世を厭ひ身をはかなみて、腸日ごみに九廻すこもいふべき慘痛を我に負はせ今は心の奥に凝り固まりて、一點の翳さのみなりたれど、文讀むごに物見ること、鏡に映る影、聲に應ずる響の如く、限なき懷舊の情を喚び起して、幾度もなく我が心を苦む。嗚呼いかにしてか斯の恨を銷せん。(森鷗外「即興詩人」)(大正一二、高等學校)

【大意】プリンヂイシイの港を出てから、もう二十餘日になる。普通なら一而讒のない人にさへ交際して、旅愁を慰めあふのだが、自分は始終船室に籠つて、孤獨を守つて来たのは、胸中に恨み歎くことがあるからだ。この恨みは、ふと心に這入り込んで来て、折角の瑞西や伊太利の風景古蹟も、見る気がしなかつたが、それがだん／＼強うなつて、毎日腸を抉られるやうな苦を嘗め今はもう心の痛みも小さくなつたものゝ、何をするにつけても、懷舊の情をよび起して、幾たび我が心を苦めるかわからぬ。あゝ何としたら此の恨みを忘れることが出来るであらうか。一生この苦を續けなければならぬのであらうか。

【一三三】左ノ文ニ一ノ句讀ヲウチ、二線ヲツケタ箇所ヲヌキ出シテ解釋シ、三左ノ文ニ含マレテキルラシイ漢詩和歌俳句ノ中知ツテキルモノヲ書キナサイ。

梅の蕾が大きくなつた。なるほご日當りのいゝ南向の枝の先から、一輪二輪と開き始めゆゆく、やがて鶯の鳴く音も聞えよう。朧夜の庭に特有の香を漂はせもしよう、しかし自分

は梅の花を見るに、東洋の古典文學に關する自分の知識を試験されるやうな心持にしかねない。梅の花はこれほき美しく、されほさい、香がしても、われなる個性的感動は、根柢の深い過去の權威の下に忽ち萎縮して力なきものとなつてしまふ。漢詩と和歌と俳句とは全く餘す所なく、この花の句を吸ひつくしてしまつたのだ。だから自分にはもう句も風情もない。梅花お前はお前を古人の心の鏡として愛し得るものためにもみ咲くがい。

(永井荷風『荷風集』(大正一二、北大豫科))

- 【摘釋】(一) 臘夜の庭に云々―梅は春の臘月夜に暗香を浮動させる所に趣味がある。故に臘月の照らす庭園に、梅でなければ聞かれぬ香を漂はせる。
- (二) 古典文學に關する云々―權威ある古代の文學について、自分はどれだけの智識を持つてゐるかを試験される。
- (三) 個性的感動は云々―他人とは全く關係のない、その人の心から出た自分一箇の感動は、千年の舊い文學の權威の爲に、忽ちいぢけて了つて、さつぱり發揮する力も機會も得られないものになつてしまふ。
- (四) 梅やお前は古が感賞してくれた心を以て、我が感賞とし、自己の特有してゐる性能を發揮しない

で。梅によつて古人の心情を知るよすがとして。

- 3、(一) 南向の枝の。「日のめぐる南の枝の霜どけに、ぬれてほゝえむ梅の初花」(加藤直枝)「この寝ぬる朝けの風のかほるなり、軒端の梅の春の初花」(源實朝)
- (二) 一輪二輪と。「梅一輪々々ほどの暖かさ」(嵐雪)
- (三) 鶯の鳴く音も。「動なればいとまかしこし鶯の、宿はと問はゞいかゞ答へむ」(紀内侍)
- (四) 臘夜の庭に。「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏」(林和靖)
- 「大空の梅のほひにかすみつゝ、くもりもやらぬ春の夜の月」(藤原定家)
- 「春もやゝけしきとゝのふ梅と月」(松尾芭蕉)
- (五) 花の句を吸ひつくして。「君ならで誰にか見せん梅の花、色をも香をも知る人ぞ知る」(坂上是則)

【一三四】 左ノ文ノ傍線ノ部分ヲ解釋セヨ。

虚文空論儀容<sup>(一)</sup>を飾り、<sup>(二)</sup>邊幅を修め、識見氣幹の世を蓋ふに足るものなきは、固より吾輩の取る所に非ず。大言壯語徒に一時の快を取り、沈着寧靜の氣象なきもの、亦吾輩の取る所に非ず。吾輩の今日に望む所のものは他なし。特殊の本領あり、識見高く才學敏き先覺先進の士、起て以て士氣の挽回を謀り、<sup>(四)</sup>虚文虚禮に拘泥せる紳士、危言壯語に滔々たる壯士の假

面を排斥し去らん、是れなれ。(大正一二、熊本高工)

【摘釋】(一) 邊幅を修め云々——服装ばかり整へ、見識や氣象氣力によつて根幹となるべきものがこの世をおほひ盡すほどに勝れてゐる。

(二) 大言壯語徒に云々——大きな、えらさうな事を言つて(大法螺を吹いて)たゞその時だけの愉快を得。

(三) 特殊の本領あり——他と異なつた、その人に限る主義主張がある。

(四) 虚文虚禮に云々——表面ばかりの實意のない文飾や、形式だけの禮法にこだわつてゐる紳士。

【二三五】 同じく個儻非常の人、しかも居る所の地位已に便、能く其の猛氣を養ふを得る時に奮ひ起りて大いに叫び、世皆俯伏して畏憚せざる無きも、一旦據る所を失ひて、他の權内に歸し、或は制縛せられて力を伸べえざる、如何に大言壯語するも、唯憫笑を來すのみ。

(三宅雪嶺「偉人の跡」)

【語釋】 ○個儻非常の人 テキタウヒジヤワのヒト 才氣のすぐれ出たのを云ふ。○俯伏 セウフク 恐れ伏すること。

【通解】 同じ様に、才氣のすぐれた人であつても、居る所の自分の地位が、已に便利で能く其の猛々し

い元氣を養ひ得る時に、奮ひ起つて大に叫んだならば、世間は皆其の權威に恐れて伏し、はばからないものは無いけれど、一度自分の據つてゐる地位を失つて、他人の權力範圍内に立ち、其の支配下につく様になつて、或はおしつけられ自由をじばられて力を伸べ得ない時には、どんなに立派な説を吐いても唯他人あはれみ笑ひを受けるだけである。

【二三六】 次ノ文ノ大意ヲ簡單ニ記セ

人の外に道なく、道の外に人なし。人を以て人の道を行ふ、何の知り難く行ひ難きことかこれあらむ。若し夫れ人倫を外にして道を求めん、欲するものは、猶風を捕り影を捉ふるが如く、必ず得べからざるなり。故に道を知るものは必ずこれを適きに求む。其の道を以て高しきなし遠しきなし、企て及ぶべからずとするものは、皆道の本然にあらず、自ら惑ふの致すところなり。(大正一二、神戸高商)

【大意】 人と道とは相關のもので同一である。人が人道を行ふから樂々と行はれるので、人道の外の道は如何にしても求められない。道は手近き己の行動によつて求むべきである。その道の高遠で、とても達することが出来ないと思ふのは、考へ違ひしてゐるのである。

【二三七】 左ノ文ノ主眼點ヲ示セ

獨樂の運動を見るには、妄りに心棒の尖端を攫むことなく、運動そのものを直視しなければならない。闇黒が如何なるものかを知るには、徒らに燈火を點ずることなく、闇黒そのものに對しなければならぬ。文の眞義を解するには、文字の底に内在する文自體に面しなければならぬ。(大正一二、愛知醫大)

【主意】 獨樂が運動するのを見るには、運動そのものを注意せねばならぬ。闇黒の性質を知るには闇黒そのものを注意せねばならぬ。是は比喩で、同じやうに、文章の眞の意味を知るには、文字に拘泥しないで、文そのもの、内面的の意味を會得しなければならぬ。

【附記】 この文は漸層法の修辭で、前の獨樂闇黒は二つの比喩で、「文の眞義云々」に至つて、次第に高く且つ重意を述べるのである。

【一三八】 直江津を發車して忽ち眼明かなり驚けば、渺々たる日本海は折しも波に一船を著けず、雲に一鳥を帯びずして、千萬頃の虚しく闊きに、唯池の如き潮の浩蕩として遊ぶのがした。さ見らに瑠璃の煙る様に、物ありて幽かに顯れるのを、早くも「佐渡々々」案内する聲が目遮る物もあらぬ三十海里の波の上に「温泉水滑洗凝脂」<sup>カニシテ</sup>「ミヤうに浮び出たのである。

(尾崎紅葉「煙霞療養」)

【語釋】 ○渺々 廣々とはてなき貌。○千萬頃 一頃は百畝、非常に廣い形容。○「温泉水滑洗凝脂」 白楽天の長恨歌に出てゐる語で、揚貴妃の入浴を形容した言葉。

【通解】 直江津を發車して、急に見晴しがよくなつたと驚くと、はるばると廣い日本海は、丁度其時には波の上に一般の船が浮んで居らず、空には一つの鳥も飛んで居ないで、千萬頃、たゞひろくと廣いのに、潮がひろびろとして、うねつてゐるのであつた。ふと見ると瑠璃(寶玉)のやうにぼつとけぶつて、見えるものがあつて、かすかにあらはれるのを、早くも見つけて、「佐渡々々」と案内する聲がした。まことに香嶽樓の軒端から伸上つて「おれの眉ほどの大きさ」と天の一方に望み見た佐渡が島は、今日を邪魔するものもない三十海里の波の上に、「温泉の水がなめらかで凝り固つた脂を洗ふといつた様な風に、美しく浮び出でゐる。

【一三九】 左ノ文中、側線ヲ施セル箇所ニツイテ次ノ問ニ答ヘヨ。(1)解釋セヨ。(2)(3)コノ句ハドノ語句ニ懸ツテキルカ。(4)分リ易ク説明セヨ。(5)コノ語ノ目的格ハドレカ。(6)解釋セヨ。(7)コノ語ノ主格ハドレカ。

ケーベル先生はそれ程故郷を慕ふ様子もなく、<sup>(二)</sup>あながち日本を嫌ふ氣色もなく、<sup>(三)</sup>自分の性格は調和しない、<sup>(三)</sup>矛盾な亂雜な、空虚にして安つほい所謂新時代の世感<sup>(四)</sup>が周圍の過渡

層の底から次第々に浮上つて、自分をその中心に陥落せしめねば已まぬ勢をもつて進むのを日毎眼前に目撃しながら、それを別世界に起る風馬牛の現象の如く餘處に見て、極めて落著いた十八年を吾が邦で過された。(夏目漱石『漱石全集』(大正一二、臺灣高農))

【答解】(一) 強いて。別段。そんなに。

(2)、(3)ともに「新時代の世態」にかゝる形容的修飾語。

(4) 新時代の世の有様や風習が、周囲の舊時代が次第々に新時代に移つて行く世相が浮上つて来て自分を其の中へ捲き込まねば止まぬやうな勢を以て進んでゐる。

(5) 上の「……進むのを」が目的格である「進むの」の「は」は「こと」といふ體言に相當す。

(6) 自分に少しも關係のない事柄。陸游の詩に、「醉自醉倒愁自愁、愁與酒如風馬牛」とある。

(7) ケーベル先生が主格である。

【一四〇】 人皆得むことを思ふ。得るは益の道なり。得ることを思ふもよし。善を益し徳を益す、よからざることをなし。されど失はむことを思ふもまたよからむ。失ふは損の道なり。失ふことを思ふもよからずや。不善を損し、不徳を損し、無功を損す、よからざることをなきなり。

(幸田露伴『洗心録』)

【語釋】 ○不善、よくないこと。○不徳、道徳に叶はぬこと。○無功、何のてがらもないこと。

【通釋】 人は皆得よう得ようと思ふ。得ると云ふことは利益を得るの方法である。それで得ることを考へるのもよろしい。我が身の善をまし我が身の徳をます、よくない事はない。然うであるけれど、なくしようと思ふことも亦よからう。失ふは損しへらすは方法である、失ふことを考へるもよくはないか。不善を損し、不徳を損し、無功を損す、よくない事はないのである。

【一四一】 左ノ文章ノ大意ヲ説明セヨ

吾人の祖先是、外國の文化が輸入せられる毎に、常に新たなる感激に胸を躍らせつゝも、他國民の追蹤を許さぬ敏感さ、自由なる批判的態度を以て、仔細にこれを觀察し、熱心にこれを研究した。而してこの嚴肅なる努力は、それ等の文化を領會し得て、これを潑刺たる國民精神の内容として攝取し了るまで續けられた。(大正一三、愛知醫大)

【大意】 吾人の祖先是外國の文化が傳へられる毎に、感激に満ちてゐながらも、決して他國民では追付ことの出来ない鋭敏な感受性と、公平無私な態度とで點檢し研究した。そこで實際に文化を了得して攝取し、以て潑刺たる國民精神の内容とするに努めた。

【一四二】 次ノ文章中、傍線ノアル語句ダケヲ解釋セヨ

通解摘釋大意篇



時に、<sup>(二)</sup> 飄然自ら文藝批評界の木鐸を以て任じつゝ、<sup>(三)</sup> 大旗一竿、小説神髓を真向に押駢して出でし者<sup>(四)</sup>を逍遙<sup>(五)</sup>になす。彼、これより先、政治小説を譯出して當時の風潮に投ぜしが、<sup>(六)</sup> 今や飄然<sup>(七)</sup>、昨非を悟りて、藝術は實用の奴隸たるべきものにあらざりし<sup>(八)</sup>、又馬琴一流の勸懲主義を排して、<sup>(九)</sup> ありのまゝなる客觀的寫實を主張せり。(坪内逍遙) (大正一三、廣島高師)

【摘釋】(一) 飄然、インゼン、かくれてはゐるが。

(二) 木鐸、ボクダク、先覺者。昔教令を布告するに振り鳴した大鈴。論語に、「天下之無道也久矣。天將下以二天子一爲<sup>(十)</sup>木鐸上」とある。

(三) 大旗一竿、タイハイイツカン、大旗一ながれ。旗は旗の總名、色々の帛で造つた旗をもいふ。主義を宣傳する爲に、大きな旗を押し立てゝ行くこと。

(四) 逍遙、坪内雄藏博士の雅號。美濃の人、早稻田大學名譽教授。

(五) 政治小説、政治上の主義や政策を題材として作つた小説。我が國にては明治十二年頃から、政治家が外國の政治小説の翻譯に執筆した。

(六) 飄然、インゼン、心をひる返すまにいふ。

(七) 昨非を悟りて、昨日までの誤つてゐるかつたことを知つて。昨非は前非におなじ。

(八) 實用の奴隸、實際に使ふ爲にする奉仕的のこと。自由の天地を開拓し得ないこと。

(九) 馬琴一流の勸懲主義、徳川末期の大小説家たる瀧澤馬琴、八犬傳の雄篇を著す。彼獨得の小説は勸善懲惡を主義とするもの。

(十) 客觀的寫實、小説作家が人物事件を取扱ふに、自己の觀察、即ち主觀を混するなくして、事物をそのままに寫し出すこと。

【二四三】 飄然として何處よりこもなく來り、飄然として何處へこもなく去る。初なく終を知らず。蕭々として過ぐれば、人の腸を斷つ。風は過ぎ行く人生の聲なり。何處より來りて何處に去るを知らぬ「人」は、此聲を聞きて悲む。(徳富蘆花「自然と人生」)

【語釋】 飄然、ヘウゼン、軽くあがる兒。○蕭々、セウセウ、もの淋しい貌。

【通解】 風といふものは飄然として何處からともなく來て、ふらりとして何處へともなくなつて行く其の初まなければ其の終も知らない。もの淋しく吹き過ぎて行くと、人をして非常に悲ませる。風と云ふものは過ぎて行く人間の一生をあらはす聲である。何處から來て何處へ去るのかわからない。吾々人類は此の聲を聞いて悲く思ふのである。

【二四四】 小春の日和麗らかに晴れて、暖日檜聲睡を思はしむ。船は蘆洲に沿うて行き、時に棹、時に搖櫓にす。水光鏡の如く、枯蘆影水にあり。時に蘆花臥して茅舎出で、菰蒲斷えて鳥

居を現はし、水鳥飛んで景届しく飛び、舟々相逢うて答語して過ぐ。(徳富蘆花「自然と人生」)

【語釋】○小春日。陰曆十月の異稱、空暗れ暖かくて春の様なので云ふ。○蘆洲。ロシヤ。蘆が生えてゐる洲。○搖船。ユルギロ。漕ぐ毎にゆるぐので云ふ。

【通解】陰曆十月頃の日和のうらうらと晴れて、日は暖く櫓聲が睡を催させる船は、蘆の生えた洲に沿うて行き、或る時は棹、或る時は搖船にする。水の光が鏡の様で、枯蘆の影が水にうつてゐる。或る時は船の通り過ぎる所の蘆花が臥して、向ふに芽ぶきの家が見え、或る時は菰蒲がとぎれて鳥居が見える。水鳥が飛んで其の日影も同じく飛び、舟同志が相逢うて互に言葉を交はして過ぎて行く。

【一四五】 左ノ文ノ大要ヲ記述セヨ

聖徳太子は佛法を以て國を教化し、伽藍を以て都を嚴飾し、そしてそれを旗幟として、大倭を科學の國、文明の國、藝術の國に改造されたのであつた。寧樂が文明の薫に飽和し朱欄丹楹の光彩に輝き渡つた事は、只管、聖徳太子の餘榮による事であつた。

(大阪朝日新聞(大正一三、臺灣高農))

【大意】聖徳太子は佛法を以て、我が國を教化し、寺を建て都を飾り、日本を科學、文明、藝術の國に改造された。奈良が目もあやな美しい建築の都市となつたのは、全く太子の遺された文化の餘澤によつ

たのである。

【一四六】 茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜に走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも詠まれる、有體なる己を忘れ盡して純客觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物に美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず、依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲烟飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情も心に浮ばぬ。蕭々として獨り春山を行く吾のいかに美しきは、猶更解せぬ。

(夏目漱石「漱石全集」)

【語釋】○銀箭。銀の箭で雨の事を譬へて云つたもの。○ひたぶる。ひたすらに、いちづ。○純客觀。純粹で少しも主觀を交へてゐない客觀、客觀とは主觀に對した言葉で自分の心持を離れて他のものとして物事を觀察すること。○景物。景色を添へる物。○市井の一豎子。シセイの一ズシ。町中のつまらない人間、豎子とは子供又は人間をいやしめて云ふ言葉。○解せぬ。ゲセぬ。

【通解】ぼつとして薄黒色の天地を銀の箭の様な雨が斜に走る中を、只一向に濡れ濡れて行く、自分を自分ではない、人の姿だと思ふと、詩にもなる、句にも詠まれるあるが儘の自分を忘れてしまつて、純客觀

通解摘釋大意篇

春

に目をつける時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しい調和がたまれる。只降る雨が心苦しくて、踏む足の疲れたのを氣にする一寸とした間に、自分ははやもう詩の中の人ではなく、畫の中の人でもない。矢張り元のまゝのまちなかのつまらぬ人間だと云ふに過ぎぬ。雲の飛び動く面白さも目に入らぬ。花が散り鳥が鳴く風情も心には浮ばぬ、さびしく春の山を行く自分のどんなに美しいかは尙更わからぬ。

【四七】

左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ

(一) 住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有りがたい世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。あるいは音楽を彫刻である。こまかに言へば、寫さないでもよい、たゞまのあたりに見れば、そこに、詩も生き歌も湧く。若想を紙に落さぬことも、鑒鑄の音は胸裡に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自心眼に起る。只おのが住む世をかく觀じて、靈臺方寸のカメラに、澆季瀾濁の俗界を、清くうららかに收め得れば足る。

(夏目漱石『漱石全集』(大正一三、宇都宮高農、海軍生徒採用))

【摘解】(一) 住みにくき世から云々——この住みづらい世から、住むのにうるさい部分を取り去つて最もありがたい所謂理想世界を、眼前にそのままに描き出させるやうにするのが詩の任務である

(二) 若想と紙に落さぬとも云々——詩歌の思ひつきを紙上に文字で書き付けなくとも、玉のやうな微妙な響(胸のうちに美しい韻律の響が起る)は心の中に起つて來る。又繪具はキャンパスの上に塗り付けなくても、目もあやな美しい色の繪は、心の中に映るのである。たゞ自分の住んでゐる世の中を、詩だと思ひ、繪だと思つて、寫眞機の小さいカメラの中に映し取るやうに、道德頹廢せる俗世間をも、自分の心の中に、清らかにうららかに收め入れることが出来れば、それでよいのである。特に詩を書き付けたり、畫を描く必要はない。

【語釋】○若想 思ひつき。○紙に落す 文字で書きつける。○鑒鑄 キウサウ 金玉の觸れあうて出す微妙な響○丹青、丹は赤、青色のことから轉じて彩色又は繪具繪のことにいふ。○畫架 繪具がくに用ふる三脚架、わく。轉じてキャンパスをもいふ。○絢爛 ケンラン 目もあやに美しいこと。○心眼 心に物を思出して見ること肉眼に對する語。○靈臺 心。靈のあるうてな。○方寸 一寸四方、小さいこと。○瀾濁 寫眞機の中の、内部を黒く塗つた箱。○澆季、道德頹廢し、人情の薄くなること。○瀾濁 コンダク にごり汚れてゐること。

【一四八】 事を成すものは氣なり。事を敗るものは才なり。天下常に才の乏しきを憂へずして氣の乏しきを憂ふ。陰謀偽計、以て巧を競ひ、智を較ぶる者は、いづれの時かこれ無からん。舉世滔々として、勢百川の東するが如き時に富り、獨毅然としてこれに逆ふものは、千百人中

一人のみ。甚しいかな、才子の多くして、氣節の士の寡きこと。(陸羯南『羯南文集』)

【語釋】 ○氣 勇氣、元氣。○才 才氣才智のこと、ここでは世才に長けてゐること。○滔々 水の盛に流るかたちこゝでは世の傾向の非常な勢を以て走ること。○氣節の士 氣概即操ある立派な人物。

【通解】 凡そ事を成就するものは、元氣である。事を失敗さすものは世才である。天下にはいつも世才ある士の少いのを心配する必要がなくて、元氣のある人物の少いことを心配する。かげでひそかに計をめぐらし、いつはりの計を立てて、氣轉器用の競争をし、智を比べる様な者はどんな時代かないであらう。いつでもあるのである。世の中全體が盛な勢で譬へて云ふと、たくさんの川が皆東流す様な時にあつて、ひとり心強くかまへて、此の勢に逆ふものは、千百人の中でわづか一人位のものだ。甚しい事よ小才の利く人間が多くて、氣概節操ある人物の少いこと。

【四九】 世に神に禱りて永世を求むるものあり。佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂莫を求む。されど形體を離れて魂魄なきを如何にすべき。その墳墓を壯大にし、金を鑲め石に刻して、名の後世に傳らんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑海幾度か變轉して墓標獨り全きを得べけんや。かくの如きは永生の道にあらざるなり。(高山樗牛『樗牛全集』(大正一三、和歌山高商))

【語釋】 ○倏忽 シユクゴツ たちまちに。○涅槃 ネハナ 梵語、滅度、寂滅又は圓寂の意。生死の因果を離れ、すべての煩惱を滅すること。○時はすべての物の破壊者なり。「時(タイム)はすべてのものを破壊す」といふ西洋の格言。○桑海の變 世の變遷の甚しいことを譬へていふ。滄海變じて桑田となる意。支那の東海が七たび乾上つて桑田となり、七たび陷落して蒼海に化したといふ故事から起る。

【通解】 この世には神に禱つて永久の生命を得んと希ふものがある。又佛に禱るものは、人生の忽に消えてはかなきことを歎いて、靜寂不動の境地に於て心の静けさを希ふものもある。然し人間は肉體をはなれて、靈魂はないものとする以上、どうとも仕方はない。大きな墓を立て、金をちりばめ、功績や名譽をほりつけて、後世に傳へようとする者もあるけれども、時はすべてのものを破壊する。幾年の風雨にさられ、時の移り行くと共に人は改まり、幾多の變動によつて滄海も桑田となるところがあるのに、墓石だけがいつまで元の儘であり得よう。こんなのはいづれも永久の生命をつづける道ではないのである。

【一五〇】 自ら節して敢て他を煩はさず、不羈獨立、其の生を營む、何の累か我が頭上に加はらむ。されど吾等はただ消極的な這般の覺悟のみを以て世に處せんことをあらず。大に節するは大に用ひんが爲めなり。簡易生活は外見に虚飾を去りたる眞面目の生活なり。獨立特行の根柢を堅固にするものなり。脚底既に動かさず、以て道を行ふべし。(加藤咄堂『修養論』)

【語釋】○不羈獨立。フキドクリツ 束縛を受けないで、ひとりだちすること。羈はきづなである。○積極的。シヨウキヨクテキ 積極的に對した言葉、保守的、引込思案を云ふ。○道般。シヤハン この、これらの。

【通釋】自分で儉約して、強ひて他人に迷惑をかけず、何の束縛も受けないで、ひとり立ちして、自分の生活を營んで行く、何の面倒が我身にふりかゝらう。であるけれども、吾等は唯引込思案のこんな覺悟を以て世渡りをしようとするのではない。大に儉約するのは大に用ひようとする爲である。手輕な生活はみえと、むだかざりとをとりさつた眞面目な生活である。獨立して暮して行く爲の根本を堅くするものである。かく足もとが、しつかりとしてふらつかず、そこで始めて我が信する道を行ふことが出来る

【一五二】 私たちが正しい人間になつて、正しい人間の生活を送るこの出来る機縁は、いつでも、そして何處にでも存在してゐる。貧しいさいふ事も、私たちが人間らしい生き方を味ふこの出来る一の尊い機縁である。裏切られたさいふ苦しさも、僞られたさいふ悲しみも、人一倍不運であるさいふ意識も、私たちにまつて、ありがたい機縁でなければならぬ。

(吉田絃二郎「小鳥の来る日」)

【語釋】○機縁。キエン 因縁、即ち機會因縁と云ふこと。○意識。Consciousness 吾人の心意の覺醒状態を云ふ、こゝでは自覺の意。

【通解】 私たちは正しい人間となつて、正しい人間の暮しをすることが出来る因縁機會は、いつでも、そして又何處にでもあるのである。貧しいと云ふ事も、私たちが人間として人間らしい生活を味ふことの出来る一の尊い因縁である。自分の豫期に反したと云ふ苦しさも、だまされたと云ふ悲しみも、人並よりは一倍不運であると云ふ自覺が、私だちにとつては、難有い因縁でなければならぬ。

【一五二】 昨日は雨の日暮し、無聊に困み、夕景始めて翫撃して、川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。時政爺の邪慳何ぞ今に執着して、假さるこゝかくの如きやみ、見るもいたはしの荒涼たる藪陰に、空しく一片の残石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事御身一たび征夷大將軍の顯榮にもほり給ひつる御運にして、如何なる前世の御宿業にかおはしけんぞ、低回去るに忍びかね候。(尾崎紅葉「草紅葉」)(大正一三、名古屋高商)

【語釋】○無聊。アレウ 徒然なること。退屈。○時政。北條時政、北條氏初代の執權、頼家を修善寺に幽し、遂に明年を被殺した。○執着。會止するまで執念深くつきまとふ意。○荒涼。荒れはて、物さびしい光景。○顯榮。顯要の榮職にをること。○宿業。スクゴフ、前の世においてなした罪。宿業は因縁によつて果に至らしめる作業。○低徊。感慨胸に迫りたちもとほる状態にいふ。

【通解】昨日は終日雨が降つて、徒然で困りましたので、夕方に至つて始めて傘をさして、川向の小山の上にある頼家公の墓に参拜いたしました。時政といふおやちのねちけたる心が、どうして今に至るまで執念深くつき纏つて、かくの如くに赦してくれぬのであらうかと思はれ、一見したのみでも氣の毒な荒れ果てて物さびしい藪蔭に、空しく一片の石を残してゐるので、この上もない痛ましい禍害をば前生にうけ、死後の耻辱を後世までも曝される事よ、公が一たび征夷大將軍といふ顯要の榮職にもなられた立派な御運であつて、何といふ前の世の罪業によつて、かやうに痛々しい目におあひなされるのであらうかと、感慨胸にせまつて、その墓石の邊を立ちもとほりして、去りかねました。

【二五三】橋を渡りて僅に行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷に窵深く陥りて、いくめぐりせる九折の後には、密樹聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を發き、愈々登れば、遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺くあらはれて、すはやこゝに、空山の雷、白光を放ちて頽れ落ちたるかき凄じかり、道の右は山を削りて長壁こなし、石幽に薜碧うして、幾條さもなく白糸を亂し懸けたる、細瀧小瀧の珊々として濺けるは、嶺上の松の調も、さだめてこの緒よりやみ、見捨て難し。(尾崎紅葉「紅葉全集」)

【語釋】○嵐氣 ランキ 山のもや、山氣。○九折 つづらなり、道などの成しく折れ曲れるに云ふ。

○珊々 サンサン サラサラと流れ落ちる。

【通解】橋を渡つて、少し行くと、日かげが冥く、山が幾重にも重つて、山氣がつめたく谷が深くおちこんでゐて、幾めぐりもした九折の後の方には、樹がこんで茂つてゐて、色々の鳥が鳴いて居り、前方では、ゆかしい草が一步一步行く路にそつて花を開き、愈々登つてゆくと、遙に木にかくれて音ばかり聞えてゐた流の水上が淺くあらはれて、其れが、すはやこゝに、深山の氣が白い光を放つて、くづれ落ちたかと思はれる程のものすごい。道の右手は山を削つて長い壁とし、石は奥深く薜は青くして、幾條となく、白い糸を亂しかけた細瀧、小さな瀧のさら／＼と流れ濺いでゐるのは、嶺上の松の音も、きつと此の糸からひきはじめた事であらうと思はれて見捨て難い。

【二五四】左ノ文ノ要旨ヲ五行以内ノ口語文ニ約メモ

謹みて案するに 明治天皇風に開國進取の國是を定め積弊を一新して庶政の釐革を斷行し、民心一時に作興し質實剛健の氣風を以て文化を開發し國運の隆々たる前古其の比を見ず、後教育に關する勅語を下して其の大綱を論し國體の尊ぶべく淵源の重んずべきを知らしめたまへり日清日露の兩戰役に偉績を奏せしは實に教育勅語の明効なり。然るに國威の宣揚せられたるに共國民の意漸く驕り動もすれば輕佻浮華に失せんことを先帝

更に大詔を煥發せられ勤儉を勸め荒怠を誡めたまへり」然れども積年の宿弊は容易に之を改むるを得ず殊に歐洲大戰の齎せる經濟界の變調に促されて人心放縱に流れ節制を失ひ國情と相容れざる外來思想と相待ちて思想詭激に趨かむとするの風あり今にして反省自覺以て中正に歸するに非ずむば社會の頽敗は遂に之を濟ふに由なからんす今未曾有の天災に際して此の聖詔を拜するに至りたる所以を思ひ恐懼益々深し。(大正十二年八月山本内閣布告) 大分高商)

【要旨】 明治維新の際は開國進取の國是、庶政蠶革の斷行によつて實質剛健の氣風を養ひ、以て國運の隆盛を來した。後教育勅語を賜うて、教育の大綱、國體尊重の淵源を諭され、日清日露兩戰後に功驗した民心浮薄に嚮ふを以て、明治大帝は大詔を煥發された。歐洲大戰の爲に、人心放縱、思想詭激となつた。それに今未曾有の天災に出會つたので、こゝ聖詔を賜はつた、反省自覺せねばならぬことである。

【一五五】次ノ文ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

南船北馬行李卸さざる所なく、春花秋月遊展遍かざるなきは、その詩に見、叙事精巧よく微を穿ち細を究め、筆墨の靈妙天馬空を行くの趣あるは、その文に現る。偉才と謂ふべし

(朝比奈知泉「蝦山陽」(大正一三、京都醫專))

【語釋】 ○南船北馬 馬や船で南北各地を旅行しあること。支那では南方は水が多くて船、北方は曠野が多くて馬上の旅であるゆゑに。○行李 旅の荷物。○遊展 イウゲキ 下駄を履いて所々方々を遊ぶこと。展は下駄の類。○天馬 天才の自由な發露を馬に譬へていふ。

【通解】 彼が南に北に到る處に旅行して、旅の荷物をおろして訪はない所なく、春花、秋の月につけて、遊行しない所がないのは、詩に於てよく表はれ、事物を述べるのが實に上手で、殆ど隠れた細かい所をも言ひ表はして、彼の筆には一種の靈あるかの如く、恰も天馬がこの大空をかけゆくといふ趣があるのは、彼の文章に現はれてゐる。實にすぐれた天才の人というて宜しい。

【一五六】 寒風の山脈走りて海に入るころ、兩箇の村を截斷す。北は船川、南は金川、透漣トウリンとして海を抱き、粉壁相望む。湊を船川といふ。立冬北海の魚龍大に驕ウツクの時、能登半島以北の裏日本海を航行するの船舶が風波を避けて、宛ら母の懷ウツクさばかり繫泊するものは佐渡の夷、小木の湊ウツク此の船川の湊ウツクあるのみ。されば、今は甚だ寂寥の一海市なりといへども、冬は九州中國、北海の賈船を簇らして頗る殷賑なり。土人呼びて山茶花の湊ウツクいふは、此の花獨り冬時に咲きほころに擬せるなり。(運嫁麗水)

【語釋】 ○透漣 キリ 斜に連る貌。○粉壁 しらかべの家。○立冬 爾經に出づ冬のこと。○北海の

通解摘釋大意篇

魚龍大に騒る云々 北海の風波の烈しい事を魚龍の躍るに譬へたもの。

【通解】 寒風山脈が走つて海に入つて、消えてゐる處を裁ちきつて二つの村をつくつてゐる、北は船川、南は金川である。此の二つの村は斜に連つて、海をいだき、海を隔てて白壁の家が相見んでゐる。湊がある、其の湊を船川と云ふ。冬北海の風波の荒れる時、能登半島から北の、裏日本海を航行する船舶が、風波をさけて、恰度母のほところの様に泊るのは、佐渡の夷港と、小木の湊と此の船川の湊とあるだけである。であるから、今は甚だざびしい一の海に瀕した町であるとは云へども、冬は九州、中國、北海の商船をむらがらして頗るにぎやかである。土人が呼んで山茶花の港と云ふのは、此の港が、獨り冬時に、さきほこるになぞらへたものである。

【一五七】 左ノ文ヲ解釋シ、妙所ニ〇點ヲ打テ

この夕、湖畔の一亭に宿す。芙蓉峰上、白雲二三片徂徠して、鸞鶴の翔舞するもの仙人の飛行するもの、夕陽を煥發して、雪晃となり、花瓣なる。稍ありて、反照收りて水天杳茫。欄干に倚りて、かの小兒の去にし方を眺むれば、流星長芒を曳きて林を貫き、迷禽斜に空を截り、飛んで霞渚のうちに入る。織月曲りて鉤の如く、水光鏤突、閑寂なること、太古の夜に似たり。惆悵、睫を交ふる能はず、我が松遂に夢を載せずして難聲を聞きぬ。(小島鳥水「木蘭舟」)

【語釋】 〇芙蓉峰。フヨウホウ 富士の山頂上が蓮の花の様になつてゐるので云ふ。〇徂徠。ソライ 往來。〇鸞鳳。鳳の一種、想像の鳥。〇煥發。かがやきあらはれる。〇霞渚。あしの生えてゐる水岸。〇鏤突。シヤクエキ 美しくとろけ光る。〇惆悵。チウチャウ かなしみいたむ。

【通解】 此の晩は朝のほとりのある宿に泊つた、富士山上には白雲が二ひら三ひら往來をして、鸞や鶴が空を飛びかける様な形をしたもの、仙人の飛んでゐる様なもの、夕日にかがやき眺つて、雪の冠の様なもの、赤い花びらの様になる。暫くして夕日のてりかへしが止まつて、水と空とが暮色に包まれて、はるばるとボツと見える。手すりによりか、つて、彼の小兒の去つた方を眺めると、流れ星が長い尾をひいて林をつきぬいて飛び、宿を求めて迷ふ鳥は、空をきつて飛んであしの生えてゐる渚に入った。三日月は曲つて鉤の形で、水の光はとろけて美しく、閑にさびしい。太古の夜の様である。何となくかなしみいたんで眠ることが出来ない。私の枕には夢をのせずして即ち熟睡をしない中に鶏の聲を聞いた。

【一五八】 左ノ文中左側ニ傍線ヲ施シタル部分ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ。

足らざることを知るは満つるに至るの路なり。至らざるを悟るは上に向ふの途なり。吾が趣味の猶足らざるを知り、猶至らざるを悟る者は幸なり。其の人の趣味將に漸く進み漸く長ぜんす。吾が趣味の幼きをも省みで、我が善しとするものを必ず善しし、我がをかしとするものをいづもをかししして、高きに遷り卑しきを改むることをせぬ者は幸無し。其の人の



心の花既に石になりて生命を失ひ居ればなり。慾望は我を桎梏す、自由なし。趣味は我を繋縛せず、自由なり。その物を得ざれば苦しみ、その願を遂げざれば憫み、吾が心を外の物の奴婢としてその使役するところなるは、慾望の然らしむるなり。慾望は人を窘しめ、趣味は人を活かす。趣味饒なる人は幸なるかな（幸田露伴『洗心録』（大正一三、高等學校））

【摘解】（一）至らざるを悟るは云々——自分に徳、才藝等のまだ十分でないことに気がつくこと、それが自分の進歩する第一歩である。

（二）其の人の心の花云々——かやうな人のうるはしい心、即ちその心の花のやうな美しいはたらきが化石のやうに固まり乾からびて了つて、成長發展の途がなくなつてくるからである。

（三）慾望は我を桎梏す云々——慾望といふものは、事業の遂行大成を期するといふ點から見ると、本心を束縛し苦める。自由といふものがない。これに反して、趣味は我慾といふものを超越したものの點から見ると、本心を束縛しない。即ち心に自由がある。

（四）慾望は人を窘しめ云々——慾望は人を急迫し自由を奪つて窮屈にさせるし、之に反して、趣味は自由に活動させるから、人を常にのびくさせ、且つ生氣あらしめる。

【二五九】 秋風の音は、人も云ひふるしたれど、疎林に星の夜を騒ぎ、荒野に薄墨の夕を吹く

いづれかあはれに悲しからざらん。長谿の霧霽れて、帷に這へる葛の葉のざわ／＼と鳴る初秋、高天雲飛んで黄蘆蕭々岸に折れ偃さんとする晩秋、皆、人の心を動し、思を惹くに足る。

（幸田露伴『洗心録』（大正一三、水産講習））

【語釋】 ○いひふるしたれど。古來色々といはれて、珍しさうにもないやうだがの意。○疎林に星の夜を。星明の夜、木の葉のおちつくした林に鳴る。星の夜疎林にといふ書方。○黄蘆蕭々。ワウロウセウ／＼。枯れ黄ばんだ蘆が寂しく風に吹かれて。

【通解】 秋風の吹く音については詩に文に古來色々といひふるしてゐることなれども、星明かな夜木の葉おちつくした林に、吹き騒ぐ風、薄墨色に暮れてゆく夕方に、はて知れぬ荒野に逢々と吹く風、どちらも物哀れであり、もの悲しい。長い谷間にかかつた霧が霽れて、帷（キリギシ）に這つてゐる葛の裏葉が、風に吹かれて、ざわ／＼と鳴る初秋、澄みわたつた空高く雲が飛び、枯れ黄ばんだ蘆が風に吹かれて、寂しく岸に打伏しさうになる晩秋、いづれも皆、人の心を動かし、もの思ひの心を惹き起させるに、十分の力を有つてゐる。

【一六〇】 左ノ文章ノ要旨ヲ六十字内外ノ假名交リ文ニテ綴レ

皇室中心主義は皇室を中心とする主義也。皇室を中心とするが故に人民を無視するにあら

す。皇室を畏れながら宗家ごし之を仰ぎ之を崇め、之を本體ごし、大和民族悉く之を擁護し、皇室の隆昌ご與に民族の繁榮を期するが如く、日本中心主義も日本を中心ごするが故に世界を無視するにあらず。凡そ世界のあらゆる長所善所八十綱打掛けて之を我に採用し、而して我が國光を白雲の垂るゝ限り、青波の洗ふ極み迄發揚せんごするに外ならず。苟も然らざらん乎、日本中心主義は、支那人が自から中華を以て居り他を夷狄視するものご何の擇ぶ所かある

(大正一三、國學院大學)

【要旨】 皇室中心主義とは皇室の隆昌是れ即ち國家の隆盛、日本中心主義とは外國の長所を取り、國光を發揚するので支那人の根性とは異なる。

【一六一】 滔々たる天下、其の弟子は鞠躬如ごして跪坐し、その先師は茵に坐し、見臺に向ふ其の間嚴ごして君臣の如きも、講ずる所迂濶にして乾燥なる、固より、情緒の感應ご同情の迸發ごを期するご難し。之を松陰が上に立たずして傍にあり、弟子にあらずして寧ろ朋友、朋友にあらずして寧ろ兄弟の情を以て相接したるに比す。其の教育の死活論ぜずして知るべし。

(徳富蘇峯||吉田松陰) (大正一三、和歌山高商)

【語釋】 ○滔々 水の盛んな貌。世間一般に。○鞠躬如として キツキウジヨ 身をかゞめて慎むこと

○跪坐 キザ 正しく坐る。かしこまる。○先師 先生、師匠。○茵 シトネ 座布 團 ○見臺 ケンダ

イ 書をよむ時の臺。○迂濶 まわり遠くて時勢の要求に適合せぬこと。○迸發 ほとばしり出ること。

【通解】 當時世間一般に、弟子は身をかゞめて慎みかしまり、その先生は座布團の上に坐つて、見臺に向つてゐる。その關係といふものは、嚴格の分限が立てられて、君と臣との間柄のやうであるが、先生の講義してゐる所を聴くと、まわり遠くて事情にうとく、面白くなくて堅苦しいのみで、勿論感情に應へて興起するとか、思ひやりの心が迸り出るといふやうなことは、望み得なかつた。この先生の態度をば、吉田松陰が弟子に對して、先生振をしないで、親しく傍に倚り、弟子待遇にせずして、寧ろ朋友、朋友の間柄でなくて、寧ろ兄弟の親しみを以て接したのと比べて見ると、松陰の教育法と世の滔々たる天下先生の教育法と、どちらが効果あるか、効果ないか、特に言はなくても明かなことであらう。

【一六二】 一泓の池水、半ばこれ蓮花。白や紅や影を水に落して、水に花あり。健鯉躍りて波紋岸に及ぶ。水樹深く閉して人籟なし。曉煙垂柳を罩めて、日未だ昇らず。(大町桂月||春草秋草)

【語解】 ○一泓 ワウ 一つの水の深いところ。○水樹 スキシヤ 水邊にある臺、屋根ある臺。○人籟 ジンライ 人聲。

【通解】 一つの池の水、半分は蓮の花で白や紅や影を水にうつして水の中に花がある様であり、遠者な

鯉が時には躍り上つて、其の都度波の紋が岸にまで及んで来る。水邊の建物は戸をしつかりとめて、人聲はしない。朝のもやがしたれ柳をこめ包んで、日はまだ昇らない。

【一六三】 嗚呼美なる哉。今や聖徳太子にあり。明治の世の隆盛は、ひそり我が國の歴史に其の比を見ざるのみならず、世界萬國にも其の倫を絶てり。我等此の聖代に生れ出でたるは何等の幸福ぞや。布衣の身、御苑に入るを得るも、前古無き所なり。聖代雨露の恩に浴するは、豈啻に御苑の菊のみならんや。(大町桂月「赤坂御苑拜觀記」)

【語釋】 ○聖太子 聖は最高の徳、最高の徳をそなへた天皇。○聖代 聖天子の治め給ふ御代。○布衣 無位無官の人。○御苑 帝室の御花園。○雨露の恩 草木が雨露は養はれる様に臣民が天子の御めぐみを受けること。

【通解】 あゝ美しい事よ、今お徳の高い天皇が上に在まし、明治の御世のさかんな事は、たゞ我國の歴史に其のくらべものを見ないばかりでなく、世界萬國にも其の類を見ない。我等は此の有難い御世に生れ出たのは、何といふ幸福であるか。無位無官の身、御園に入る事が出来るのも、昔から例のない事である。有難い御代に於て天皇の御恵にうるほふのは、どうして、御苑の菊ばかりであらうか。

【一六四】 人生終に奈何、これ實に一大疑問にあらずや。生きて回天の雄圖を成し、死して千

歳の功名を垂る。人生之を以て盡きたりさすべきか。予甚だ之に惑ふ、生前一杯の酒を楽しむ、何ぞ須ひむ。身後千載の名、人は只行樂して已まむか。予甚だ之に惑ふ。蝸牛角上に何事をか争ふ。石火光中に此の身を寄す。人は只無常を悟つて終らむか。予甚だ之に惑ふ。吁、人生終に奈何。將た人は只死するが爲に生れたるか。(高山樗牛「樗牛全集」)

【語釋】 ○蝸牛角上 「莊子則陽篇有、國三於蟻之左角、曰、蝸氏一有、國三於蝸之右角、曰、蠻氏一時相與爭地而戰、伏尸數萬、遂北、旬有五日而後反」とある。ちいさい土地に於て相争ふことを云ふ。○石火光中 新

【通解】 人生の意義目的は結局どうであるか、これ實に一つの疑問でないか。生きて天地、世の中をひくりかへす程のめざましい事業をなし、死んで千年の後まで功と名譽とを残す、人生の目的意義はこんな事を以て、し盡したとしてよろしいか、私は甚だ疑ひ迷ふ。生前に於て一杯の酒を楽しむ、どうして死後その名が千年まで残る必要があらうか云つて、人は只楽しんでそれでよろしいか、私は甚だ疑ひ迷ふ。小さな舞臺に於てあくせくと何事を争ふか、短い人生の中に此の身をよせてゐる。人は只無常を悟つてそれでよろしいか、私は甚だ疑ひ迷ふ、あゝ人生は結局いかなるものであるか。又人は只死する爲に生れたものであるか。

【一六五】 希臘印度の古哲は、徒に宇宙人生の抽象思索に耽りたるにあらず。彼等が説きし安立道義の原理を以て、嘗にその知識慾の満足に供へたるにあらずして、直に取つて以て實際人

生の主義をなせるなり。斯くてその主義を生活は、形影相離れざる關係をなし、知行合一を實現せるなり。(高山樗牛『樗牛全集』(大正一三、高松高商))

【語釋】 ○抽象。チウキヤク。箇々の事物の中から若干の屬性をとりはなす心の作用。○思案。理屈を辿つて思考をめぐらすこと。○安立。安心立命の略、吾人は信仰によつて心の向ふ所を定めて、之に安んじ、生死の間に處しても平意なこと。

【通解】 希臘印度の昔の哲學者たちは、たゞこの天地間人生の實際を離れた形而上の考察研究にばかり苦心したのではない。彼等が説いた安心立命とか、道徳義理の根本の理論を以て、一途に彼等が求めた所の知識慾望を満足させるものでもなく、直にそれを以て實際人生の主張する一定の見解としたのであつた。かうして彼等の主義と實際生活とは、物の形あれば必ずそこに影の存在するやうに、離れることなき關係をもつて、知ると同時に之を行動に表はすといふ事を、實地に試みたのである。

【一六六】 春秋寒暑幾度か去來して、佛陀入滅の時も漸く近づきぬ。今や八十年の老齡は佛陀の双肩に掩ひかゝりて、五塵の形骸漸く重きを覺えぬ。顧みれば、妙齡城を出で、山林に入り、三十道を成してより、遊化度生に盡すこと茲に五十年、一日も安逸の生を送りしこと無し。五天茲に其教に靡き、救世の大使命、方に其の完きを告げたるに遮蔑し。佛陀の入滅亦恨なしと謂ふべし。(高山樗牛『釋迦』)

【語釋】 ○佛陀。ブツダ。總ての迷ひの心、慾情を去り眞理を會得したもので、こゝでは釋迦。○五塵。ゴヂン。形骸五塵とは現實の肉體、眼耳鼻舌の五官で感覺し得る事物。○遊化度生。イウゲドシヤウ。諸方を歩き巡つて教理を説き衆生を濟度すること。○五大。五大天竺、今の印度地方。○救世。グセ。世の中を濟ふこと。○庶幾し。チカシ。

【通解】 春と秋、寒と暑とが幾度かいつたり來たりして、佛陀が入滅する時もだんだんと近づいた。今は八十歳の老齡は、釋迦の現實の身に積り重つて、其の重さに堪へ難い程になつた、ふりかへつて考へて見ると、若い時城を出でて山林に入り、三十で漸く修業を上げてから、四方に歩き巡つて、衆生を濟度することに盡すことが茲に五十年、一日もやすらかな日を送つた事がない。五天竺一帶其の教に靡き、世を救ふと云ふ大きな天から命ぜられた役目は、もはや、ほとんどちようど完全に成し遂げたに近い。釋迦は死すとも、世に思を残すことはないといつてよろしい。

【一六七】 甲人乙人を議す、議せらるゝ者は議せられしによつて、一絲をも増さず一毫をも減ぜざるなり。たゞ憐む、議する者は即ち増減上下する能はずして、自己の學問見識の深淺高低抱負襟懷の大小寛狭を露出し、而してまた丙人の議する所なるを。

(幸田露伴『大正一三、早稻田大學高等學院』)

【語釋】 ○議す。批評する。多くは惡口をいふのに用ふ。そしる。○一絲。極めて少量の意。絲は一の

萬分の一。○一毫。同前、毫は釐の十分の一、釐は一の百分の一。○標・度・量、胸の中。

【通解】 甲人が乙人を彼此と批評する場合に、批評されるものは、どう批評されても、乙人の人物、事業言論の價値を、少しも増しも減りもするわけではないのに、その上、却て乙人を批評した爲、甲人自分の學問の深いか浅いか、見識が高いか低いか、度量が大きいか小さいか、心が寛いか狭いかをさらけ出して人に知られ、その爲に遂には丙人に批評せられることであるよ。

【一六八】 酒入れば舌出づ。舌出づれば是非生ず。是非一たび生ずれば彼我相争ひ、甲乙互にそむきて、心また平なる能はず。我即ち修羅道に墮す。

(幸田露伴) (大正十三、早稻田高等學院、東京外語)

【語釋】 ○修羅道 シユラダウ 佛教でいふ六道の一つで、阿修羅族の世界。絶えず鬭争を事とする我利我執の亡者の群つてゐる所。

【通解】 酒を飲むと舌といふ魔物が飛び出す。その舌が出ると、そこに善いとか悪いとかいふ議論が出来る。是非善惡の議論が起つて来ると、自分と他人との衝突が始まり、甲と乙とは互に意見反對となつて、不平の氣漲り、遂に喧嘩が始まる。即ち自分は修羅道に墮落してしまふのである。慎むべきものは酒である。

【一六九】 内部に待つものなければ、外力の來るに應ぜず。東風春雨は草木發生の因みなれども、種子下に含むなくんば如何。疾疫の氣勢を逞しくするも、健全にして内に憊む所なき身體を犯すこと能はず。(大正一三、高等學校)

【通解】 すべて物事は、そのものゝ内部に、外から力が働きかけないと、いくら外部から力が加はつてもそれに應じて受け入れるものではない。例へば東風が吹き春雨が降るが、これ等は草木が發生する原因とはなるが、種子の下もえといふものがなければ何とする。決して草木は發生しまい。如何に流行病が勢を逞しうしても、無病健全にして、内部に故障のない身體を犯すことは出来ない。

【一七〇】 維新の俊傑は大義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り、至誠世界に立つを以て日本の抱負とし、一視同仁、天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を説破討伐勳誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職を考へたるなり。其の元氣の宏壯なる、轉た人をして奮興措く能はざらしむるものあり。(大西祝||思潮評論)

【語釋】 ○俊傑 シュンケツ 常人にすぐれた人物。○大義名分 重大なる人の踏むべき正しき道、君臣の義理、名に伴ふ分限。○抱負 胸にいだき持つてゐる所の志望。○權謀術數 いつはりのはかりごと

と手段。○一視同仁。イツシドウジン 一樣に視なし、同様にいつくしむ意。天下の人を親疎の別なく同じやうに愛すること。○勦誅。サウチユウ 征伐に同じ。○末戰。その人の天より受け得た職分。

【通解】 明治維新の際のすぐれた人物は、大義名分の觀念を世界一般に布きひろめることを以て、日本人の抱負と考へ、かりのいつはりの謀や手段を去つて、まごころを以て世界に立つを以て、日本人の抱負と考へ、世界を一樣に見て愛し、天地間の大きな人道をよく呑込み、天に代つて世界のよこしまな道を説き破り、討伐をし、ほろぼしてしまつて、萬國安全の道を示すを以て、日本即ち日本人の天職と考へたのである。其の元氣の大ききかんなことは、思はず人をして、ふるひ興つて、其の儘にして置くことの出来ない様にさすものがある。

【一七一】 詔書ノ左ノクダリを平易ナ口語文デ謹釋シナサイ。

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜センコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツチャ是レ實ニ上下協贊振作更張ノ時ナリ。(詔書)

(大正一三、山口高商)

【語釋】 ○輓近。輓は晩に通ず、近頃、最近。○浮華。上ればかりはでやかなこと。重厚實質の反對。

○放縱。ハウシヨウ ほしいまま。氣儘 ○輕佻。思慮なく輕はずみなこと。○詭激。言行が過激に流れること。○前緒。ゼンシヨ 先人の遺した事業。詩經に、「續ニ大王之緒」と。こゝでは明治維新の大業を指し奉る。○紹復。先業をうけついで振ひ興すこと。紹はつぐ。○協贊。ケウリク 共に力を合せて助けること。○振作。シンサ 大に起す。振興に同じ。○更張。更めて力を張る。一旦緩んだものを緊め直すこと。

【通解】 近頃學術がますます開け、人間の智識が日に日に進んで来た。しかし、上ればかりはでやかで氣儘な習慣が次第に起つて來、思慮なく輕はずみで、言行が常道をはづれて、過激に陥る氣風も亦生じて來た。今のうちにこの惡習を改めなければ、時によると、先人の遺しておかれた事業を失敗してしまはしないかと、深く氣遣ふのである。まして、今度の災難は非常に大きくて、文化を再び盛に興すことや、國家の力を振ひ興すことは、いづれも國民の精神の力如何によるのである。この故に今は、上下のもの共に力を合せて助け、氣風をふるひおこし、國家を引き緊めて直さねばならぬ時である。

【一七二】 次ノ文章ノ大意ヲ五行以内ノ短文(口語文ニテ可ナリ)ニテ答ヘヨ。

古より文筆の人ならぬ人の文章の神采奕奕、風趣津々、人をして或は襟を正し、或は涙を落し、或は奮ひ、或は悦び、或は深省を發し、或は手の舞ひ足の蹈むを覺えざらしむるものあり。それ等こそ、眞に胸中萬斛の水、自らにして筆端に迸り、楮表に溢れたるものさはいふべ

けれ。愛國の忠臣、思親の孝子、身を忘れて道の爲にせる哲人なごの文章は、皆それなり。惻惻人を動かす文は、區々たる使字の巧、用語の麗なるより來らずさ、人の言ふもこの間の消息を語れるなり。(大正一三、神戸高商)

【大意】昔から素人の書いた文が、却つて文人のよりも深く人を感動させるものがある。これが胸中の眞情の溢れ出て、文章になつたものと謂つてよい。忠臣孝子哲人等の文章は皆それである。事實、人を感動させる文は、形式の技巧によらず、至誠から來るのであるといふが、この事をいつたのである。

【語釋】○神采奕々 シンサイエキ／＼ 神の作られたやうな色あやが、光り輝くさま。文章に精彩のあること。○風趣津々 一種の風韻が盛にあること。○楮表 紙面、紙上。○惻々 ソク／＼ 痛む貌人の胸底にひびくこと。○消息を語る 事情をいふ。

【一七三】惟ふに芭蕉が俳想の由來は、その禪を修せしこも、確かに心境を拓ける一因なるべし。されど獨これのみには非ざるべし。芭蕉は早くより風月の情を解し、また雜然たる俗世間の功名富貴以外に、人生の眞味を味ふべき別天地あるこも悟れり。加ふるに屢世故にあひて、まのあたりに人事の幻化に等しきを見ては、むしろ清風明月を以てわが家爲すに如かじ

と觀じけんは勿論のこもなるべし。かくて俳諧の性質は芭蕉の性格と相俟ちて、こもに渾然たる正風の一體は成りたるなり。(落合直文)

【語釋】○俳想 俳諧の思想。○禪 佛の修養の一つ。○心境 心の境域。○風月の情 花鳥風月を樂む心、風流心。○世故 浮世の故障、出來事。○渾然 コンセン すべて一つになる形容。○正風 芭蕉の起した俳諧の流派の名。

【通解】考へて見るのに、芭蕉が俳諧思想のよつて來る所は、佛教の禪を修養した事も、確に心を拓いた一つの原因であらう。であるけれども、これだけではあるまい。芭蕉は早くから風流を解し、また煩はしい俗世間の功名や富貴の外に、人間の世の中のほんたうの味を味ふへ別天地があること悟つたのである。その上度々世の出來事に出あつて、目の前に人間の事柄のまぼろしに同じものであるこも見えては、一層の事、風月を以て自分の生活すべき地とするのにこした事はないと考へたであらうことは、云はずとも知れたことであらう。この様にして、俳諧の性質人格と相俟すけて、こもにすべてを一つにした正風の一つの俳諧の體は、出來上つたのである。

【一七四】左ノ文ノ大意ヲ極メテ簡明ニ記セ。

學ぶ所を行ひて以て宜しきを得れば、學始めて其完全を稱すべく、行ふ所、學に従つて

戻らざれば、行ひ始めて其の適切を誇るべし。知行合一は畢竟學者の標的たり。天下の學者何ぞ限らんや。而も其の行ひに於て、茫々然として見る所少きは何ぞ。所詮學者の信する所堅からざればなり。知る所以て行ふ、一見甚だ尋常容易の事なるが如し。然れども是れ學者としての最大難事なり。行爲は常に責任を伴ふ。一個人として社會國家に其の人格の地歩を占得し、其の生存の意義を明らかにする所以なればなり。其の所信を公白し嶄々然として依りて以て其の一念を貫徹す。是れ事に處して首鼠兩端を持する者の爲し能はざる所なり。機に臨みて狐疑猶豫する者の爲し能はざる所なり。自己の利害を秤量し、權勢に依附する者の爲し能はざる所なり。抑々又然る所以の理に徹底し、中心より其の眞義を會得したる者に非ざれば爲し能はざる所なり。苟も之を爲すには、一世批議の衝に當り、毅然として自ら立つの覺悟あらんを要す。さもあらばあれ、眞正の學者は事遂に是に出でざるべからず。(大正一三、陸士豫科)

【大意】知行合一が畢竟學問修養の目的であるが、これが出来ないのは、所信が堅くないからである。知行合一は何でもないやうだが、爲し難いのは行爲に責任があるからである。その所信を公然表白し、それを斷行して一念を貫徹することは、狐疑猶豫し、權門に附諛する者は出来ない。その事の眞と義とを會

得したるものでなくば出来ない。それに就ては世の批評の衝點となつても、毅然として自立するの覺悟を要す。眞正の學者なら所信公表、斷行に出なくてはならぬ。即ち知行合一でなくてはならぬ。

【二七五】風水相擊ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものにあらず。自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。(大正一三、旅順工大)

【語釋】○孤掌 片方の手のひら。○感興 詩の興味。○旋り メグリ。

【通解】風と水とがうち合つて波を生ずる。又片方の手では鳴らせないやうに、詩的興味は書齋の中にとち籠つてゐては起るものではない。やはり興味を喚び起すものに觸れなければならぬ。そこで自ら進んで自然の中に住んで接觸させるやうにせよ。然れば自然の方も、亦吾が心中に来て宿り、こゝに興味を與へてくれるのであらう。

【一七六】左ノ文ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ。

分にあらざるの福故なきの獲は、造物の釣餌にあらずんば即ち人生の機研なり。此の處處を着ぐるこゝ高からずんば、彼の術中に墮ちざるもの鮮し。(大正一三、東京外語)



【語釋】○獲 獲物。○造物 宇宙萬物を主宰する神、大自然。○釣餌 テウジ。○機阱 キセイ 陥し穴、わな、阱は奔におなじ。

【意義】 自分の行爲、自分の功業に對して不相應な幸福とか、取り入るべき理由のない獲物(利得)といふものは、自然が人を釣る爲の餌か、さもなければ、人生にかけた人間界の陥し穴である。こゝに目を高くつけて、この福得に應對しなければ、必ずこの釣餌が陥し穴にかゝつて、思ひがけない破滅に陥らないものが少いのである。一攫千金といふことは深害すべきことである。

【一七七】 獵夫は往々遠樹に巢くへる鷹鳩を見るに忙しくして、眼前の叢中に巨雉あるを知らざるこゝこあり。人に注意せられて足下を顧みる時は、已にその健翼を揮つて飛び去りたる時なり。古人が「盡日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲。歸來笑撚梅花嗅。春在二枝頭」已十分」を詠じたる、これを高遠に求めて、卑近に失する。此の間の消息を道破したる好警句といふべし。然れども、これあに一人の事のみならんや。國家また往々この類のこゝこなきにあらず。(竹越三又(南國記))

【語釋】○巨雉 キョチ 大きな雉。○盡日尋春云々 宋の羅大經の著、鶴林玉露と云ふ書に出てゐる。○警句 短い言葉で人を驚かし誠める言葉。

【通解】 かりうどはまゝ、遠方の木に巢をつくつてゐる鷹や鳩を見つける爲に忙しくて、却て目の前の草むらの中に、大きな雉の居ることを知らない事がある。人に注意せられて、足下をふりむく時は、雉はや其の逢者な翼をふるつて飛び去つた時である。古人が「一日中春を尋ねて、遂に春その物を見出さず、只空しくわらぐつをはいて、雲のかかつてゐる丘のほとりなまねくあるまはつた、歸つて来て庭先の梅花一枝を手折つて、指先でひねつてかいで見ると、終日尋ねて得なかつた春の趣は、枝の先に在つて十分にあふれてゐる」と詠じてあるは、これを高くて遠い所に求めて、手近の事には、却つて手ぬかりになる此の間の様子を云ひやぶた好い警句であると云つてよい。さうであるけれども、これは一人の事ばかりであらうか、決して一人事ばかりではない。國家又まゝ此の類の問題がないではない。

【一七八】 明治の文人、何ぞ不幸短命の士多きや、大西操山、高山樗牛、正岡子規、尾崎紅葉、落合秋の家、諸氏、所長各異なれども、いづれも一世に雄飛せる詞人たりき。しかも皆四十前後にして召されて白玉樓中の人となりしにあらずや。昨春、藤岡東圃を哭するに及びて、いよいよ天の人才を嫉むの甚しきを悟りぬ。(芳賀矢一「東圃遺稿序」)

【語釋】○所長 得手とする所。○雄飛 勢よく飛ぶこと。即ち勢力を振ふこと。○白玉樓中の人 死を云ふ、天帝より白玉樓の記を作るやうに命ぜられた「書言故事」に出てゐる故事を引く。

【通解】 明治の文學者はどうして命の短い人の多い事ぞ、大西操山、高山樗牛、正岡子規、尾崎紅葉、落合秋の家の諸氏は、其の得手とする所は各ちがつてゐるけれども、どれもどれも一天下に大勢力を振つた文章家であつた。然かも皆四十前後で天帝から召されて白玉樓中の人となつたのではないか。(死んだではないか) 昨年の春、藤岡東圃の死を悲みなげくに至つて、いよいよ天の人の才能を嫉む事が甚しい事を悟つた。

【附記】 ○操山 名は祝、哲學者にして文章の才あり、○樗牛 名は林次郎哲學者、羊學を專攻す、文章は特に評論の筆に長ず。○子規 名は常規、俳人にして、文章家。○紅葉 名は徳太郎、小説家、○秋の家 名は直文、國學者にして歌人、いづれも明治文學者頭角を抜く者である。

【一七九】 人の害、安逸より大なるはなし。戸樞は蠶せず流水は腐らず。故に人の安逸を好むはたゞ業を成す能はざるのみに非ず、又病を醸すの基なり。(大正一三、岐阜高農)

【語解】 ○安逸 働かずに遊んで暮すこと。○戸樞 コスウ 戸のクルルとて開き戸の閉閉する中軸○蠶 ト 虫喰ひ。

【通解】 人の害をなすものゝ中で、働かずに遊んで暮すくらゐ、大害はないのである。譬へば、戸のクルルは常に働いてゐるから、虫が喰うといふこゝさはないし、流水は又活動してゐるから腐敗しない。それを同様に、人が安逸を好むのは、單に仕事が出来ないばかりではない、又病氣を次第に引きおこす原因となる。

(附記) 戸樞は蠶せず云々 呂氏春秋の語であるが、子華子に持養の道を説いて、「流水之不腐、以其逝故也、戸樞之不蠶、以其運故也」とある。

【一八〇】 靈輻殯ヲ啓カセラレ饋奠方ニ陳ス群臣咸集リ友邦畢ク會シク聖儀ノ幽翳ヲ痛ミ奉ル恭ミテ惟ミルニ明治天皇叡智神ノ如ク峻徳天ニ倅シ冲齡極ニ登リ武ヲ神皇ノ肇基ニ踵キ給ヒ國歩ノ艱難ヲ排シテ維新ノ大業ヲ成シ五條ノ誓文ヲ立テ、百代ノ國是ヲ定メ給フ。(大正一三水原高農)

【語釋】 ○靈輻 レイシ 靈柩を載せたる車。○殯 ヒン 遺骸を假に歛めてある舎、あらしのみやと申す。○饋奠 キテン 神に供へる供物。○聖儀の幽翳 セイギのユウエイ 陛下が冥界におかれにること。○翳はかける。○峻徳 高く大きな御威徳。○冲齡 幼齡におなじ、幼き頃。○極に登り 踐跡におなじ、皇位をつぐこと。○肇基 テウキ 國の礎を初め定めること。

【通解】 露柩車が只今殯殿(あらしのみや)をお出ましになり、御供物を今陳べて御供へ申しあげた。群臣は一同集り、友誼を結んでゐる國の國使ども皆參列して、同じく陛下の御昇天になりました御事を悲み奉ります。恭しく考へてみますれば、明治天皇はすぐれた御智慧は、謹り知りることの出来ないこと恰も

神のやう、高大な御威徳は天空の高きと等しい。御幼年の御時に皇位に御即きになり、御武威を以て、神武天皇が國の大礎を定められた大御旨を承けつぎなされ、國家の萎微してゐる極めて難儀な時であるにも拘らず、維新の大事業を成就なされ、五ヶ條の御誓文を神明に立て、御誓ひなされ、永久にかはることなき國家の大方針を御定めになりました。

【一八一】附線ノ語ニ讀假名ヲ附シ、全文ヲ通釋セヨ

陛下大統ヲ承ケ鬚續ヲ續キ給ヒ皇祖皇宗暨列聖ノ宏謨ニ遵ヒ丕基ヲ鞏固ニシ德光ヲ宣揚シテ

天職ヲ全クセントシ宵衣肝食聖衷ヲ勞シ給フ。(大正一三、東京高師)

- (一) 鬚續 イセキ うるはしき成績。歴代帝王の御事業。
- (二) 宏謨 カウボ 大いなる計謀。
- (三) 丕基 ヒキ 大いなもとゐ。天皇の御位。
- (四) 宵衣肝食 セウイカンシヨク 未明に起きて正服を着し、日入りて食事をする事。天皇が國政に御精勵なさること。
- (五) 聖衷 セイチユウ 天皇の大御心。宸襟におなじ。

【通解】 天皇陛下は天位をおうけになり、大いなうるはしい御遺業をおつぎになり、皇祖天照大神、皇宗神武帝および御歴代の天皇の大いなる御計謀にしたがつて行はせられ、皇位を堅硬なものとし、御後

威の光をあげ廣めて、天から授けられた御職分を完全に果さんと志されて、日夜國政に大御心を痛めてお盡しなされた。

【一八二】吉野朝六十年の久しき、僅に、大和の邊隅に、天子を奉じながら、京師の精兵に抗して、甚しき挫折をなさず。王事に勤むる士心を鼓舞して、能く義故を糾合し、足利氏をして寒心せしめしもの、實に公が忠義の精髓を得たりし故にあらずや。(笹川種郎)

【語釋】 ○邊隅 片すみ。○挫折 折れくじけ 折れること。○鼓舞 獎勵すること。○義故 恩義ある緣故の者。○精髓 純粹な骨髓。

【通解】 吉野朝は六十年の永い間、僅に大和のかたすみかに於て、天子をいただきながら京都のよりぬきの兵に敵對し、ひどく折れくじけもせず。天皇の御爲に盡すと云ふ武士の心をはげまして、能く恩義をかけた緣故のものをよせ合せ、足利氏をして恐れさせたものは、實に公が忠義の純粹骨髓を心得てゐたからでなからうか。

【一八三】山高きが故に貴からず、花驕れるが故に妙ならず。籬落につき、流水に漂ふ、名もなき小草の花にだに、我等が拾ふべき力ま榮ま恵まは、いざさはにあるをや。(網島梁川引自然の命)

【語釋】 ○籬落 垣根、○さはに たくさんに。

【通解】山は高いからと云つて貴くはない。花は咲きほこつてゐるからと云つて、よくすぐれてゐるとも云へない。垣根に附着したり又流れる水に漂ふ無名の小草の花にすら、我等の感受すべき力と榮と恵とは甚だ澤山あるのを思ふと、尙更の事である。

【一八四】左ノ文ノ大意ヲ把捉セヨ

政治は特に簡易を尙ぶ。弊を去り民を拯ふは必ず簡恕に存す。網を捨て網を修むれば、煩も理め易しといはれてゐる。大綱を遺れて小綱を論じてゐるやうでは、事が功を見るには至らない。簡には明白の意が伴ひ、恕には仁慈の情を含む。(大正一三、富山藥專)

【大意】政治は簡恕の二字に存する。簡とは明白、恕とは仁慈の情の意である。民を救ふには迅速に困つてゐる處を救ふべしだ。細則を云々するよりも、その大綱の處をしつかり治めれば善政となる。

【一八五】咲く花のほふが如く盛なりし奈良の舊都を弔へば、風蝕雨打こゝに千又二百年を過ぎたれども、七堂伽藍の偉觀今に都の面影を残して、そゞろにありし世を偲ばしむ。春の日うらくして志貴葛城の峯々に霞たなびける時、まづ法隆寺を訪へ、日東帝國第一の古名刹は、寂々として菜畝麥隴の間に眠るが如し。(大阪朝日新聞)(大正一三、國學院大學)

【語釋】○咲く花のほふが如く。萬葉集、小野老の歌に、「昔丹よし奈良の都はさく花の、句ふが如く今盛なり」を引いたもの。○千又二百年。又はイウ、有は音通。○七堂伽藍。シチダウカラン。七堂(東方丈、西方丈、鐘樓、鼓樓、方塔、佛殿、山門の併稱のある大寺。大寺の規模のこと。伽藍は僧伽藍の略、出家の住居して佛道)を講學修行する所。支那、日本の寺院に相當す。松尾芭蕉に、奈良へ重七堂伽藍八重櫻の句がある。○古名刹。コメイサツ。古い名高い寺院。○麥隴。バクロウ。麥はたけ、隴はうね又ははたけの義。

【通解】丁度咲いてゐる花の句ふが如くに、今盛りであるといはれた奈良の古い帝都を訪れると、風に虫ばまれ雨に打たれて、千二百有餘年の年月を経てゐるけれども、大寺の雄大なながめは、やはり今日までも昔の都の面影を残して、昔は立派なものであつたらうといふ感慨を何となう思はせる。春の日影が長閑で、志貴や葛城や、そこちの山々が霞がかつた頃に、まづ法隆寺に行つて見給へ、日出の帝國第一の古い名高い寺院が、あたり物靜かに菜の花畑や麥畝の間に眠つてゐるやうである。

【一八六】菜花一路、胡蝶人相追ふ。春風のゆくへそれ知られて、柳の糸なびくもなく動く處、水車ゆるくめぐり、はねつるべ音なくして小犬籬根に眠る。遙なる桃林の上に塔尖の出づるは、伽藍あるにや。詣でて歸るこおほしき村娘のひこむれ、相和して歌ふ聲、漸く遠く、漸く細く、つひに霞の中に消えゆく。(大町桂月)

【語釋】○胡蝶人と相追ふ。蝶が道を行く人の前後を飛びまはつてゐるのを面白く形容したもの。○柳の糸。柳の枝の糸の如く細く垂れてゐる形容。○伽藍。ガラン。寺のこと。

【通解】菜の花のさいた中に通じてゐる一筋道を通る人の前後に、胡蝶が舞うて、人と相追うてゐる様である。柳の枝の糸の如く垂れてゐるのが、春風になびいて、春風はどの方向へ吹いてゐるかが知られる。その柳のそばに水車がゆつくりとめぐつて、はねつるべは音もなく、小犬は垣根にねむつてゐる。遠か遠方の桃の林の上に塔のさきの出てゐるのは、寺があるでもあらうか、寺まわりの歸りらしい。村娘の一群、互に聲をそろへて歌ふ聲、次第次第に遠く次第次第に細く、道には霞の中に消えてゆく。

【八七】 けにや祇園精舎の鐘諸行無常の聲に響き、娑羅雙樹の花盛者必衰の色に出づ。萬里の長城未だ全く成らずして、山東既に亂れ、坑灰なほ温かにして咸陽の宮殿三月紅なり。あはれ萬世無窮三期せし始皇が遺圖も、忽ち二世にして盡きぬ。(大町桂月「黃菊白菊」(大正一三、岐阜高農))

(語釋) ○祇園精舎の鐘。ギョウシヤウジヤのカネ。「二八」に註してある。○諸行無常。一切の萬有はすべてはかないもので、頼みにならないこと。一切の萬物は因縁所成のもので、常住不變ではない。三世を流行する有爲の事物である。この有爲の事物は皆無常であつて、生滅輪廻して常なきものである。

○娑羅雙樹。サラソウジユ。「二八」に註してある。○盛者必衰。シヨウジヤヒツスキ。旺盛なものといへども、いつまでも永續するものでない。必ず衰へる時が来る。○萬里の長城。秦の 皇帝が夷狄の侵入を防ぐ爲に、萬里の長城(壘壁)を築き、これで天下が萬々世にまでも傳はるものと思つてゐた。○山東。山東省地方で、陳吳等の亂をさす。○坑灰。始皇帝は過激思想の宣傳は儒者と書籍とによるものと信じて、天下の書を焼き儒者を坑にして殺した。

【通解】まことに祇園精舎の鐘の聲には、一切の萬物は常住不變のものでないといふ意味に響き、娑羅雙樹の花の色には、盛な者は必ず衰へるといふやうに見える。彼の萬々世に傳へんとして秦の始皇帝が萬里の長城を築いたが、まだ出来上りもしない中に、山東の陳吳は亂を起し、儒書を焼き儒者を坑にしたほとぼりが、まだ冷えきらない中に、咸陽宮殿は烽火三月の長きに亘つて兵火にかゝつた。あゝ萬世はてしないと思ひ定め。始皇帝が遺した謀も、忽ち二世で破れてしまつた。實にはかないものである。

【二八】 荒涼たる山河、當年の殘礎を覚めむこして又得べからず。歌舞の地、烏雀空しく悲しみ、古塔月影の寒きに銷し、蔓草武夫の夢を封ず。夕陽に昔を問へば、悲風千里より來り、荒墳に英雄を弔へば、零露長へに冷かなり。(大町桂月「黃菊白菊」)

【語釋】 ○覺め。モトめ。求に同じ。○蔓草。はびこつた草、芭蕉の「又草やつはものど」の夢跡を

暗に引いたもの。

【通解】 荒れはてた山や河即ち土地に於て、其の昔の残つてゐる土臺石をさがし求めやうとしても、もはや見出すことは出来ず。昔歌ひ舞うて榮華をつくした土地も鳥雀が只悲しきうに鳴いて、古い塔は寒さうに月光をあびてすたれてゆき、はびこつた草は武夫の花々しく戦つた夢の様な昔の跡を深くとざしてゐる。夕日に向つて昔の事を問うて見ると(想うて見ると)悲しい風が遠くより吹いて來るし、荒れすたれた墓に昔の英雄を訪ひ慰めると、露ばかりは昔とかはらず落ちて冷やかである。

【一八九】 普天の下、率土の濱、玉土王臣にあらざるなし。常燈上に輝き、國民其の下に共同一致して一定の理想あり。一定の理想を追うて進めば、人をして極端に奔り、邪路に陥るを得ざらしむ。草も木も我が大君のものなるに、何處か鬼の棲所なるべきぞ。理想の光は空假の幻に終ることなく、現實は時々刻々に、これに向つて近づかんすれば、國民は希望に充ち、現世を虚像罪惡の巷として厭ふことなく、樂觀的に人生を觀じ、世間的活動を以て人間の務むす

(藤岡東圃「國文學史講話」)

【語釋】 ○普天の下。フタンのシタ。普は徧くで天の覆ふ限りの下。○率土の濱。ソツトのヒン、率は循、濱は際涯の意、地の續く限り詩經小雅「普天下莫非王土、卒土濱莫非王臣」とあり。○理想。

吾々がやがて到達し得べきものとして考へる完全、圓滿、最高、最善の目的又は概念。○假空の幻。カクワのマボロシ。空にしてかりそめな幻の様な空想。

【通解】 天の覆へる限り、地の續いてゐる限り、天皇の治め給ふ土地、天皇の治め給ふ臣民でないものはない。いつも消ゆる事なき常燈に比すべき天皇は、上に輝いておいでになり、國民は其の下に力を合せ心を一つにして、きまつた最善最高と考へる目的がある。きまつた最高最善目的に向つて進むから、極端にはしり、よこしまな道に陥る事は、出来ない。古歌に、國土は云ふに及ばず、草木に至るまで皆我が大君のものであるのに、何處か君にそむく鬼どものすみかであらうと。國民の抱いてゐる最高目的は、たゞ空想に終ることなく、事實はこの理想に向つて時々刻々に近づかうとしてゐるから、國民は望みに充ち、此の世をいづはり多き世、罪惡多き場所として、きらふことなく、愉快だと云ふ風に、此の世、人生を見て、此の世に於ける仕事を以て人間第一の務とする。

【附言】 普天の下云々詩經にある、古歌は紀友雄の歌。

【一九〇】 左ノ文章中右側ニ◎印ヲ附シタル漢字ニ假名ヲ附ケ且ツ左側ニ傍線ヲ施シタル部分ノミヲ解釋セヨ

日本國民の最大特色は團結の強固なるにあり。小にして家を成し、大にして國を成し、家族は團樂して一人の如く、國家は和諧して一家の如し。支那の東海を縫うて、しかも大

通解摘釋大意篇

陸に離れたる洋中、超然たる仙洞高く墻壁を築いて、外犯すべからず、内紊るべからざる 頑固なる國民は養成せられたり、而して此の國民はあやに畏き天つ日嗣を上に戴き奉る。 楫なき舟は行方を知らず、主腦なき團體は蜘蛛の子を散るべき鳥合の衆なり。國民にはこれを導くべき理想の光なかるべからず。天つ日嗣は赫耀(五)として千秋動くことなき大光明を申すも恐れあり。一道の靈光脈々として古今に涉り、仰望せる國民は精髄をこゝに養ひ、理想をこれに求めて活動す。御裳濯の流連綿(八)として窮るなく、金甌無缺の團體は、其の國民をして無限際(七)に無限力を發揮せしむべし。(藤岡東圃「國文學史講話」(大正一三、千葉醫大))

團樂 ダンラン 家庭の仲よいこと。鳥が仲よく一團となつて、枝に横んでゐる貌。  
和譜 ワカイ やはらぎかなふこと。  
墻壁 シヤウヘキ 障害物の譬、土のかべ、石のへい。  
外犯す ソトチカス 外敵が侵入する。  
内紊る ウチミダる 國內の紊亂してゐる。  
楫 カヂ 船尾につけて、進行を定める船具。

行方 ユクテ 行くべき方向。

蜘蛛 クモ さゝがにともいふ。

鳥合 ウガフ 纏まることない。鳥はナシの意。

赫耀 カクエウ 輝き光ること。

御裳濯 ミモスソ 伊勢神宮の側を流れる御手洗川の名。皇統の意に用ひる。

金甌無缺 キンオウムケツ 壯麗にして完全なる物事のたとへ。金にて造れるかめ。

【摘解】(一) 超然たる仙洞——世の中からぬけいでてゐる仙人のすむ別天地。仙洞は仙人の住居。古く支那で、日本は蓬萊の仙島と考へられてゐたので、轉じて上皇の御所をも申した。

(二) 外犯すべからず云々——外敵が侵略することも出来ず、國內でも君臣分あり、秩序をみだすことの出来ない強固の團結の國民。

(三) あやに畏き天つ日嗣——この上もなく勿體ない天皇。天つ日嗣は天位。

(四) 楫なき舟は云々——楫のない舟は、どこをあてどとなく波のまにまに漂ひ流れる。

(五) 蜘蛛の子と散るべき云々——蜘蛛の子が散るやうに、ばらばらに散つてしまふ。一致合體することのない衆合。

(六) 千秋ゆるぐことなき云々——千歳の後までも動搖することのない大なる光明と申すのも畏多いことだが(國民を照らして道德、智識、信仰などの力を授けること太陽の光の如しの意)

- (七) 精髓をこゝに養ひ云々——根本精神をこゝから養つて來、理想(到達せんと欲する窮極の目的)をこれに於て求めよ。
- (八) 御裳濯の流云々——皇統はいつまでも續いて絶えることなく。
- (九) 金甌無缺の國體——他より侮を受けたことない完美な國柄。
- (一〇) 無限際に無限力を云々——永久に限りない力(理想の力)を表はし振はさせるであらう。

【一九一】 國破れて山河ありといふも、しかも天上の明月の長へに渝らざるに較べば、山河も尙桑滄の變あるを免れじ。されば人生古今の盛衰を瞰下して、しかもみづから一分の隆替を感ぜざる月が、過去世の追憶に際して、最も有力なる媒介者たるは、極めて自然の事なるべく月によりて遠人を懷慕する情も、同一の起原を有すべし(高山樗牛「樗牛全集」)

【語釋】 ○國破れて山河あり 杜甫の春望の詩に、「國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪」○桑滄の變 うつり變りの早く且つ甚しいこと「桑田變じて滄海となる」と云ふ言葉より來る。○隆替 リユウタイ 盛衰に同じ。

【通解】 國家が亡びて山河が其の儘にあるといふけれども、天の明月が永久に變らないのに比すると、山河も桑滄の變あるを免れまい。であるから人の世の中の、昔から今までの盛衰をみおろして、その、上月自

身は一分の盛衰を感じない月が、人が過ぎ去つた世を思ひなつかしむに際して、最も力ある媒である事は極めて自然の事なるべく、月によつて遠方にある人を思ひしたふ情も同じ原因があるであらう

【一九二】 偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲す所は天才の筆亦能く之を爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは、恰も名山大川の間に逍遙するに似たり。されば善良なる讀書は、能く眠れる趣味性を警醒し、能く之を啓發し助成し、清新なる思想斬新なる筆力を涵養するものなりせば、予は目下の讀書界を警醒し指導すべき唯一の急務は、之に讀書の選擇を教ふるにありと信ぜんす。(高山樗牛「樗牛全集」(大正一三、桐生高工))

【語解】 ○天才 生れながらにして、才能のすぐれた人。こゝでは大文學者、大詩人の意。○名篇大作 文學上の偉大な著作物。○親炙 シンシヤ又はシンセキ 親しく近づいて其の人から教を受けること。炙はあぶる、その物に接すること。○斬新 ザンシン 最も新しいこと。斬は特に甚しい形容に用ふ。

○涵養 次第々に養ふこと。【通解】 偉大な文學は、その感化力に於て、影響する所偉大な自然に近似してゐる。自然が人間に爲す働きは、天才の筆を以てても、すれば出来るであらふ。文學上の偉大な作品に親むといふことは、丁度名山大川の間をぶらぶら歩きするのと同じやうなものである。それ故、善良な讀書は、眠つてゐる趣味



意識を目ざめさせることが出来、よく之を發達させ、助け長ぜしめて、完全なものに成し、最も新しい思想や筆の力を養成するものであるとすれば、自分は現今の讀書界をいましめ目ざまして、指導する爲に、唯一のすべき務は、彼等に如何なる書物を選んで讀むがよいかを、教へることであると信じた。

【一九三】當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、その君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、いまだ會てこの時の如きはあらざりき。(高山樗牛「樗牛全集」)

【語釋】○春秋の亂世。周末の戰國時代を云ふ。○大義。大なる正しき道。○蕩然。タウゼン 廣く大きい意、拂ふ貌。○教化。教育によりて風俗がよき方に化する事。○陵夷。リョウイ だん／＼と衰へること。○夷は丘陵 夷は平らか。

【通解】其の時分の支那は、世間に普通に云ふ春秋の亂れた世の中である。周の王室は名ばかりで、其の君と臣の間柄の正しき大道は、すっかりなくなつてしまつてゐた。或は臣であつて、其の君を弑する者があり、或は子であつてその親を殺すものがあり、強いものは弱いものを呑み込み、大きなものは小さいものを一緒にして、權力の外に道義と云ふものもない。社會教育はだんだんと衰へ、風俗は傾きす

たれた事、未だこれ迄に於て、この時の様な事はなかつた。

【一九四】香煙徐ろに薫じて幢幡を掠め、蓮華頰に散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで、笙鼓月に冴え、嘯伽の袖は庭前に翻りて、舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。(藤岡東圃「東圃遺稿」)

【語釋】○幢幡。ダウバン 寺、堂内にかけて置く旗。○轉讀。眞讀に對する言葉で、經文を所々ひろひ讀みに誦讀すること。○龍頭の舟。龍を以て船のへさきをかざつた船。○嘯伽。ビンガ 迦陵嘯伽の略で妙聲鳥と譯す。○極樂淨土。佛で云ふ未來の黃金世界。○紫雲の來迎。シウワンのライガウ 彌陀三尊が紫雲に乗つて死者の靈を迎へること。○汚濁。ヲヂョク けがれて濁つてゐること。

【通解】香の煙がしづかにかをつて、旗のあたりを立ちまよひ、蓮の花がしきりに散つて、經文を轉讀する聲と伴つてゐる。龍頭の舟は、池の上に浮んで、笛や鼓の音は、月夜にさえて聞え、嘯伽と云ふ妙聲の鳥の翼に比すべき袖は、庭の前に翻り舞うて、其の舞ふ姿は、風に堪へないと云ふ風である。恰度何もしないで、其の儘極樂淨土の思があるので、三尊が紫雲に乗つて來迎するのを待たないで、自分の身は已にけがれた世の中を離れた様な思がする。

【一九五】要するに、業平の歌は眞率にして虚飾なく、直下に人情を傾倒して餘蘊なし。かく

して彼は平安朝最初の第一の歌人にして、またこの朝をつくしての第一等の歌人なり。唯この朝の末にありてよくその壘を摩し、時に一頭地を抜きさへもせしもの西行法師あり。西行は自然の懷に隠れ、業平は人生の波に漂ふ。西行は出で、天地の間に放浪せしに、業平は人生を内観して性情の波瀾を詩化せり。(藤岡東圃『國文學全史』(大正一三、廣島高師))

【語釋】○傾倒 さかさまにして内部にあるものを歌の中にそゞぎ出す。○壘を摩す 敵の城壁に迫ること。轉じて地位技倆が殆ど雙ぶこと。匹敵する。○放浪 さまよひ歩く。

【通解】 つまり在原業平の歌は、まじめで少しの作り飾りがなく、人情をそのままに歌中にそゞぎ出して、残す所がない。かうして彼は平安朝の初期に於て第一流の歌人で、又それと同時に、平安朝を通じての第一流の歌人である。たゞ平安朝の末期に於て、技倆が業平に匹敵し、時によると彼よりも一段ぬけ出ることさへあつたものに西行法師といふのがある。西行は自然の深奥の中に飛びこみ、業平は俗世に住んで人情の波瀾に従うて行つた。又西行は出遊して天地自然の間にさまよひ、業平は人生を我が心の中を靜觀して、人間性情のさまざまの起伏(うごき)を、歌として詠んだ。

【一九六】 清盛は縦横無碍に奮戦し、喜怒哀發するにまかせ、直ちに鐵の如き手を以て、痛打一番また顧みず。藤氏を抑壓し、源氏を牢籠し、莊園を沒收し、寺院を掠略し、從來の習慣、凡俗

の迷信は、一嘘にだも値するこゝなし。渠はたゞ我意の赴くところを斷行して平然たり。一切歴史の束縛を打破し、新時代を代表して傍若無人に馳驅する様、極めて悲壯の觀あり。天人呆然として爲すところを知らず、しばらく手を束ねて、この自然主義の巨人の横行に任す。

(藤岡東圃『東圃遺稿』)

【語釋】○無碍 ムゲ 障礙のないこと。○牢籠 ラウロウ おしこめておくこと。幽囚におなじ。○莊園 中世、朝廷から皇子功臣等に賜つた田園。○一嘘 イツキヨ 嘘は笑ふ意、故に一笑と云ふことになる。○傍若無人 バウシヤクブジン 傍に人なきが如き意。人前を憚らずに振舞ふこと。○呆然 ハウゼン あきればはてたる貌。○自然主義 (Naturalism) 一切の技巧を排し、宗教道德を脱して、直ちに人生の現實を描き出さんとする主義。○横行 自由自在に振舞ふこと。

【通解】 清盛は自由自在に、何の障礙もなく奮闘して、喜び怒りの感情の動くまゝに、直ぐ力強き手を以てひどく打撃を加へ、しかも平氣である。藤原氏をおさへつけ、源氏をおしこめ、莊園を取りあげ、寺の領地をかすめとり、これまでの習はしや、凡人の迷つた考へは一笑するねうちもないこととした。彼は只自分の心の向く方の事を思ひきり行つて一向平氣であつた。一切歴史の必ずさうすべきだとして來た所謂し來りの束縛を打破つて、新時代の思潮を代表して、傍人無人が如く自由自在にかけまはる様な、極めて悲哀の中に意氣のおどる有様である。天下の人々あきれ果てて、どうしてよいかわからない、しば

らく手をつかなくて、この自然のままを發揮する大人物のするがままに任せてゐたのである。

【一九七】 多く言ふこと勿れ。汝が言ふ汝が心ここれ一ならば、汝終に舌頭に跳り舞ふ底の傀儡なるべし。汝が言ふ汝が心ここれ別ならば、汝が衣裏の兒驕り、母嗟する底の惡光景見るに堪へざらむ。舌に従つて動かば、芭蕉葉闊くして風に其の幹を折らるゝ時あらむ。意を奉じて舌ひるがへらば、鷄鳴狗盜の客を用ふるもの、畢竟英雄にあらじ罵られむ。(幸田露伴『長語』)

【語釋】 ○傀儡。クワイライ。からくり木偶人形。○鷄鳴狗盜。齊の孟嘗君、秦にとらへられんとした時門下に狗盜鷄鳴をなす者があり、其のおかげで秦から免がれた故事を引く。王安石の作つた孟嘗君傳に「孟嘗君特鷄鳴狗盜之雄耳」とある。

【通解】 多く言ひなされるな、お前の言ふこととお前の心とが、若し同じであるならば、お前は舌先に跳り舞ふと云ふ様なからくり人形となるであらう、お前の云ふこととお前の心と別であるならば、お前の家のうちの子は、お前を甘く見くびつて高ぶり、母親がもてあましてなげく見苦しい有様見るに堪えないであらう。口で言ふ通りに動くならば、たとへば芭蕉の葉がひろくして、風の爲に其の幹まで折れる様に、自分の身を害する時であらう。又心に計畫することがあり、意のままにしゃべるならば、譬へば、孟嘗君が鷄鳴狗盜の人物を用ひた様なもので、つまり小策を弄するもの、英雄ではないと罵られよう。

【一九八】 世に住み詫ぶる枯禪の人も、春こしなれば、あくがれ心地の人こなるぞおもしろき見渡せば、春の雲美しう、遠山の櫻こ融けて、夢かこ流れたる、近くは青を展べたる草色の煙陽炎の亂るゝ思こ靡きく、菜花蜂蝶の心もすするなるかな。聲立てて行く里の流は、四澤に溢れつゝ、霞みつゝ、生意隨處に春を布いて、けに知己なき人の知己儻かなる眺かな。(綱島梁川『春愁賦』)

【語釋】 ○枯禪。コゼン。禪の修養を積み、感情の枯れ乾いてゐること。○あくがれ心地。あくがれるとは物をしたひ其の物の爲にうかれる意であるから、あくがれ心とはうかれ心。○陽炎。カゲロフ。春夏の頃ゆら／＼と立あがる水蒸氣。○すする。自然の意、思はず知らず。○四澤。四方の澤。陶潜の詩に「春水滿四澤」云々とあるのから想をとつてゐる。○儻か。ユタカ。

【通解】 世に住むことを厭うて、禪の道に入つて感情の枯れ乾びた人でも、春となれば、うかれ心の人となるのは面白い。見渡して見ると、春の雲が美しう遠山の櫻ととけ合つて夢の様にぼつとたなびいてゐるのが見える。又近くには、草が青々と布きのべた上に、煙や陽炎が人の思ひ亂れてゐる胸の思ひの様に亂れなびいて、菜種には蝶や蜂が心もうちかれてゐる様に見えることよ。聲を立てて流れてゆく里の流は四方の澤に溢れながら、霞が一帶にこめながら、生々とした氣分が到る所に春景色をしきのべて、誠に知己なく淋しい思を感ずる入でも、多く知己を得た様な愉快な眺めであることよ。

【一九九】 あはれ我が友(雞)あさましくも打衰へたるかな。昨日までも光榮の華冕打鬪して曙の歌勇ましかりし雄姿、今何處にか認むべき。昂かりし頭は俛れ、麗しかりし冠は折れ、嵐を嘲りし兩鬪は、萎みて影の如く、敵を挫きし爪嘴は、拳曲して力なし。昂然濶歩せし疇昔の姿長へに消えて、唯見る衰殘の孤影蹒跚たり、踰跟たるを。(網島梁川并梁川文集)

(大正一一、名古屋高工、大正一三、仙臺高工)

【語釋】 ○あさまし あまりの事に驚き呆る意。○華冕 クラベン 麗はしい冠、雞のとまかのこと  
 【雞冠】 ○俛れ 下れ。○拳曲 曲りくねる。○昂然 おごりたかぶつた形。○疇昔 チウセキ 往日に同じ、きのふ。○蹒跚 マンサン よろよろとよるめく貌。○踰跟 同前。

【通解】 あゝ我が友として馴れ親んでゐた雞は、情なくも哀れな姿に弱つたものであることよ。昨日までも、名譽な麗はしい雞冠を頭上高くかざして、勇しく明方の時を歌つたあの雄々しい姿も、もはや今では何處にも見られなくなつた。おごりたかぶり上げてゐた頭は低くたれ、美しかつた雞冠は折れて、烈しく吹く嵐を物ともしなかつた強さうに見えた兩方の翼は影法師のやうに力なく、相手の敵を負かした強い爪や嘴は曲りくねつて力なくなつてゐる。たかぶつて威張りちらして歩いた前日の面影は、永久にこの庭から失せて、唯衰へてた頼りない一つの姿が、よろよろとよるめてゐると見えるばかりだ。

【二〇〇】 静かに起ちて扉を推せば、落日袖にあり。寒星人を親しむ、微茫の中物あり。簇々として來りて、石室を去る。こゝ數尺の處を過ぐ。白衣冠して白馬に騎せるものあり、素車に乗るものあり、白幡を撃ぐるものあり、虚を渡りて聲なく、寂々として行く。嶽上の鬼物この夜闌け人籟絶ゆるの時に當り、出でて遊ぶなからんや。燈を乗りてこれを照せば、馬や、幡や、車や忽ち消え、青紗の如きもの袖邊を掠めて飛び、一氣あり、氷よりも冷やかに來りて燈を吹き滅し、一團の白氣上方に向つて去る。蓋し夜雲の行くなり。(暹塚麗水不二の高根)

【語釋】 ○微茫の中 うすぼんやりと暗い中。○簇々 ゾクゾク ちらがる貌。○白幡 ハクハン 白い旗  
 ○青紗 青いうすぎぬ。○人籟 籟はひびき、人籟は人聲。○素車白馬 白木の車と白色の馬  
 (通解) 静かに起つて扉を推すと、入日は自分かざす手の袖のあたりに見え、寒さうに見える星は、何となく人なつかしく光る。ぼんやりと暗い中に、物があつて、むらむらとむらがり集つて來て、この石室から隔つること數尺の處を過ぎてゆく、白衣に冠して白馬にのつてゐるものがある。白木の車にのつてゐるものがある、白旗をささげてゆくものがある。空を通過つて何の聲もなく、ひっそりとして行く。嶽上の妖怪がこの夜ふけて、人聲の絶えた時に出て遊ぶのではなからうか。燈をとつてこれを照すと、馬や幡や車や忽ち消え、青いうすぎぬの様な物が袖のあたりをすれすれに飛び去り、一つの

寒い氣があつて、燈をふきけし、一かたまりの白氣が上方に向つて去る。之を考へるのに、これは夜、雲の行くのである。

【二〇一】 于戈天下に旁午して、兵馬倥傯、肝腦長へに地に塗れ、腥風到處に吹きすさぶ間は、文化の芽の萌さむ由もなけれざ、一たび馬は崑山の陽に歸り、牛は桃林の野に放たれ、堯雨舜風、太平の氣象融融として起るに及びて、文化の芽茲に始めて萌す。(大町桂月「黃菊白菊」)

【語釋】 ○于戈 たてとほこであるから戦亂の事を意味す。○旁午 バウゴ あちこちにある、縦横すること。○倥傯 コウソウ あはたゞしく忙しいこと。○肝腦地に塗る 肝藏や腦が地にまみれることで、死ぬること。○馬は崑山の陽に歸り云々 周の武王の故事「歸馬于崑山之陽」放手于桃林之野「云々」とあり、世の中の平和なるを云ふ。○堯雨舜風 堯舜、共に支那の古の聖天子。こゝでは世の平和に治まること。【通解】 戦亂が天下のあちこちにあつて、戦争に忙しく、人は慘死して、腥い風が到る所に吹きあれる間は、文明開化の芽を出すすかはないけれども、一たび世が太平になつて、馬は崑山の陽に歸り、牛は桃林の野に放たれて、世が平和に治つて、太平の氣分が和ぎ起る様になつてから、文化は茲に始めて芽を出すのである。

【二〇二】 左ノ文章中傍線ヲ施セル部分ノミヲ解釋スベシ

太平いよく續きて文化いよく進む。文化いよく進みて生活の程度いよく高し。所謂治に在りて亂を忘るゝの危機、實に此の際に胚胎す。祖先百戦の山河に生れ出で、目に旌旗の翻るを見ず、耳に鼙鼓の轟くを聞かず、文恬武嬉、安きに慣れて又危きを想はず。人ましく利巧になりてますます死の惜しきを知り、欲に趨り利に就き、舌頭には能く風を生ずれども、腕には虱を捫る力だになく、風俗の奢侈に赴くにつれて、人心軟化し柔化し、終に腐敗す。文化の餘弊こゝに至りて極りぬ。(大町桂月「黃菊白菊」)(大正一三、福井高工)

【摘解】 (一) 治に在りて云々——太平な氣分に押れて、國歩艱難の時を忘れるといふ危険な機會が、實際この場合に芽生える。

(二) 舌頭には能く風を云々——口先は實に雄辯にして、えらさうなことを滔々と述べるけれども、文弱に流れきつて、腕力では虱を捫りつづす勇氣も出来なくなる。

【二〇三】 あはれ、國破れて山河ありさいひけむ。世にさきめきし太守の樓閣、すでに跡方もなくなりて、遺愛の樹木空しくさかえぬ。松風よな／＼玉琴の絳に通ひて、木蘭の舟常に幾隊の雅客を載せけむ、そのかみの豪華一炊の夢に歸して、烟波なほ愁を含めるに、短籬を隔てたる

通解摘釋大意篇

幾宇の聖壁、呻吟の聲にうづもれて、茲に二豎に苦しめらるる者いくそばくさいふこころを知らず。(大町桂月『花紅葉』)

【語釋】 ○國破れ山河あり 國亡びて山や河が昔の儘にあること。杜甫の春望の詩、前に出づ。○ときめく 時世にあつて榮えること。○太守 國守、大名。支那では郡の長官、但し郡縣の制度は日本の現在とは大分ちがつて、支那では郡が一番大きく、其の次が州縣となつてゐる、隨つて長官は可なり重い役である。こゝでは前同儘をさす。○一炊の夢 盧生が邯鄲の途上に晝寢をして一生の經過を夢み、覺めて見れば宿の主人翁の始め蒸してゐた黍が、まだ熟しなかつたと云ふ故事を引く、榮華のはかない事に譬へる。○二豎 病氣のこと、左傳「昔侯波病求醫于秦、秦伯使醫緩爲之、未至侯夢疾爲二豎子、曰彼良醫也」。○松風云々 松風が毎夜琴の音律と調子を合せる。琴の音に峰の松風通ふらし、いづれの緒より調べそめけむ(拾遺集)

【通解】 あゝ支那の杜甫の詩に、國が亡びて、山河は昔の儘であるといつてあるであらう。世に榮えた太守の大きな樓閣も、はやあと方なくなつて、生前に愛せられた樹木只徒に榮えてゐる。松吹く風、夜々玉琴の音に、調を合せ、木蘭で造つた美しい舟はいつも幾組かの風雅の客をのせたであらう。昔のせいなく一炊のはかない夢となつてしまつて、烟も波も愁を含んでゐるのに、低い垣をへだてた幾棟の白壁がうめきの聲にうづもれて、其の中には病に苦んでゐる者がどれだけゐるか知れない。

【二〇四】 西行の信仰は、これを佛徒として見ば、なほ或ひは差別の見を脱する能はざる小安心に過ぎざらむ。しかも世を擧げて剪綵の末技に汲々たるこき、巍然として衆俗を抜いて立ち直に天然に接觸して、感ずる所即ち歌となれり。その歌は企てて成すものにあらずして、自ら成れるなり。その自然にして平易に、殆ど斧鑿の痕を存せざるはそれが爲なり。

(藤岡東圃『國文學全史』)

【語釋】 ○佛徒 僧侶のこと。○剪綵の末技 センサイのマツギ 綵はあやぎぬ、剪はきる、詩歌の細かく美しい手先の小細工。○巍然 キゼン 山の高い貌。○斧鑿 フサク 斧やのみの痕、つまり改作訂正したあとかたち。

【通解】 西行の信仰は若し僧侶とし見るならば、矢張り或は差別を以て物を見ると云ふ見方をぬき出でる事の出来ない不安心に過ぎないであらう。であるけれども、當時世のなかの人が皆筆先の小細工ばかりに氣をもんでゐる時、高く衆を抜いて立ち、直接に自然其のものに接して感ずる所が即ち歌となつてゐる。その歌は企てて出来上つたものではなくて、自然と出来上つたものである。その自然であつて、たやすく殆ど訂正をした痕の見えないのはそれが爲である。

【二〇五】 源氏物語五十四帖、その脚色整然として紊れず、各種人物の性格は明瞭に發揮せら

れ、宮中に入し、年中行事に参加して、虚榮と富貴にめぐれし上流の摺紳貴女は、最もあらはに描寫せられたり。又自然の描寫最も精妙を窮む、人事と自然とを融合せる詩的思想は實に源氏に至りて最大の發達をなせるものいふべし。その文、上古の簡朴にして莊重なる點は見るべからずいへども、爛々として風に靡く女郎花の如く、煩穢黷麗、正にその内容に恰當せり。(芳賀矢一)

【語釋】 ○源氏物語 平安朝の女流文學者紫式部の著したもので、光源氏を主人公とした小説的物語。○脚色 小説、脚本等の仕組。○性格 性質人柄。○年中行事 宮中で一年間に行はせらるる行事、儀式。○摺紳 シンシン 高位高官の人、摺はさしはさむ、紳は大帯、笏をさしはさみ大帯を垂れ下げる。○嫁々 デウ／＼ しなやかなこと。○煩穢 ハンジヨク わづらはしくどくどしいこと。○恰當 カツタウ 恰度よくあてはまつてゐること。

【通解】 源氏物語五十四帖は、そのしぐみがよく整つてゐて、みだれず。書中いろ／＼の人物の性質人格がはつきりとあらはれ、宮中に入し、年中行事に加はつて、から名譽と富貴とにめぐれし上流の公卿達、貴婦人達が最も明かにゑがき出されてゐる。又自然の景色をゑがき寫すことも最もくはしく妙を極めてゐる。人間界の事と自然界の景色ととけ合つた詩のやうな思想は、實に源氏に至つて最大の

發達をしたものと云つてよい。その文は上古文の様な簡略でかざりけのなく、どつしりと重々しいと云ふ點は見る事が出来ないけれども、しなやかであつて、風になびく女郎花のやう、くどくどしくてはややかであつて、正しくその中に書かれてある事實に、よくあてはまつてゐる。

【二〇六】 人目を光照する大事業を成就し、物質的なる實利實績を社會に寄與するこゝをのみ果して成功といふべきか。かくの如きは寧ろ成功といふ意義を狹隘俗陋ならしむるものにあらずや。深く沈潜して自家人格の根柢に培ひ、その心田を涵養する、これ亦貴き意義にしての成功にはあらざるか。(網島梁川川病問錄)

【語釋】 ○物質的 精神的に對した言葉で、物質上の形にあらはれること。○沈潜 落付いて思慮をめぐらすこと。○心田 心を開墾の出来る田に譬へたもの。

【通解】 人の目を引く大事業を仕上げ、形にあらはれる様な實際の利益、實際の功績を社會に與へるとばかりする、是れ果して成功と云うて宜しからうか。こんな事はどちかと云ふと、成功といふ意味を狭くいやしくならしめるものではないか。深く心潜め落付いて、自分の人格の根本をよく修養して、其の心を養ふ、これ亦貴い意味に於ける成功ではないか。

【二〇七】 朴は、山深きあたりの、高き梢に塵寰のけがれ、知らず顔して、ただ、青雲を見て

嘯き立てる氣高き、比べん方もなし。香は、天つ風の、烈しく吹くにも壓されず、色は、白壁を削りたりきて、かくはあらしと思はるるまで潔きがなかに。猶、暖けなる趣さへあり。

【語釋】 ○塵寰。ヂンクワン 寰はまはり塵はちり、塵多き俗世間、浮世の意。○青雲。青空 ○天つ風

空の風。

【通解】 朴の木は深山の中に高く聳えてゐて、其の高い梢に、俗世間のけがれを知らない様な風をしてたゞ青空を眺めて、うなつて立つてゐる氣高きはたとへ様がない。其の香は空吹く風の烈しいのにも負けず、色は白壁を削つたからと云つて、これ程ではあるまいと思はれるまで、清い中にまだその上暖い趣まである。

【二〇八】 左ノ文章ニ、ヲ打チ段落ニハ」ヲ附ケ餘白ニ大意ヲカケ

十七八歳の頃私は隅田川でよく泳いだころがある全く水には経験のなかつた私も漸く岸を離れるころが出来るやうになり次第に川の中流までも進み得るやうになつて一夏も水泳場へ通ふちには向ふの河岸まで泳ぎ越すころが出来た更にまた一夏も泳いで見たら焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たしま水さしほ水の混り合つたあの

川の中の冷い温いも分つて來たし水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見るころも出來た板子なしには溺れるの外なかつた私も二夏の末には優に隅田川を往復した私は普通の泳ぎ手が行けるころまでは自分も到達し得たやうに感じたけれどもそれ以上に進むころはなかなか容易でなかつた私の身體は水に重かつたから樂に浮身の出来る人を見たり抜手の上手な人なきを見た時は全く感嘆してしまつた」文章の道にも誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ないそして根氣さへあればそこまで行く事は決して難くないに相違ない」信州の小諸に居た頃私は弓をやつたころがある誰でも最初のうちは的に向つて矢を當てるころばかりを心掛ける唯當りさへすればいいさういふ時代には幸ひに一本の矢が的を貫くころはあつても他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛んで行く又射手の心に頼むころもなく矢の曲直を辨別する力もないのだ小諸に住む舊士族の一人で弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來たその老人が先づ姿勢を正すころを私達に教へてくれたそれからの私達の矢はたまひ的を貫くころが出来ないやうな場合でも一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた」これも文章の道にあてはめて見るころが出来る唯よい文章を作らうと思ふものはさうしても先づ自己から正してかゝら



ねばならない」淺草の新片町に住んだ頃家は淺草橋や兩國橋に近くて私はあの隅田川の界限を漕ぎ廻つにこゝがある最初のうちは無暗に手足を動かしかの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し手許に引きして骨折つて見たそれでも舟は思ふやうに進まなかつた次第に私は手足を動かすこゝが少くて身體全體の力でゆつくり櫓を押すこゝが出来たやうになつた向ふから大きな傳馬がやつて来たぞあいつに一つ衝當らないやうにさう思つて漕いで行く樂みなぎもそれから起つて来たそれから船頭のするところを見るに實にゆつくりしたものだそこには力の省略がある簡素の美がある」文章の道にも無暗に筆を弄すこゝが決して自己の眞の表白はならない眞によい文章には眞によい結晶の力がある。(島崎藤村) (大正一三、大坂女子専門)

【大意】 文章に於ても水泳と同様、不撓の根氣さへあれば、誰しも成功せられるだけの餘地がある。又弓術に於ても、射手は矢を發ち的に當てんとするよりも、姿勢を端正にする。同様に文章にも成文せんとするよりも、自己を正すのが成文の第一である。船を操縦するにも、悠々として而かも力の省略簡素の美を表さねばならぬ。文章にも結晶これが最肝である。

【二〇九】 左ノ文中傍線ヲ施シタル部分ヲ解釋セヨ

この一篇を讀み了るや、淚滂沱として吾面を沾し、われは卷を掩ひて、暫く仰ぎ見るこゝ能はざりき。初めわれ、青松を追ひて水涯にさまよひ、白雲に伴はれて山嶺にあそべり、自然の樂は清風朗月と共に、悠々として盡くる所を知らず、あるは水冷かに蔭縁なるほこり、一卷會心の詩集を繕きし、天地の間に放吟するが如く、あるは月明に星稀なる時、片舟湖心に棹して、斷金の友に嘯くが如く、心のこかに意胖かなるこゝ、さながら閑雲孤鶴にもくらぶべかりき。

(大正一三、海軍生徒採用)

【語釋】 ○清風朗月 すべしい風、ほがらかな月。○悠々 ゆつたりして、こせづかないこと。○會心 心になつたこと。○片舟湖心に棹し 小舟に乗つて湖の真中へ漕ぎ出る。○斷金の友 志を同じうした友は、金のやうな堅いものでも斷ち切るほど鋭くて情交がある。易の繫辭上傳に、「二人同レ心、其利斷レ金、同心之言其臭如蘭」とある。○胖か ユタか、自由なこと。

【通解】 天然を友としての快樂は、すべしき風朗らかな月の、永久にたえないのと共に、いつまでも悠々として限りはない。之を譬へると、夏の一日、水の冷かにして緑の木蔭すべしいあたりで、己の心に適つた詩集を開いて、自然を友として思ふまゝに大聲で歌うやうに、又は月は輝く、星かげ稀な秋の夜、一小舟に乗つて湖の中程まで漕ぎ出して、無二の親しい友と、小聲でお互に心の中を語り合ふ樂と同様

通解摘釋大意篇

此、この天然の樂は何の邪魔することもなく、心やすらかに意自由なことは、恰も大空にゆたりゆたりとせる白雲や、心長閑な鶴の有様にも比べられるものであつた。

語句解釋篇

田原 敬 旭

第三篇 語句解釋篇

【一】 左ノ語句ヲ解釋セヨ。(大正元、東京高師)

希代の朝恩。不覺の名。右近の橋。主觀。果報。

【解釋】〔希代の朝恩〕—世にも稀な朝廷の御恩。

〔不覺の名〕—油斷者、臆病者、女々しい奴だと世の人に言はれる評判。

〔右近の橋〕—古の築紫殿の階下の西方に植えてある橋。右近衛府の擔任して栽培するからの名(左近の櫻の對)

〔主觀〕—物事を知覺したり思惟したりする自身。觀想の主體。(客觀の對)

〔果報〕—因果の應報。むくひ。しあはせ。好運。

【二】 次ノ語句ヲ解釋セヨ。

- (1) 烟霞瘡疾
- (2) 白眼
- (3) 流連荒亡
- (4) 烏有
- (5) 杞憂
- (6) 東儲
- (7)
- (8) 柳營
- (9) 機殿
- (10) 桂月

語句解釋篇

檢

右近 橋子

定見 橋子 歌を 語り たり すと 申 知 六年 四月 初 無 台 主 田 原 敬 旭

烟霞痼疾

現代文新釋法

【解釋】(1)「烟霞痼疾」——鴉た山水を愛する意。

(2)「白眼」——にらむこと。晋の竹林の七賢人の一人、阮籍の故事より出づ。晋書に阮籍「禮教は拘らず能く青白眼をなす。禮俗の士を見れば白眼を以つて之に對す。荷喜の來るに及びて、即ち鞭、白眼をなす喜、憚らずして退く。喜の弟康之をきき、乃ち酒を齎らし、琴を挟みて遣る。籍犬に喜びて乃ち青眼を見はす。是れより禮法の士、之を疾むこと難の如し」とあり。

(3)「流連荒亡」——流連は遊行の樂に耽りて永く他所にありて、家に歸るを忘れること。荒亡は田獵飲酒の樂に耽ることをいふ。唐の阮籍

(4)「烏有」——烏んぞ此の事有らんやといふ義にて、無の字の意に用ふ。烏有に歸すとは物が皆無となりしをいふ、多く火災に遇ふをいふ。

(5)「杞憂」——無益の憂。とりこし昔勞。昔、支那の杞の國の人、天の崩れ落つることあらんかと憂へたる故事より出づ。

(6)「東儲」——皇太子のことを申し奉る。春宮。

(7)「流に枕し石に漱く」——まけ惜みの強き意。晋の孫楚少き時、王濟に謂つて、當に石に枕し、流に漱がんと欲するといふべきを誤つて枕し流漱し石といつた。濟その誤りたるをいへば、枕し流は耳を清むる所以である。漱し石とは齒を磨ぐ所以であると答へたといふより出づ。

(8)「柳營」——將軍の營所。幕府の異稱。

東儲  
流枕石漱

烏有

202

(9)「檢覈」——きびしく取調べること。

(10)「桂月」——月の異稱。

【三】左ノ語句ニ振假名ヲ付シ且ツ之ヲ詳解セヨ  
塵寰を脱す。 造化の樞機に參す。 自然の啓沃に接せよ。 雙劍を嚮きて帶刀の風を乘つ。

【四】左ノ言葉ニ傍訓ヲ附シ且ツ解釋スベシ

塵寰を脱す——塵寰は穢れた世の中、俗界、俗世間から離れること。

造化の樞機に參す——造化は萬物の創造化育をいふ。又天地の造物主。樞は戸のくるり、機は好の引金。肝要の處。又樞要な政務。參すはあづかること。即ち、造化の神の樞要な政務にあづかること。天地自然の奧秘に深く入り入ること。

自然の啓沃に接せよ——啓沃とは心中を啓きて他の心に沃ぎ入るゝ義。開發誘導すること。自然の誘掖補導を受けて心を修養せよとの意。

雙劍を嚮きて帶刀の風を乘つ——大小兩刀を賣り拂ひ、丸腰となつて武士の姿をはなれること。武士が町人姿となる意。

杜撰 闡明 逸早く 遊説 社稷 斡旋 輿論 懸隔 典型 辟易

語句解釋篇

社稷

輿論

典型

辟易

盤根錯節

現代文新釋法

【答】(社稷) 誤の多い著作。詩文などに典據の正確ならざること。

【闡明】 ひらきあきらかほすこと。

【遊説】 説き誘うてあるること。

【逸早く】 すばやく。

【社稷】 ④は土地の神、稷は五穀の神、支那では國家を治めるに、まづこの二つの神を祀つたので、轉じて「國家又は朝廷のこと」。

【幹旋】 ①とりもつこと。世話。

【輿論】 ①世間一般の人に唱へられてゐる議論。

【典型】 ①かけへだて。

【典據】 ①のり、かた、てほん。

【辟易】 ①道を辟け所を易へる意。勢におされたじろぐこと。

【五】 問題ノ右傍ニ讀方ヲ附シ左傍又ハ下部ニ其意義ヲ記セヨ (大正元、東北帝大農)

盤根錯節 切磋琢磨 蕭條 齟齬 落魄 鹵簿 供養 陽炎

盤根錯節 盤は蟻に通ず、わだかまつてゐる根や、入り交つてゐるふしこぶ。物事の處置するに困難

蕭條

な場合。  
①切磋琢磨 角や玉を切りみがくこと。轉じて、智慧をねり磨くこと。  
②蕭條 物さびしむさま。しんみりしたさま。  
③齟齬 あてのはづれること。ゆきちがふこと。物事のくひちがふこと。  
④落魄 落泊に同じ。おちぶれること。零落。魄の字(ハク)(タタ)執れに讀むも可なり。  
⑤鹵簿 儀仗を具へた行幸の行列。天子の行列。  
⑥供養 亡靈に物をそなへて回向すること。死者をまつこと。  
⑦陽炎 糸遊。春ののどかな日和に野邊などにチラ／＼と立ち上る氣。

【六】 (甲) 左ノ語句中誤謬アリト認ムルモノアラバ訂正セヨ

功蹟 時代錯誤 勤儉貯蓄 儀性 破壤 元帥

(乙) 左ノ語ヲ解釋セヨ

萎縮退嬰 綱紀肅正 嚆矢 行脚 私淑

【答】 (甲) 功蹟 功績 時代錯誤 時代錯誤 勤儉貯蓄 勤儉貯蓄 儀性 儀性 破壤 破壤

破壤 元帥 元帥

語句解釋篇

【乙】「萎縮退嬰」——なえちぢみ退き守ること。ひつこみ愚案。進取の對。

【綱紀肅正】——綱紀は大綱小綱、物事のしめくまり、國家の政事大法、肅正はきびしく正すこと。

【嚆矢】——鳴鏑矢、昔交那で戦の始めにこの矢を射出したことから、すべて物事の始めにいふ。

【行脚】——禪家の語、諸國を巡り歩く修業の僧、徒歩にて諸方に旅行する事。

【私淑】——私しくその人につかず、その道をきき、て私に身をよくすること、欽慕し手本として私に學ぶ事。

【七】 解釋セヨ

（イ）三人行けば必ず我師あり （ロ）上知ミ下愚ミは移らず （ハ）錯珠を失はず （ニ）正

鵠を失はず （ホ）九廻腸 （ヘ）井魚は興に天を語るべからず （ト）亡羊の歎 （チ）元

龍悔あり （リ）交絶えて惡聲を出さず （ヌ）亭午

【解釋】（イ）「三人行けば、必ず我師あり」——三人同じく事を行ふ。其一は我なり、一は善、一は惡

ならば、我は善なる方に従つて、其の惡を改む。即ち三人は我師となる。

（ロ）「上知と下愚とは移らず」——資性俊敏なるものと、資性愚鈍なるものとは、共にその性質に變化

をうくることなし。即ち、如何様の教育を施すとも上知は愚者とはならず、下愚は智者

とはならぬと云ふ意。論語より出づ。

（ハ）「錯珠を失はず」——少しのあやまりもなきにいふ義。錯珠は量名。極めて少量の意に用ひらる

（ニ）「正鵠を失はず」——正も鵠も的の名。的にはづれぬことをいふ。正しき意。

（ホ）「九廻腸」——憂苦しめて心腸の廻轉するが如きことをいふ。又屈折の義。

（ヘ）「井魚は興に天を語るべからず」——井の中に住む魚には天の廣大なるを語るに足らず。見識のせ

まい人とは其に大事を相談するに足らずといふ義。

（ト）「亡羊の歎」——物事の多端にして、とりとめのなきをなげくこと。

（チ）「元龍の悔あり」——元龍とは高くのぼりつめたる龍。尊貴を極めたる人は、戒慎するところなけ

れば、敗滅の悔あるをいふ。

（リ）「交絶えて惡聲を出さず」——以前親しくして居た友と、たとひ、絶交したる後にも、其の人の

惡口をいはずるをいふ。

（ヌ）「亭午」——亭に至なり。午は日中なり。故に亭午とは日が午に至る義にて正午をいふ。

【八】 左ニ振假名ヲ付ケ且ツ之ヲ解釋セヨ。

（一）杜撰 （ロ）煩瑣 （ハ）對象 （ニ）取沙汰 （ホ）善智識

【答】（イ）杜撰——【四】参照。

（ロ）煩瑣——くだくしく煩はしいこと。

【九】左ノ語句ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ。

(一) 赤行囊 (二) 時代錯誤 (三) 妥當性 (四) 幻滅の悲哀 (五) 黒表

【答】(一) 赤行囊——郵便物を遠送する時、貴重品を入れた赤色の布袋。

(二) 時代錯誤——時代に後れた舊弊な考へを以つて、現代の新らしい事象を律せんとすること。

(三) 妥當性——妥當とは普通穩當、適當といふ意、又存在に對し意味價值として存立すること、妥當性とは哲學上には經驗から全然獨立にそれ自身意味と價值とを保持する理性の必然性をいふ。

(四) 幻滅悲哀——美しい幻の影が消えて、醜い現實にかへつた時の悲哀。

(五) 黒表——注意人物の名簿、英國には特に常習の酒客の名簿をいふ。

【一〇】次ノ字句ヲ解釋スベシ。(大正元、小樽高商)

(イ) 布衣 (ロ) 一にして足らず (ハ) 覆載の間 (エ) 曠日彌久 (ホ) 浮世のさが

(ヘ) 蒲柳の質 (ト) 名詮自稱

【解釋】(イ) 布衣——庶民。匹夫。布製の狩衣。又特に青侍(即ち無位無官の者)の着用した無紋のもの。轉じて無位無官の者の義。

(ロ) 一にして足らず——一つどころではない、まだ此の外にある。

(ハ) 覆載の間——「フウサイ」ともよむ。天は物を上から覆ひ、地は下から載す意。

(三) 曠日彌久——空しく時日を過して事のながびくをいふ。むらさけ日と云ふ。こまのふかひくをいふ。

(ホ) 浮世のさが——定めぬ無常の世の中のならはし。

(ヘ) 蒲柳の質——蒲柳はかはやなぎ。えのころやなぎ。柔弱で風に堪へぬ位のものだから、身體のかよはきことをいふ。

(ト) 名詮自稱——名前そのものが自然にその性質をいひ表はしてゐること。

【一一】左ノ語句ヲ解釋セヨ

目あき千人、目くら千人 打算的 没交渉 門外漢 環境

【答】「目あき千人」、目くら千人——世の中は賢愚相半ばするといふ意。

「打算的」——物事をなすに、すべて利益勘定でかゝることといふ。

「没交渉」——無關係なこと。

「門外漢」——その専門以外の人。

〔環境〕—四圍の境界、周囲の事情境遇。

【二】 解釋 (大正二、海軍機關)

○(イ)大聲は俚耳に入らず ○(ロ)朋黨比周 ○(ハ)尸位素餐 ○(ニ)大同小異 ○(ホ)大車輪の活躍

【解釋】○(イ)

〔大聲は俚耳に入らず〕—大聲は古樂。高雅な音樂は俗人の耳には感じない。高尚なる言は俗人には解せられないことの譬。同ふ相類は外へ排す。

○(ロ)〔朋黨比周〕—組を結び、黨を立て、親しみあふこと。

○(ハ)〔尸位素餐〕—才徳、功勞もなく、徒らにその位に居り徒にその祿をうくること。(凡そ祭には、一人を端坐せしめて祭の主となす。之を尸といふ。尸位とは祭事の尸がその位にあるのみにて、その勤めをなさず。素餐は徳官に稱はずして空しく祿を食むのみなるをいふ)

○(ニ)〔大同小異〕—大體は同じで、少しの差異があること。

○(ホ)〔大車輪の活躍〕—車輪の轉するやうに、盛に活動すること。

【三】 左ノ語句ニ讀假名ヲツケ且其意義ヲ記セ

操觚者 暖簾 流言蜚語 耽溺 苛斂誅求

【答】〔操觚者〕—文は昔支那で文字を書いた方形の本、文筆に従事するもの、文人、記者。

〔暖簾〕—商家の軒先などにかけて、日よけとする布帛、又商家の屋號。

〔流言蜚語〕—蜚は飛に通ず。事實無根のとり沙汰。

〔耽溺〕—ふけりおぼれること、その物事に心をとられて分別を忘れること。

〔苛斂誅求〕—苛斂は重い税をとること。誅求は際限なくせびりたてること。苛酷な徴税。

【四】 讀方ト意義(大正二、海軍兵學)

(イ)金齒無缺の國體

(ロ)唇齒輔車の關係

(ハ)嶺然頭角を見はす

(ニ)誰か烏の雌雄

を知らんや (ホ) 附和雷同

【解釋】(イ)〔金齒無缺の國體〕—極めて堅固にして瑕疵なく完全なる國がら。未だ一度も外侮を受

けたことのない國がら。

○(ロ)〔唇齒輔車の關係〕—利害關係の甚だ深い國をいふ。唇は唇、齒は齒、輔車は車に載せしものを支持ところのもので、兩者相俟つて用をなすといふ義からいふ。

○(ハ)〔嶺然頭角を見はす〕—他の者よりも特にぬけ出でゐる。嶺然は山の高く聳えた形容。

○(ニ)〔誰か烏の雌雄を知らんや〕—烏の雌雄は相似て辨じ難いから、善惡の別をいふことはいふ

語句解釋篇

ヒコウ 攻守 戦術  
ハシラ フラマシ  
クシニル



【木】(附和音同) 深き思慮もなく、他人の説に賛成すること。

【二五】 左ノ漢字ニ讀方ト解釋トヲ施セ

輔弼 叔 詔 牛耳を執る 才庸 壘斷 胚胎 杜撰 江湖

【答】(輔弼) たすけること。輔任。

【叔】 其の人に接せずして、私に之を模範として學ぶこと。

【詔】 學問技藝などの深く達して居ること。又は人の家に行くこと。

【牛耳を執る】 同盟を結ぶに牛耳の血を啜る。尊者牛耳を執り、尊者之にのぞむのが禮であるが、普通には牛耳を執るを以つて主盟者に用ふ。

【才庸】 才はほこ、庸はたて、重動の前後相違衝突して一致しないこと。

【壘斷】 壘は市場の高き所、こゝに上りて、市場の様子を見、我が利益を獨占する意。

【胚胎】 みごもる、きざす、物事の起因となること。

【杜撰】 【四】 參照。

【江湖】 川と湖、轉じて世の中の義。

【梨園】 俳優又は演藝の伎曲。

【一六】 解釋セヨ

○(1) 大寒にして裘を求む (2) 匹夫罪なし壁を抱いて其れ罪あり (3) 桃李不言下自成蹊

(4) 梓人 ○(5) 椒庭 (6) 大逆 (7) 偃武 (8) 健忘 (9) 六軍 (10) 出藍

【解釋】(1) 「大寒にして裘を求む」 其の場合に臨んで(體)に顧きたる體。泥棒を見て繩をなふ類

(2) 「匹夫罪なし壁を抱いて其れ罪あり」 匹夫其の物は罪がないけれど、利に迷つて罪を負ふ。

(3) 「桃李不言下自成蹊」 徳ある人はたとひ黙して潜んでゐても人自ら之を慕ひ歸服する事をいふ

(4) 「梓人」 大工の棟梁。

(5) 「椒庭」 皇后の在す宮殿。

(6) 「大逆」 人倫に道にそむいた惡。即ち君父を弑するの類をいふ。

(7) 「偃武」 備はやすむ。世の治平となりしに言ふ。偃甲。

(8) 「健忘」 物忘れの確なこと。甚だしく物忘れすること。

(9) 「六軍」 天子の統御し給ふ軍隊。支那の周代に、軍隊の編制、即ち、伍(五人)兩(五伍)卒(五兩)旅(五卒)師(五旅)軍(五師)故に一軍は一萬二千五百人、王は六個の軍即ち七萬五千人を出すの定なりしよりいふ。

(10) 「出藍」 青色は藍より出で、藍よりも青きが如く、學問技藝の道にて弟子の師より優れて居る

の意。

【一七】 九平易ナル口語ニテ解釋スベシ(大正二、海軍經理)

冥加 絶對的・相對的 水のま

【解釋】【冥加】——冥は冥冥の義。暗喑裏に佛の加護を蒙むるをいふ。神佛のおかげ(庇護)

【絶對的】——一切の現象差別に超越して獨立すること。相對的に對する語。

【相對的】——ある條件の下にいふこと。事物の相對するものある場合にいふ。

【水のま】——しばしの間。暫時。

【一八】 左ノ語ノ讀方及ビ意義ヲ記セ (大正二、専門檢定)

蓮府槐門 涅槃 蓮府 槐門 掛

【解釋】【蓮府槐門】——蓮府も槐門も共に大臣の異稱。

【涅槃】——迷をはなれ、悟をひらいて、生死の因果を離れて超越すること。煩惱を滅し、迷妄を脱して眞理を證得するにいふ。又普通には釋迦の入寂を特稱す。(佛語、圓寂、寂滅、無爲、滅度、安樂、不生不滅などと譯す。佛教悟道の最終意にして生死輪廻の域を脱したる妙所)

【圓佛】——佛に手向ける水又は香水。佛語。

【杜撰】——【四】 参照。

【折衷】——かれこれの説を取捨してその中間をとること。彼ト此ト取捨して適宜 之ヲ取

【一九】 左ノ問題ノ右側ニ讀方ヲ附シ、左側又ハ下部ニ其ノ意義ヲ記スベシ(大正二、東北帝大農)

狂瀾を既倒に廻らす 梅風沐雨 噴噴 淺茅生 御稜威 庭訓

【解釋】【狂瀾を既倒に廻らす】——勢のさかんなる大波のすでに倒れんとするをかへす。すでに覆へたるものを再びもとにかへすにいふ。

【梅風沐雨】——風に櫛り、雨に沐ぶ。風雨にさらされて艱苦を極めること。

【噴噴】——かみくだくこと。かみ味ふこと。

【淺茅生】——短いかやのまばらに生えて居る野原。

【御稜威】——天皇の尊嚴な御威光。

【庭訓】——家庭に於ける教訓。

【二〇】 解釋セヨ

(イ)阿堵物 (ロ)附驥尾 (ニ)金蟬玉振 (ホ)耆宿

【解釋】(イ)【阿堵物】——錢の異稱。阿堵はもと晋代の俗語「コレ」「コノ」「コノモノ」などの義。晋

語句 解釋篇

金の字を口にするを俗せず、錢を見て阿堵物といへるより起る。  
附驥尾 蒼蠅の驥尾に附きて千里の遠きに達するやうに、俾れたる先輩のしりへにつきて徳業をなすをいふ。

(ロ) 附驥尾 蒼蠅の驥尾に附きて千里の遠きに達するやうに、俾れたる先輩のしりへにつきて徳業をなすをいふ。

(ハ) 金聲玉振 金は鐘の屬、玉は磬。八音を合奏するに、先づ鐘を打ちて其の聲を宜べ、磬を擊ちて其の韻を收めて樂を一終す。智徳の全備せるに喩へいふ。八音は八種の鳴り物、即ち、金、石、絲、竹、匏、土、革、木の稱。

(ニ) 金聲玉振

金は鐘の屬、玉は磬。八音を合奏するに、先づ鐘を打ちて其の聲を宜べ、磬を擊ちて其の韻を收めて樂を一終す。智徳の全備せるに喩へいふ。八音は八種の鳴り物、即ち、金、石、絲、竹、匏、土、革、木の稱。

(ホ) 耆宿 年老いて徳望ある人。

【二】左ノ句ノ讀方ヲ右傍ニ、意義ヲ括弧内ニ記スベシ(大正三、海軍兵學)

雲烟過眼 (ロ) 利權に均霑す (ハ) 尾大不掉 (ニ) 柘子定規 (ホ) 言肺腑より出づ

り出づ

【解釋】(イ) 雲烟過眼 〔物事に深く心を止めずに見過すこと〕。

(ロ) 利權に均霑す 〔利益を他と平等に受くべき權利を得る〕。

(ハ) 尾大不掉 〔尾大なれば掉はずとも讀む。動物の尾が大なるときはこれを動かすに困難である〕。

やうに、下の勢力が上よりも強ければこれをおさへることが出來ぬに譬ふ。

(ニ) 柘子定規 〔正しくない定規。正しくない標準〕。

(ホ) 言肺腑より出づ 〔そのいふことが眞心から出るといふこと〕。

【三】讀方ヲ附シテ解釋セヨ (大正三、專門檢定)

(一) 名證自性 (二) 曠日彌久 (三) 上達部殿上人 (四) 判官 (五) 憧憬 (六) 拮据經營 (七) 鬻圍氣 (八) 意馬心猿 (九) 墨染の袖 (十) 醫咳に接す

【解釋】(一) 名證自性 〔明治四五、小樽高商〕 (二) 曠日彌久 〔一〇〕 参照

(三) 上達部殿上人 公卿、殿上人に同じ。公は攝政、關白、大臣をいひ、卿は大、中納言、三位以上、但し參議は四位にても亦之に入る。殿上人は昇殿を許されたもの。四位、五位及六位の藏人。月相(卿相)雲客に同じ。

(四) 判官 中世の四等官の第二等官、尉のこと。普通には檢非違使の尉。

(五) 憧憬 あこがれること。はるかに思ひよること。

(六) 拮据經營 〔拮据經營〕 仕事に骨折つて、あるもくろみをたて、事をなすこと。

2327

御手洗

○ (七) 〔雰圍氣〕—地球又は他の天體をとりまいてゐる氣。一種の瓦斯體。地球の雰圍氣は空氣の類。  
(八) 〔意馬心猿〕—心情の制御しがたきを言ふ。煩惱情慾が盛んにして制御しがたきを繋いである馬や猿に喩へた語。佛語。

(九) 〔黒染の袖〕—黒くそめた袖。即ち僧衣のこと。

○ (十) 〔聲咳はしはぶき、せきはらひ。〕—聲咳はしはぶき、せきはらひ。面會することの敬語。

〔二三〕 左ノ字句ノ右側ニ讀方ヲ附シ下部ニ意義ヲ記スベシ (大正三、東北帝大農)

勅懲 完壁 酌量 ・ 寂滅 濱庇

〔解釋〕〔勅懲〕—勸善懲惡の略。即ち善事をすすめ惡事をこらすこと。

〔完壁〕—むきずの玉。轉じて物事の缺點のないこと。

〔酌量〕—くみわけること。事情を推測してやること。

〔寂滅〕—物の自然に消滅すること。佛語。无明煩惱の境を離脱すること、轉じて死ぬること。

〔濱庇〕—海濱の家。

〔二四〕 讀方ト解釋。(大正四、陸軍士官)

御手洗 擲手 胡籀 好事家 宣旨

〔解釋〕〔御手洗〕—神社の前に置いて身を淨める爲に設けられた水。

〔擲手〕—又は捕手。敵の後面。城の裏門。正面の追手(大手)といふに對す。

〔胡籀〕—矢を盛つて背に負ふ具。

〔好事家〕—ものずきの人。風流人。

〔宣旨〕—任官の勅旨を藏人に傳へ、更に上卿から外記へつたへて宣下すること。

〔二五〕 解釋セヨ (福島商)

其能 舍人 北面 物故 刹那 玩物喪志 觸不及舌 操觚者 中肯綮

執牛耳

〔解釋〕〔其能〕—その道の上手。その道に深く通じて居ること。

〔舍人〕—天皇又は皇族等に近侍して雜事をつとめたもの。牛車の牛飼ひ、馬の口取りなどの稱。

〔北面〕—北向き。臣として君に事へること。北面の侍、即ち院の御所を守護する武士のこと。

〔物故〕—死ぬこと。

〔刹那〕—佛語。極めて短い時間。一彈指の間。

〔玩物喪志〕—耳目の好むところの外物を愛玩すれば、大切な志を喪失するに至るの義。

語句解釋篇

〔馴不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>舌〕——一度言葉を出し、其の言に相違があつて之を取り消さうとして、馴馬の疾き車を以つてこれを追ふも永久に取かへしのつかざるをいふ。

○〔操帆者〕——文筆に従事するもの。文人。

〔中<sub>ニ</sub>背紫<sub>一</sub>〕——急所を衝く意。背は骨につく肉、紫は骨と肉との結合せる所。

〔執<sub>レ</sub>牛耳<sub>一</sub>〕——同盟をなすには牛の耳の血を吸る。卑者牛耳を執り尊者これにのぞむが禮なり。けれども普通には牛耳をとるを以つて主盟者の義に用ひる。同盟の主盟者。

〔二六〕 解釋(大正四、廣島高師)

〔一〕台覽 (二)照會 (三)整理 (四)實在 (五)動機 (六)概念 (七)莊園

〔八〕右筆 (九)座元 (十)同僚

【解釋】(一)台覽——高貴の御方の御覽になること。

(二)照會——問ひ會すこと。

(三)整理——受けをさめること。

(四)實在——主観以外に實際に存在する宇宙の眞實。

(五)動機——別個の具體的概念の中がら共通してゐる部分を抜き出して、それを綜合統一して更に精神界の現象とする心の作用。

(六)〔概念〕——別箇の觀念から共通の部分を抜き出して、之を統合した觀念。

(七)〔六親〕——六種の親、即ち、父、母、兄、弟、夫婦。一説に、父、母、兄、弟、妻、子の稱、一説に父、子、從父昆弟、從祖昆弟、曾祖昆弟、族昆弟をいふ孰れにてもよろし。

(八)〔右筆〕——詔筆に同じ。古昔貴人の傍に侍して筆札を掌る役人。書記役。

(九)〔座元〕——興行座の主。

(十)〔同僚〕——ななま。同役。

〔二七〕 左ノ語ノ讀方ト意義トヲ問フ。(大正五、東北大工專)

〔一〕會 (二)指揮 (三)從容 (四)政所 (五)親炙 (六)外様 (七)莊園

【解釋】(一)會——よく了解する事。のみこむこと。合點すること。

(二)指揮——つまはしき。誹謗すること。

(三)從容——動作のゆつたりとしてせまらぬさま。落着いてゐるさま。

(四)政所——すべて政を執り行ふ所。檢非違使廳の稱。鎌倉時代に政令を出したところ。室町時代に財政を司り貸借土地等の訴訟を裁決したところ。

(五)親炙——親しく接近して薰陶せられること。

(六)外様——總川時代に於いて、將軍の一族または譜代でない大名をいふ。

〔ト〕〔莊園〕平安朝以後、功臣、權門等の私有地で、賦税、調庸のなかつたもの。

〔二八〕左ノ語ヲ譯タベシ (大正五、長崎高商)

會釋 几帳 敷行 胡鏡 道鏡 蜀魂 輪奐

〔解釋〕〔會釋〕挨拶。應對。辭義。

〔几帳〕臺に柱を立て、これにとばりをかけ、昔、貴婦人が座の傍に立て、外から見えぬ様にしたもの。

〔敷行〕ひきのぼすこと。ひろげること(文章議論など意義をおしひろめて、他に及ぼすことといふ)

〔胡鏡〕〔二四〕参照。よき成るは、その人の心

〔蜀魂〕ほととぎす。時鳥。霍公。郭公。杜鵑。子規。杜宇。

〔輪奐〕〔二二〕参照。

〔輪奐〕建物の高大善麗なのを賞めていふ語。

〔二九〕左ノ語句ヲ解釋セヨ (大正五、陸軍士官)

徵忱を陳ぶ 間然する所なし 大團圓 葛藤 對象

【解釋】〔徵忱を陳ぶ〕自分のまごころをのべる。徵は僅の意にて謙遜したる語。忱は誠心。

【間然する所なし】かれこれと非難する缺點なし。

【大團圓】おしまひ。終。

【葛藤】つたかづら。悶着。事のもつれなどに譬ふ。

【對象】精神活動の目的。客觀上の事物。

【三〇】解釋 (大正五、廣島高師)

イ取沙汰 (ロ) 取わたりの古渡 (ハ) 取手 (ホ) 取打 (ヘ) 取車

(ト) 取沙汰 (チ) 入魂 (リ) 花筏 (ヌ) 物色す

【解釋】(イ) 賢所 宮中で皇祖皇宗を祀り、神鏡を奉安してある御殿。

(ロ) 取わたりの古渡 古く外國から渡來した物品。古物。

(ハ) 取手 ぶた。

(ニ) 取打 人の群集する場所。

(ホ) 取手 蕎麥切など手づから作ること。素手で人を打ちこるすこと。手づから他の首を斬ること。約束又は和談の成立したるしに手をうちならすこと。又は、和談約束の成立。

(ヘ) 取車 祭禮の時に車の上に花又は人形等を飾つて曳き出す車。だしやたい。だんじり。

(ト) 取沙汰 世上の噂。  
 (チ) 入魂 親意。親密。  
 (リ) 花鏡 花が水面に散つてゐるのを見立て、いふた語。  
 (ク) 物色す 容貌をあてとして、行方不明になつた人を探すこと。人相書によつて人を探求する。

【三二】 左ノ字句ニ假名ヲ施シ且之ヲ解釋セヨ (大正六、米澤高工)

敵愾心 激深 眞摯 杜撰 破綻 蘊蓄

【解釋】 敵愾心 敵に對する憤りの心。敵と戦はんとする心。  
 【出納簿】 金銭又は物品の收入支出を記入する帳簿。  
 【激深】 水底を透つて深くすること。  
 【眞摯】 極めて眞實なる事。まつすぐに事ななしはめること。  
 【從容】 【二七】 参照。ニツマリシテ、  
 【杜撰】 【四】 参照。ツツミカケ、  
 【破綻】 やぶれほころびること。轉じて物事の成りたりのこと。  
 【蘊蓄】 たくはへ。學問、智識などの素養が深いこと。

蘊蓄  
 激深  
 眞摯  
 杜撰  
 破綻

【三三】 左ノ讀方意義ヲ問フ (大正六、陸軍士官)

擧蹙 寒暄 檢覈 黜陟 悖德

【解釋】 擧蹙 肩を擧めて心配すること。蹙をしかめること。  
 寒暄 寒さ、暖かさと。轉じて時候の挨拶。  
 檢覈 厳しくとりしらべること。  
 黜陟 官位の高下。官位をあげるとさげること。  
 悖德 徳義にそむきもとること。  
 【三三】 讀方ト意義 (大正六、上田眞絲)

熱闘 選俗 成算 參差 車駕 族本

【解釋】 熱闘 人がこみあつてさわがしいこと。繁華で混雑すること。  
 選俗 ばうずがへり。一旦僧侶になつたものが再び俗人になること。  
 成算 物事をなしとげる見込。心中の成案。かれて立てある心算。  
 參差 或は高く、或は低く、ひとしからぬ様。入りまじつて居る様。  
 車駕 行幸の時に天子の御車を稱し奉る語。轉じて天子の御事にも用ふ。

【旗本】——三つの意あり。一、大將の陣所を言ふ。旗下、麾下と同じ。二、大將の陣所を衛る兵士のこと。麾下兵又は單に麾下と言ふ。三、徳川時代において將軍直參の士の知行一萬石未満百銀以上のものを稱。

【三四】 次ノ熟語ノ讀方及其意義ヲ書ケ (大正六、東北帝大工專)

○(イ)朝三暮四 ○(ロ)道破 ○(ハ)外戚 ○(ニ)入魂 ○(ホ)墨守 ○(ニ)兼行

【解釋】(イ) 朝三暮四——詐術を用ひて、人を術中に陥れること。又、目前の差別を争うて、大本の異同を注意せぬこと。(古昔、狙公が、猿共に向つて、朝は林檎を三つづゝ、暮には四つづゝ與へやどぐいふと猿共が怒つたそこで、今度は朝四つづゝ暮には三つづゝ與へやうといふと猿共は喜んだといふ寓言から起つた語。)

○(ロ) 道破——論破。あくまで説き破る。いつてのける。

○(ハ) 外戚——母方の親族。姻族。

○(ニ) 兼行——母方の親族。姻族。

○(ホ) 墨守——墨翟守。宋の墨翟がよく城を守つて、楚の軍を卻けた。因つてよく籠城するを言ふ。墨

守は此の故事により、轉じて、固く自説をもつて動かないことといふ。

○(ハ) 兼行——夜は目をこらして行くこと。

【三五】 左ノ語句ノ讀方ヲ記シ且意義ヲ解ケ (大正七、専門檢定)

(一) 絶対の真理 (二) 社會の木鐸 (三) 直情徑行 (四) 解脫 (五) 重簾の弓

【解釋】(一) 絶対の真理——如何なる場合にも無條件にて存在する真理。

【社會の木鐸】——社會の人を教導する人。木鐸は、全體を金屬にて製し舌を木で造つた鈴、支那では古昔政教を施す時振つて衆聽を注意し然る後述べた。因つて學者教を世に施すにいふ。鐸は鈴(武事には舌を金屬で作つた鈴を用ひた)

【直情徑行】——情のままを直ちに舉動にあらはすこと。

【解脫】——煩惱の繫縛を解き、三界の業苦を脱すること。悟。

【重簾の弓】——古軍陣に用ひし木弓にて、雨露にあへば(簾)の離れる故に簾を巻いて拵へた弓。少しづつ間をおいて細い簾を巻く故にいふ。

【三六】 解釋セヨ (大正七、神戸高商)

語句解釋篇



○(い)誰か鳥の雌雄を知らん。○(ろ)自暴自棄。○(は)好専門を出でず。○(に)藍より出でて藍より青し。

【解釋】(い)「誰か鳥の雌雄を知らん」(十四)参照。

○(ろ)「自暴自棄」——自ら我身を苦し、棄つること。やけになること。

○(は)「好専門を出でず」——好いことは、とかく世間に知れにくいこと。

○(に)「藍より出でて藍より青し」(十六)参照。弟子の師、より又よて師。

【三七】 解釋セヨ (大正十、東北大工)

衣鉢

伏勢

押領

鬚録

弟子の師 道徳

【解釋】○「衣鉢」——衣は袈裟、鉢は應器、佛者が法を弟子に傳へるをいふ。轉じて學問技藝の妙技極意をも傳授するをいふ。

○「逸物」——すぐれたもの。駿馬にもいふ。

○「伏勢」——敵軍の不意を襲ふために、かくしておく軍勢。

○「押領」——他人の領地又は財産をうばひ取ること。

○「鬚録」——老人の元氣さかんなること。輕健なるさま。

【三八】 左ノ語ノ讀方及意義ヲ問フ (大正十、陸軍士官)

嗚咽

傾志

垂涎

巡錫

起請文

起請文

【解釋】「嗚咽」——咽び泣くこと。

○「傾志」——うらみ怒ること。

○「垂涎」——よだれを垂らすこと。轉じてそのものを大に欲しがること。

○「巡錫」——錫は錫の杖にて僧のつくもので、僧侶の諸國をめぐりあること。高僧の巡回すること。

○「起請文」——約束に偽りのないことを神佛に誓を立て、そのしるしに認めた證書。

【三九】 次ノ熟語ノ讀方及其意味ヲ書ケ (大正七、東北大工專)

○(イ)月旦 ○(ロ)物色 ○(ハ)皇謨 ○(ニ)防人 ○(ホ)供御 ○(ヘ)頂門一針 ○(ト)直情

徑行

【解釋】○(イ)「月旦」——人物を品評すること。(漢の許劭が鄉黨の人物を批評した故事から出た)

○(ロ)「物色」——

○(ハ)「皇謨」——帝王の謀策。

○(ニ)「防人」——

○(ホ)「供御」——

○(ヘ)「頂門一針」——

○(ト)「直情」——

(三) 防人——上古、軍國の兵を筑紫の大府等に送りて駐屯せしめた海防兵。邊境を守る人。壹岐、對馬などには島守と記す。

(ホ) 供御——天子の御膳部。

(ハ) 頂門一針——頭上に一本の針をさす義。人の急所を刺して痛むに懲りて戒を加ふるに譬ふ。

(ト) 直情徑行——三五 参照

【四〇】 左ノ語句ニ假名ヲツケ且其意義ヲ解説セヨ (大正七、鹿兒島高農)

自敬自重 公生涯 期成同盟會 達觀 融通 略談 蓄積 無雜作 得貴意 度

【解釋】 自敬自重——自己の品位を保ち、自己の行爲をつとむること。

【公生涯】——公人(公の職務のある人)としての生涯。「生のうち、公職についてゐる期間。」

【期成同盟會】——或る物事を成就する目的で、多くの人が同盟した會。

【達觀】——部分にかたよらず汎く見渡すこと。未來のことまで見ぬくこと。公平な心で物事を觀察すること。

【融通】——滞りなく通用すること。物を彼是にかよはして用ひること。

【略談】——痰を吐くこと。

【蓄積】——たくはへつむこと。

【無雜作】——手輕なること。骨を折らぬこと。容易なること。

【得貴意】——あなたの思召を得度い。さう思召し下さい。

【四一】 左ノ語句ト讀方ノ解釋ヲ示セ (大正八、山口高商)

租借 押領 含蓄 調度 直垂 妥當 口碑 陳腐 推敵 涉獵

【解釋】 租借——一國が他國の領地を、租税を出して借り入れて、自國の統治におくこと。

【押領】——三七 参照。

【含蓄】——深い意味をふくむこと。

【調度】——手まわりに使ふ道具。弓矢の特稱。

【直垂】——日本古代の庶民の常服。仕立方は素襖と同じで方領で、紋所なく袖括り、組緒の菊綴、胸紐がある一種の衣裳。もとは諸人の常服であつたが、江戸時代には侍従以上の武家の禮服となつた。袴は通常は長袴を用ひる。

【妥當】——よく適合してゐること。おだやかなり。

現代文新釋法

【口碑】— ことばたし。

【詞】— ふるくさいこと。

【推敲】— 字句をねること。唐の賈島が「僧敲月下門」の句の敲の字を推にしやうかと苦慮した故事から起る。

【涉獵】— 廣く書をあさりもとめて讀むこと。

【四二】 左ノ語句ノ讀方及ビ意義ヲ記セ (大正八、名古屋高工)

倏忽 懈懈 倕御 杜撰

【解釋】— 倏忽。極めて短時間。

【無聊】— 聊は安んじ樂しむ義。徒然なこと。退屈なこと。

【信仰】— 神佛を信じてこれにたよること。

【杜撰】— 參照。

【四三】 左ノ語句ニ假名ヲツケ其意義ヲ解説セヨ。(大正八、鹿兒島高農)

懈懈 倏忽 沮喪 前襟 拂底 口錢 當惑 言責 虎視耽々

【解釋】— 前提。後に説く議論の基本となる前おき。

【恃強】— 他人の心中を思ひはかること。推測。

【勃發】— 俄に物事の起り立つこと。

【沮喪】— 元氣ぬけのすること。勢のうせること。氣落すること。

【札襟】— 堅い物のきしること。人と人との不和をいふ。

【拂底】— 品物の全く缺乏すること。

【口錢】— 賣買のなかだちをした手数料。

【當惑】— 思案がつきてこまること。途方にくれること。

【言責】— かつて言ふたことに對する責任。

【虎視耽々】— 耽々は下を見るさま。虎の眼をはつて下を見るやうに威嚴あるさま。他の隙を覗うて靜かに様子を見てみるさま。

【四四】 左ノ語ヲ寫取り讀方ヲ示シ解スベシ (大正八、東北大農)

選部 先聲 主味 兼附 倕御 遺誦 教唆 敷衍 玉の緒

【解釋】— 家苞。家へ持ちかへる土産。

【上達部】— 【二二】 參照。

語句解釋篇

Handwritten signature and date: 三〇三

【先覺】—先に道を覺ること。先に道をさとつた人。學問知識ある先輩。

【三昧】—佛語、一途に心を傾けること。雑念を去つて心を專一にすること。

【等閑】—なげやり。なほざり。注意せぬこと。

【兼初】—【三九】参照。

【達詣】—【三八】参照。

【教唆】—そゝのかすこと。おだていざなふこと。

【敷衍】—【二八】参照。

【玉の緒】—玉をつらぬく緒。轉じて、玉を魂にかけ、魂の緒即ち生命のことをいふ。「玉の緒」の絶え

【亂れ】間、長き、短き等の枕詞。

【四五】次ニ學グル語ニ讀方ヲ附シ解釋ヲセヨ (大正八、神戸高商)

(イ)復辟 (ロ)的惟 (ハ)好尚 (ニ)折衝 (ホ)譜代大名 (ヘ)本地垂跡

【解釋】(イ)【復辟】—辟は君。君の位に復すること。

(ロ)【的惟】—たしかなこと。まぢがひなきこと。

(ハ)【好尚】—すきこのみ。はやり。

(ニ)【折衝】—敵軍の衝き來るを折り止むること。ほこさきをくじくこと。又は談判すること。

(ホ)【譜代大名】—徳川時代に於ける三百諸侯中、徳川氏が將軍となるまへから臣下であつたものをいふ。外様大名に對す。

(ヘ)【本地垂跡】—日本の神々は皆、印度の佛陀の垂跡であると説いて、神佛を混同する説。天照大神を天竺の大日如來の垂跡となし。八幡大神を阿彌陀如來なりなどといふ。本體なる佛菩薩を本地といひ、化神してわが國の神となるを垂跡といふ。

【四六】左ノ語句ノ意義ヲ書ケ (大正九、海軍各校)

(イ)輪奐の美 (ロ)畫龍點睛 (ハ)等閑に附す (ニ)這般の消息 (ホ)世故に長ず

(ヘ)後塵を拜す

【解釋】(イ)【輪奐の美】—建築物の高大美麗なこと。

(ロ)【畫龍點睛】—名人が龍を描いて眼睛を點ずると、龍が生きて天上に上つたといふ故事から起つた語。

豫て施設した物事が、僅かな骨折りで、全部完成すること。詩文などの一字一句を下して全篇がそのために生動すること。

【等閑に附す】—なほざりにする。なげやりにする。注意せぬこと。

〔這般の消息〕——この様な事情。

〔世の中の俗事にたけて居る。世情によく通じてゐる。〕

〔後塵を拜す〕——人よりも劣る。人のあとにつく。

【四七】 解釋セヨ (大正九、東京高師)

惠事千里 藜食ふ虫もすきずき 心の鬼が身を責める 手の舞ひ足踏む處を知らず。

【解釋】〔惡事千里〕——悪いことは直ぐに人の口に乗り、千里の遠い所へも傳はる。「好事門を出でず」の對。

〔藜食ふ虫もすきずき〕——人の醜とする所を愛し、人の苦とする所を樂しむ類。人の嗜好せざる物を嗜好するは例へば、藜は辛きものなれば、之を食ふ虫あるまじと思ふに之を好む虫あるが如く、人の嗜好する處は其の嗜好によるものなり。

〔心の鬼が身を責める〕——心の鬼とは良心に喩ふ。良心が鬼の責める様に、罪咎に對し責をあたへること。

〔手の舞ひ足の踏む處を知らず〕——欣喜雀躍、嬉しさに耐へないこと。大變よろこんださま。

【四八】 解釋 (大正九、神宮皇)

賓頭盧

忍辱

誣言

誅竄

傾軋

剝那

睥睨

誅詞

咫尺

襁褓

【解釋】〔賓頭盧〕——羅漢の白頭長眉のもの。びんづる尊者。なでぼとけ。撫でられても打たれても怒らぬお人よし。

〔忍辱〕——辱めをたへ忍ぶこと。

〔誣言〕——しひごと。造りごととして人を惡し様にいふ。

〔誅竄〕——誅伐と流罪。

〔傾軋〕——心をなやます妄念。

〔剝那〕——【二五】 參照。

〔睥睨〕——にらみつけること。

〔誅詞〕——死者を弔ひその生前の功德をたへる文辭。

〔咫尺〕——極めて短い距離。まのあたりのこと。

〔襁褓〕——古いくす布。ぼろぎれ。

【四九】 左ノ語句ニ假名ヲツケ且其意義ヲ解説セヨ (大正九、鹿兒島高農)

力説 肉薄 馴致 豹變 消息 徹底 調停 先驅者

【解釋】〔力説〕——力のあらんかぎり説くこと。

【城攻】 城攻の時、城の真下まで押しよせること。そばちかく攻めよせること。

【馴致】 次第にある情態に到達させること。

【心を政め善にうつること】

【徹底】 底までつらぬきとほること。その深奥の點にまで達すること。

【調停】 仲裁。仲なほりをさせること。

【先驅者】 さきがけ。馬に乗りて先導する人。

【五〇】 左ノ語ヲ解釋セヨ (大正九、陸軍士官)

批准 妥協 時代錯誤 能率増進 積極的方針

【解釋】 臣卜よりの奏上文に對して、君主がその可否を判決して、許可したまふこと。國を

代表する使臣が雙方合意の上で定めた條約の案文を國の主權者が承認すること。

【妥協】 和睦の相談をまとめること。双方の折合をつけること。

【時代錯誤】 時代の要求に反する固陋の言動。

【能率増進】 同じ時間又は同じ人数で、仕事をする能力の割合を増すこと。

【積極的方針】 進んで物事をなさうとする方針。消極的方針に對する語。

【五一】 左ノ語ノ讀方ト意義ヲ説明スベシ (大正九、山口高商)

治安 合辨 内訌 破綻 濫觴 妥協 批准 肉薄 無盡藏 高御座

【解釋】 治安 國家社會がよく治つてやすらかであること。

【合辨】 共同出發して事業をなすこと。

【内訌】 うちわのも。内亂。

【破綻】 破たん。

【濫觴】 はじまり。おこり。もと。孔子家語に、江始め岷山より出づ。其の源以つて觴を濫ぶべし。

其の江津に至るや觴樽せざれば、以つて涉るべからずの語より出づ。

【肉薄】 肉はく。

【無盡藏】 無じんざう。

【高御座】 天子の御座。天皇の御位。

【五二】 左ノ語句ノ讀方ヲ記シ然ル後解釋セヨ (大正一〇、東女高師)  
言語道斷 江湖 檜皮葺 睚眦の怨 象徴

【解釋】「言語道斷」言ひやうがない。いひやうのない程甚だしいこと。

【江湖】 檜ひのきの木の皮の小方板で葺いた屋根。

【睚眦の怨】 わづかばかりのうらみ。睚眦は目をはつて人をにらむこと。即ちにらまれたくらの「寸したうらみをいふ。」

【象徴】 或る物事をかたどつて、これをあらはすこと。聲音又は形狀等が直接にある意義をあらはすこと。

【五三】 左ノ語ヲ解釋セヨ (大正一〇、陸軍士官)

設計 彈劾 誘拐 抽象的 過渡時代

【解釋】「設計」——みつもり。あるものを作るについての計畫。

【彈劾】——人の罪をあばいて上に訴へること。

【誘拐】——いつはりてかどはかすこと。

㊦

【抽象的】——【二六】 参照。  
【過渡時代】——舊い状態から新しい状態に移つらうとして、その途中にある時代。

【五四】 左ノ語句ニ假名ヲツケ且其意義ヲ解説セヨ (大正一〇、麻兒島高農)

慎重 得策 糊塗 默殺 首肯 妥當

【解釋】「慎重」——つゝしんで輕平な行動をなさぬこと。つゝしんで重重しい。

【得策】——利益あるはかりごと。便利な方略。

【糊塗】——ごまかし。曖昧。

【默殺】——そのことに關し沈黙を守り、世間の人が注意せぬやうにすること。

【首肯】——うなづく。うけがふこと。承諾すること。

【妥當】——【四一】 参照。

【五五】 解釋 (大正一〇、鳥取高農)  
(イ) 破邪緝正 (ロ) 晴窗借談 (ハ) 空谷の聲音 (ニ) 死んだ子の年を數へる (ホ) 蛇食ふま聞けば恐ろし雉子の聲

語句解釋篇

【解釋】(イ)「破邪顯正」——邪なる道を説き破つて、正しき道理をあらはしひらめること。

(ロ)「空谷の足音」——空音は足音。無人谷に人の足音のきこゆること。淋しきところに人の尋ね来たよるこび。又は非常に珍らしきこと。

(ニ)「犯人の手を敷く」——過去のことを回顧し、悔んで、彼是と愚痴をこぼしても、その効なきをいふ。

(ホ)「蛇喰ふと聞けばおそろし雉子の聲」——やさしそらに見える雉子も蛇をくふといふが、なるほど、さう思つて聞くと、實に恐ろしい聲である。

【五六】左ノ語ノ讀方ト意義トヲ説明スベシ (大正一〇、山口高商)

會釋 檮傲 執著 劈頭 物具 超越 洒落 拾收 益周 暗中飛躍

【解釋】「檮傲」——挨拶すること。うなづくこと。

「執著」——似せること。まねをする。

「劈頭」——深く思なかく。深く思つて忘れぬこと。

檮傲、挨拶、挨拶

【物具】——道具。調度等。専ら戦に用ふる調度即ち鎧。

【超越】——他に越えまざる。

【洒落】——物事に執著せず度量のおろいさま。胸中が清くさつぱりしてゐる。

【拾收】——ひろひおさめること。亂れた物をあつめて正しく原形にする。

【荒唐】——言説の根拠がなくて、つかまへどころのないこと。あてどのない説。

【五七】左ノ讀方ト解釋トヲ施セ (大正一〇、米澤高工)

宸襟 變遷 啓發 眩耀 凌辱 斬新 解纜 樞軸 社稷 剝那 寄生

木 絨緞 常磐木 制肘 蠢動

【解釋】「宸襟」——天皇の御心を申し奉る。

【變遷】——物事のうつりかはること。

【啓發】——意を開き辭を達す、知識をひらくこと。

【眩耀】——まばゆいばかりにひかりかゞやくこと。

【凌辱】——人をしのぎはづかしめること。



【解】 新奇なこと。思ひつきのあたらしいこと。此の語は唐人の方言なりといふ。

【解】 舟の纜を解いて出港すること。出帆すること。

【樞軸】 大切な所。かなめ。要所。大切なこと。

【社稷】 社は土地の神。稷は五穀の神。國は土穀に資りて以て人を養ふ故に立て、之を祀る。支那では、國を治めるものは、まづこの二つの神を祭つた。故に轉じて國家又は、朝廷の意。

【刺那】 參照。

【寄生木】 他の樹木に寄生する木。

【絨毼】 敷物などに用ふる綿糸の花毛氈。

【落葉木】 一年中落葉せぬ樹木。落葉木の對。

【束縛】 肘をおさへて自由に行動させぬこと。束縛すること。

【物ごめくこと】 物がもちくとうごめくこと。

【五八】 解釋セヨ (大正一一、米澤高工)

不偏不黨

狹隘

觀念

南船北馬

遼に

教唆

抵觸

提携

舊録

聯盟

安富

袞龍

熾烈

標榜

稅政

舊套

聯盟

狹隘

觀念

南船北馬

遼に

教唆

提携

舊録

聯盟

【解釋】 【不偏不黨】 中正にして何れにもかたよらぬこと。

或る觀念に伴つて他の觀念の生ずること。或る事柄から其に聯關して居る他の事柄に思ひ及ぶこと。

【熾烈】 明らかでないこと。不明白。漠然として居ること。

【熾烈】 勢の極めて盛んなこと。

【熾烈】 ひろげはること。

【標榜】 善行あるものを立札に書いてひろく示すこと。名目をつけて稱揚することをも言ふ。

【稅政】 あしき政治。弊政。

【舊套】 ふるいかた。古い習慣。

【聯盟】 同のものが互に誓を立て、契約を結ぶこと。同志のものどもの盟約。

【妥協】 【五〇】 參照。

【袞龍】 天子の御衣を申し奉る。轉じて天皇をも申す。

【狹隘】 セムこましいこと。狹苦しいこと。

【觀念】 目を閉ぢ、氣を專にして思念すること。意識の中の現象。現在の刺戟が現存せざるに起る想像概念。

【南船北馬】 馬船などによりて、南に北に奔走すること。支那の地、北方は馬行を便とし、南方は舟行

【遊に】——遠く。  
を便とす故にかくいふなり。

【五九】 解釋セヨ (大正一一、陸軍士官)

【相對的】——【一七】 參照。

【淘汰】——よりすぐること。不用の物をのぞくこと。自然淘汰。人為淘汰。

【濁汰】——よりすぐること。不用の物をのぞくこと。自然淘汰。人為淘汰。

【喝破】——聲を勵まして他の辭を抑止すること。叩を聞き蒙を排して眞理を解きあかすこと。

【道破】——【三九】 參照。

【狼藉】——亂雜。亂暴。

【管見】——極めて狭い見地。井蛙の見。

【達見】——よくその事情に通じた意り。すぐれた見識。

敬慕す

【教唆】——【四四】 參照。

【抵觸】——互にふれあつてさしははること。相衝突すること。矛盾すること。

【提携】——たづさへること。互にともなひつれること。手をとりあふこと。共共して事をなすことにも言ふ。

【六〇】 解釋セヨ (大正一一、名古屋高工)

無稽 忽諾 歸趨 肯綮 留保 東顧 讜語 壘斷

【解釋】「私淑」——親しくその人につかず、ひそかに之を手本として學ぶこと。欽慕する人あるも、或は古今時を異にし、或は東西程を隔て、親しく門に業をうくるあたはず、其の道をききて私に我身をよくすること。

【無稽】——つかまへどころのないこと。根も葉もないこと。よりどころなし。

【忽諾】——ゆるがせ。おろそか。なほざり。注意せぬこと。

【歸趨】——歸着する方向。傾向。おもむき。

【肯綮】——【二五】 參照。

【留保】——とめて保存する。

【掣肘】—【五七】 参照。  
 【造詣】—【二八】 参照。  
 【龍斷】—一人にて利を専らにするをいふ。龍は市場の小高きところ。ここを上りて市場の様子を見、利の多き所に行き利益を獨占する意。

【六一】 解釋セヨ (大正一一、福島高商)

金枝玉葉 水蕪の跡 伽藍 玉の緒 由緒 不設城府 折衝 首  
 貴臨

【解釋】「金枝玉葉」—天皇の御一族。皇族。

【水蕪の跡】—消息の文。

【伽藍】—寺。精舎。

【玉の緒】—【四四】 参照。

【日就月將】—日ニ就リ月ニス、ム、日に進歩するをいふ。日進月歩。

【不設城府】—人に接するに尊大なしむるをいふ。城府は區域なり。人に對して何らの隔てな、う

ち解けて心事を談ずる。

【折衝】—【四五】 参照。

【首肯】—【五四】 参照。

【賞臨】—人の訪ひくることの敬稱。人の我が家に来りて、ために我家に光彩を生ずる意。

【六一】 解釋セヨ (大正一一、明治専門)

除目 矢頃 先蹤 奇禍を買ふ 巨擘 折衝 首  
 輔輩

【解釋】「除目」—官吏を任免せる報告書。古へ諸官を召して官職に任ぜられたる公事。縣召の除目。

京召の除目。小除目等に別る。

【矢頃】—矢を放つに適當な距離。

【衣鉢を傳ふ】—【三七】 参照。

【先蹤】—先例。昔の事跡。

【奇禍を買ふ】—思ひがけなく災難にあふ。

【慰藉】—【三四】 参照。

【巨擘】おやゆび。轉じて、かしら。主なるもの。首領。

【葛藤】【二九】参照。

【垂府槐門】【二八】参照。

【摩訶輪車】【二四】参照。

【六三】解釋 (大正一一、神戸高船)

【直情徑行】

浩然之氣

濫觴

跼蹐

【解釋】「直情徑行」【三五】参照。

【浩然之氣】浩然とは盛大流行の貌。天地の間にひろく充滿してゐる元氣で、人にやどつて道徳性の勇氣となるもの。

【濫觴】【五一】参照。

【跼蹐】草行を跋、水行を涉といふ。ふみわたる。山川をかけまはる。跋履と言ふも同じ。

【六四】(イ)左ニ舉グル熟語ノ右傍ニ字音ノ假名ヲ附ケ、下方ニ意義ヲ記入セヨ

肯綮 逕庭 容喙

桎梏

(ロ)左ニ舉グル漢字ノ右傍ニ字音ノ假名ヲツケ、下方ニ意義又ハ其字ヲ含メル熟語ヲ記入セヨ

(大正一二、神戸高商)

己 己 獲 獲 裨 裨

【解釋】(イ)肯綮【六〇】参照。

【逕庭】大小廣狹の差。相隔たること。違きこと。

【容喙】さしでぐち。人の話の中に他より口を入れること。

【桎梏】手かせと足かせと。拘束の義、束縛の義。

(ロ)【己】おのれ。自身。自ら。

【己】すでに。

【己】とらふ。

【己】穀を刈る。

【裨】おぎなふ。たすける。

【裨】ひえ。ちひさし。

【六五】左記語句ノ右側ニ讀假名ヲ附シ其下ニ意義ヲ記スベシ (大正一二、明治専門)

語句解釋篇

- (1) 挂冠 (2) 覬覦 (3) 瞠若 (4) 偷安 (5) 齋宮 (6) 六日の菖蒲 (7) 漁父の利 (8) 盲龜の浮木 (9) 流言蜚語 (10) ひねもす

【解釋】(1) 挂冠 辭職すること。

(2) 覬覦 非分の望。下の者が望むまじき上の位をねらひうかがふこと。

(3) 瞠若 直視の貌。若は助字。ものに感じ、あきれて目を見はること。

(4) 偷安 目前一時の安樂を食ふこと。

(5) 齋宮 伊勢及び加茂のいつきの宮の居所。いつきのみやは、昔天皇の御即位がある毎に、未婚の内親王、女王をお下しになつた。

(6) 六日の菖蒲 時機を失うて役に立たぬことをいふ。菖蒲は、五月五日の端午の節句に用ふるものなれば、六日に至りては不用なるよりかといふ。

(7) 漁父の利 甲者と乙者が互に相争うてゐる隙につけ入つて、傍から勞せずして得る利益のこと。

(8) 盲龜の浮木 思ひがけなく、稀有の仕合に逢ふこと。

(9) 流言蜚語 無根の評判。事實のないうはさ。

(10) ひねもす 終日。一日。よもすがらに對して。

【六六】 左ノ語句ノ讀方及ビ意義ヲ問フ (大正一二、福島高商)

- (1) 登極 (2) 擲掄 (3) 乞骸骨 (4) 蒲柳之質 (5) 轍鮒之急 (6) 尸位素餐 (7) 祖述 (8) 物忌 (9) 開眼 (10) 私淑

【解釋】(1) 登極 即位。天子の位に即かせ給ふこと。

(2) 擲掄 もてあそぶこと。からかふこと。

(3) 乞骸骨 老臣の辭職を乞ふこと。

(4) 蒲柳之質 參照。

(5) 轍鮒之急 人の困窮にせまつてゐるにいふ。轍は車のわだち。鮒魚が水の濁れた轍にくるしんでゐる時は川の水を待ち難く、さしあたりの極くわづかの水を欲するに喩ふ。

(6) 尸位素餐 參照。

(7) 祖述 參照。

(8) 物忌 それにもとづいて述べ説くこと。

(9) 開眼 齋戒。謹慎。神佛を祭る時、若干日の間、飲食行爲をつゝしみ、身體の不淨を清め、穢にふれることをいむこと。

(10) 私淑 參照。

⑩「開眼」——佛體の彫刻又鑄造の功を竣へた時に、僧を招いて行ふ儀式。

【六七】左ノ字句ニ假名ヲ附シ其意義ヲ解釋スベシ (大正一二、水産講習)

(1) 良二千石 (2) 領袖

(3) 渴仰

(4) 和而不同

(5) 有爲轉變

(6) 一網打盡

(7) 懲羹吹壺

(8) 海若

(9) 一將功成萬骨枯

(10) 王侯將相寧有種乎

【解釋】(1) 良二千石——支那にては太守のことを二千石といふ。其の秩祿二千石である故である

(2) 領袖——えりとそで。轉じて、首領、かしら、人の模範となるに足る人。(えりとそでは人の目をつけるところのものなるが故なり)

(3) 渴仰——渴する者の飲みものを求むるが如く、甚だしくその人を仰ぎ慕ふをいふ。

(4) 和而不同——君子は人の説にして可なれば之に賛成し、不可なればこれに賛成せず、決して人におもねつて賛成するやうなことはないとの意。

(5) 有爲轉變——浮き世の出來事のうつりかはつてしばらくも止まざるをいふ。

(6) 一網打盡——罪人などを一時にすべて捕へ去ること。

(7) 懲羹吹壺——熱きあつものをすつて口をやきたるに懲りて、冷きなますを見ても恐れて

(5) 「やすが」——たより。てづる。

(6) 「素絹」——白い絹。僧侶などの白い絹の服。

(7) 「打物師」——刀劍などを打ち鍛へることを仕事とするもの。

(8) 「常住」——いつもかはらざること。

(9) 「引出物」——古昔、馬を引出して贈つたが、故に祝儀、また饗應の終などに來客に主人がおくる品物をいふ。

⑩「~~一網打盡~~」【四一】参照。

【七〇】左ノ語句ヲ解釋セヨ(大正一二、桐生高工)

(イ) 宸襟 (ロ) 社會奉仕 (ハ) 生業 (ニ) 陶冶 (ホ) 揣摩臆測

【解釋】(イ) 宸襟——【五七】参照。

(ロ) 社會奉仕——一身の利益、損害をおとにして、社會のためにつくすこと。

(ハ) 生業——よわたりの業。なりはひ。

(ニ) 陶冶——陶器師と鑄物師、養成すること。教へ育てること。

(ホ) 揣摩臆測——自分の心で他人のこころを推し測ること。揣摩は臆測に同じ。忖度。

【七一】左記一〇字中各一字ヲ有セル名詞又ハ熟語ヲ書キテ其右傍ニ讀方ヲ、下方ニ義ヲ記スベシ (大正一二、商船)

梯 涕 施 旋 悔 悔 伸 呻 辟 辟

【答釋】「梯」——「雲梯」——雲にとゞくほどの長い梯子。

「涕」——「涕泣」——涙を流して泣くこと。

「旋」——「旋轉」——ぐるぐるめぐること。

「悔」——「悔蔑」——あなどりないがしろにすること。

「伸」——「伸縮」——前の悪事をくいとる。

「呻」——「呻吟」——うめく。

「辟」——「辟除」——かたすみによつた土地。邊鄙な土地。

「辟」——「復辟」——【四五】参照。

【七二】次ノ語句ノ讀方ト意義トヲ明示スベシ (大正一二、小樽高商)

(イ)撥亂反正 (ロ)五風十雨 (ハ)形影相弔ふ (ニ)簞食壺漿 (ホ)苛斂誅求

(ヘ)賢所 (ト)世にも稀なる善智識

【解釋】(イ)「撥亂反正」——撥は治。亂世を治めて正道にかへすこと。

(ロ)「五風十雨」——五日に一度風吹いて、十日に一度雨ふる義。風雨の極めて適當なるをいふ。

(ハ)「形影相弔ふ」——我身と影と相弔ふの意にて、孤立して頼るところのなきをいふ。

(ニ)「簞食壺漿」——簞は「製」の飯器。食は飯なり。漿はおもゆ。少量の飲食の義にて、旅行に携ふる飲食物。

(ホ)「苛斂誅求」——【二三】参照。

(ヘ)「賢所」——【三〇】参照。

(ト)「世にも稀なる善智識」——世にも珍らしい高德の僧。善知識は、よく人を導いて佛道に入らせる徳の高い僧。

【七三】左ノ語句ヲ解セヨ (大正一二、和歌山高商)

(イ)時はこれ金 (ロ)一を聞いて十を知る (ハ)肝膽相照らす (ニ)間髪を容れず

(ホ)君子盛徳あつて容貌愚なるが如し

【解釋】(イ)「時はこれ金」——時間は尊重すべく惜しむべきである意。

- (ロ) 「一を聞いて十を知る」——一は數の始、十は數の終。頭腦明瞭なるをいふ。
- (ハ) 「肝膽相照らす」——兩人互にその心をうちあけて隠すところなく語りあふ。
- (ニ) 「間髪を容れず」——事の甚だ急にして、利害安危の分かるゝところ、一本の毛髪を容るゝ間もなきこと。
- (ホ) 「君子は盛徳あつて容貌愚なるが如し」——人は外見だけではわからぬことをいふ。君子は徳を修むること深きにかゝはらず、その外見かへつて愚人の如くである。

【七四】 次ノ熟語ニ讀方ヲ附シ且解釋スベシ (大正一二、金澤高工)  
 氾濫 脅威 更迭 隧道 焦燥

- 【解釋】「氾濫」——水 あふれひろがること。
- 【脅威】——おどしつけること。
- 【更迭】——いりかはること。くりかへ。更代。
- 【隧道】——地をほりぬいて作つた道路又は水路。
- 【焦燥】——あせること。やきもきすること。いらいらすること。

【七五】 左ノ語句ノ讀方及ビ意義ヲ問フ (大正一二、福島高商)

- (1) 敵愾心 (2) 敷衍 (3) 會釋 (4) 蒐集 (5) 巨擘 (6) 市尹 (7) 調度
  - (8) 不如意 (9) 杜撰 (10) 布衣之交
  - 【解釋】(1) 「敵愾心」——「三一」参照。
  - (2) 「敷衍」——「二八」参照。
  - (3) 「會釋」——「二八」参照。
  - (4) 「蒐集」——あつめること。
  - (5) 「巨擘」——「六一」参照。
  - (6) 「市尹」——市のつかさ。市長。市の事を掌る主。
  - (7) 「調度」——「四二」参照。
  - (8) 「不如意」——思ふがまゝにならぬこと。轉じて、生計の困難なこと。
  - (9) 「杜撰」——「四」参照。
  - (10) 「布衣之交」——貧しい時分の交り。
- 【七六】 左ノ語句ニ振假名ヲ付シ且之ヲ解釋セヨ (大正一二、仙臺高工)  
 (イ) 桑滄の變 (ロ) 環堵蕭然 (ハ) 碌々たる凡骨 (ニ) 儕輩を凌駕す (ヒ) 警咳に接



⑩〔開眼〕——佛體の彫刻又鑄造の功を竣へた時に、僧を招いて行ふ儀式。

【六七】左ノ字句ニ假名ヲ附シ其意義ヲ解釋スベシ (大正一二、水産講習)

(1) 良二千石

(2) 領袖

(3) 渴仰

(4) 和而不同

(5) 有爲轉變

(6) 十網打盡

(7) 懲羹吹壺

(8) 海若

(9) 一將功成萬骨枯

(10) 王侯將相寧有種乎

【解釋】(1) 良二千石——支那にては太守のことを二千石といふ。其の秩祿二千石である故である。太守は今の我が國の府縣知事にあたる。良き大守をいふ。

(2) 領袖——えりとそで。轉じて、首領、かしら、人の模範となるに足る人。(えりとそでは人の目をつけるところのものなるが故なり)

(3) 渴仰——渴する者の飲みものを求むるが如く、甚だしくその人を仰ぎ慕ふをいふ。

(4) 和而不同——君子は人の説にして可なれば之に賛成し、不可なればこれに賛成せず。決して人におもねつて賛成するやうなことはないとの意。

(5) 有爲轉變——浮き世の出來事のうつりかはつてしばらくも止まざるをいふ。

(6) 十網打盡——罪人などを一時にすべて捕へ去ること。

(7) 懲羹吹壺——熱きあつものをすゝつて口をやきたるに懲りて、冷きなますを見ても恐れて

欠

# 欠

(5) 「よすが」 たより。てづる。

(6) 「素絹」 白い絹。僧侶などの白い絹の服。

(7) 「打物師」 刀剣などを打ち鍛へることを仕事とするもの。

(8) 「常住」 いつもかはらざること。

(9) 「引出物」 古昔、馬を引出して贈つたが、故に祝儀、また饗應の終などに來客に主人がおくる品物をいふ。

(10) 「~~引出物~~」 【四一】 参照。

【七〇】 左ノ語句ヲ解釋セヨ(大正一二、桐生高工)

(イ) 宸襟 (ロ) 社會奉仕 (ハ) 生業 (ニ) 陶冶 (ホ) 揣摩臆測

【解釋】 (イ) 「宸襟」 【五七】 参照。

(ロ) 「社會奉仕」 一身の利益、損害をおとけして、社會のためにつくすこと。

(ハ) 「生業」 よむたりの業。なりはひ。

(ニ) 「陶冶」 陶器師と鑄物師、養成すること。教へ育てること。

(ホ) 「揣摩臆測」 自分の心で他人のこころを推し測ること。揣摩は臆測に同じ。付度。

【七一】 左記一〇字中各一字ヲ有セル名詞又ハ熟語ヲ書キテ其右傍ニ讀方ヲ、下方ニ義ヲ記ス  
ベシ (大正一二、商船)

梯 涕 施 旋 悔 伸 呻 僻 辟

【答釋】 〔梯〕〔雲梯〕— 雲にとゞくほどの長い梯子。

〔涕〕〔涕泣〕— 涙を流して泣くこと。

〔旋〕〔旋轉〕— ぐるぐるめぐる。

〔悔〕〔悔度〕— あなどりないがしろにすること。

〔伸〕〔伸縮〕— 前の悪事をくいさとる。

〔呻〕〔呻吟〕— うめく。

〔僻〕〔僻取〕— かたすみによつた土地。邊鄙な土地。

〔辟〕〔復辟〕— 〔四五〕 参照。

【七二】 次ノ語句ノ讀方ト意義トヲ明示スベシ (大正一二、小樽高商)

(イ)撥亂反正 (ロ)五風十雨 (ハ)形影相弔ふ (ニ)簞食帶漿 (ホ)苛斂誅求

(ハ)賢所 (ト)世にも稀なる善智識

【解釋】 (イ) 撥亂反正 — 撥は治。亂世を治めて正道にかへすこと。

(ロ) 五風十雨 — 五日に一度風吹いて、十日に一度雨ふる義。風雨の極めて順當なるをいふ。

(ハ) 形影相弔ふ — 我身と影と相弔ふの意にて、孤立して頼るところのなきをいふ。

(ニ) 簞食帶漿 — 簞は竹製の飯器。食は飯なり。漿はおもゆ。少量の飲食の義にて、旅行に携ふる飲食物。

(ホ) 苛斂誅求 — 〔二三〕 参照。

(ト) 賢所 — 〔三〇〕 参照。

(ト) 世にも稀なる善智識 — 世にも珍らしい高德の僧。善智識は、よく人を導いて佛道に入らせる徳の高い僧。

【七三】 左ノ語句ヲ解セヨ (大正一二、和歌山高商)

(イ)時はこれ金 (ロ)一を聞いて十を知る (ハ)肝膽相照らす (ニ)間髪を容れず

(ホ)君子盛徳あつて容貌愚なるが如し

【解釋】 (イ) 時はこれ金 — 時間は尊重すべく惜しむべきである意。

- (ロ) 「一を聞いて十を知る」——一は數の始、十は數の終。頭腦明瞭なるをいふ。
- (ハ) 「肝膽相照らす」——兩人互にその心なうちあけて隠すところなく語りあふ。
- (ニ) 「間髪を容れず」——事の甚だ急にして、利害安危の分かるゝところ、一本の毛髪を容るゝ間もな  
きこと。
- (ホ) 「君子は盛徳あつて容貌愚なるが如し」——人は外見だけではわからぬことをいふ。君子は徳を修  
むること深きにかゝはらず、その外見かへつて愚人の如くである。

【七四】 次ノ熟語ニ讀方ヲ附シ且解釋スベシ (大正一二、金澤高工)

氾濫 脅威 更迭 隧道 焦燥

- 【解釋】「氾濫」——水 あふれひろがること。
- 【脅威】——おどしつけること。
- 【更迭】——いりかはること。くりかへ。更代。
- 【隧道】——地をほりぬいて作つた道路又は水路。
- 【焦燥】——あせること。やきもきすること。いらいらすること。

【七五】 左ノ語句ノ讀方及ビ意義ヲ問フ (大正一二、福島高商)

- (1) 敵愾心 (2) 敷衍 (3) 會釋 (4) 蒐集 (5) 巨擘 (6) 市尹 (7) 調度
  - (8) 不如意 (9) 杜撰 (10) 布衣之交
- 【解釋】(1) 「敵愾心」——「三十一」参照。
- (2) 「敷衍」——「二八」参照。
  - (3) 「會釋」——「二八」参照。
  - (4) 「蒐集」——あつめること。
  - (5) 「巨擘」——「六一」参照。
  - (6) 「市尹」——市のつかさ。市長。市の事を掌る主。
  - (7) 「調度」——「四二」参照。
  - (8) 「不如意」——思ふがまゝにならぬこと。轉じて、生計の困難なことを。
  - (9) 「杜撰」——「四」参照。
  - (10) 「布衣之交」——貧しい時分の交り。
- 【七六】 左ノ語句ニ振假名ヲ付シ且之ヲ解釋セヨ (大正一二、仙臺高工)
- (イ) 桑滄の變 (ロ) 環堵蕭然 (ハ) 碌々たる凡骨 (ニ) 儕輩を凌駕す (ヒ) 警咳に接

【解釋】(イ)「桑治の變」——桑田も變じて滄海となるの意。時勢のうつりかはりの甚だしきをいふ。  
(ロ)「環堵蕭然」——環堵はまはりの垣。又は家の中をいふ。ここにては後者。即ち、家の中がひっそりして居ることにいふ。

(ハ)「碌々たる凡骨」——碌々は役に立たないさま、何事もしでかすことなく、空しく暮すこと。凡骨は平凡な人間。即ち、何の役にも立たぬ平凡な人のこと。

(ニ)「儕輩を凌駕す」——儕輩は同じなさま。同輩。即ち同輩をしのぎ、それ等の上に出ること。

(ホ)「權謀術數」——【二二】 参照。

【七七】 左ノ語ヲ説明セヨ (大正一二、東商大豫科)

(甲)樽俎折衝 (乙)膠柱鼓瑟 (丙)權謀術數 (丁)臥薪嘗膽

【解釋】(甲)樽俎折衝——樽は酒樽。俎は肴をのせるつくえ。樽俎は宴會又は國際上の會見にいふ語。折衝は談判すること。即ち、國際上の會見を行ふて談判すること。

(乙)「膠柱鼓瑟」——ことごとくにははして瑟をひく。變化應用の才なきに喩ふ。俗に、融通のきかぬ人に喩ふ。

(丙)「權謀術數」——權謀は臨機の策略。術數ははかりごと。即ち、臨機應變のはかりごと。

(丁)「臥薪嘗膽」——薪に臥し膽を嘗む。讐をむくいんがために苦心すること。

【七八】 解釋(簡單ナ意譯)デヨイ、ワカリ易ク答ヘヨ。(大正一二、鳥取高農)

(イ)他山の石 (ロ)老婆心 (ハ)ジャナーナリズム (ニ)拔山蓋世 (ホ)人生の波折

【解釋】「他山の石」——「他山之石可以攻玉」と詩經にあるより出づ。天下の至寶たる玉も、天下の至惡たる石で磨いて然る後に玉が完成すると同様に、君子も小人と處り、小人にもまれてはじめて道徳成るをいふ。

「老婆心」——深切する心。人のために過度の心づくしをなすこと。

「ジャナーナリズム」——新聞文學。

「拔山蓋世」——力が非常につよく元氣のさかんなこと。勇壯なる氣象を形容していふ語。

「人生の波折」——この世の中の變化きはまりない状態にいふ。

【七九】 左ノ文句ヲ解釋スベシ (大正一二、大阪外語)

(イ)雨降りて地固る (ロ)日暮れて道遠し (ハ)風樹の歎 (ニ)誰か烏の雌雄を知らん

(ホ)海行かば水漬く屍

語句解釋篇



【ホ】〔知不足不<sub>レ</sub>辱〕——分に應じて安んずることを知れば、人から辱しめを受けないといふ義。

【ハ】〔宵衣旰食〕——夜の明けはなれぬ中に御衣を召されて、日暮れて後晩く食事をきこしめざるも、天子の政務に御精勵あらせらるるをいふ。

【チ】〔持<sub>レ</sub>法太急〕——刑法を執行することが甚だきびしい意。  
〔風樹之嘆〕——楓樹かならんと欲すれど風止まず、子養はんと欲すれども親待たずの句より出づ孝行したいと思つても、已に親の居ないといふ悲しみをいふ。

【リ】〔駟不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>舌〕——駟は四頭立の馬車又その馬、一旦口外したことは、駟馬を以つて追ひかけても及ばない意で、口外した言は取りかへしのつかぬものであるから、慎しむべきものであるとの戒め。

【ロ】〔行尸走肉〕——死尸行き死肉走るやうに、只形ばかりで何等の實質のないこと、無學無能の人を識る語。

【ル】〔曲學阿世〕——阿はおもねる、邪なる學問を以つて、世俗にへつらひ、人氣を博せんとすること

【八二】左ノ語句ニ假名ヲ附ケ且其ノ意義ヲ解釋セヨ (大正一二、鹿兒島高農)

【釋釋】〔閑雅〕——みやびやか。上品なこと。

【後見】——うしろみ。後にありて、その人の身の上を助けること。

【萎凋】——しなびる。しをれる。しぼむ。なへしぼむ。

【環境】——ぐるり。四圍のさかひ。

【臥薪嘗膽】——〔七七〕 參照。

【八三】 解釋セヨ  
① 莫逆の友 (2) 竹帛に著す (3) 先便を著く (4) 芻蕘に詢ふ (5) 後塵に調ふ  
(6) 權門 (7) 勤恪 (8) 即心即佛 (9) 啓蒙 (10) 嗟歎

【解釋】(1) 〔莫逆の友〕——意氣投合して、心に違ふことなき交といふ。

(2) 〔竹帛に著す〕——姓名を歴史に載する義。竹は竹簡、帛は繒帛、古、紙なし、故に竹簡に書けり。

(3) 〔先便を著く〕——人に先立ちて事をなす義。人より先きに名をなす。

(4) 〔芻蕘に詢ふ〕——下問をはぢぬこと。芻は草を刈るもの、蕘は薪を取る者をいふ。

(5) 〔後塵に調ふ〕——權勢のさかんなる家。

【權門】——權勢のさかんなる家。

【勤恪】——みやびやか。上品なこと。

【即心即佛】——みやびやか。上品なこと。

【啓蒙】——みやびやか。上品なこと。

【嗟歎】——みやびやか。上品なこと。

語句解釋篇

- (7) 【勤恪】——つゝしみ深きこと。つとめつつしむ。
- (8) 【即心即佛】——自ら其の心を反觀して、一旦大悟すればその心山ちに佛心と同じ地位に至るをいふ。我が心即ち佛にして、心の外に佛なき意。
- (9) 【啓蒙】——蒙味なるもを、教へ導くこと。多くは兒童を教へ導くことにいふ。
- (10) 【嗟歎】——なげくこと。

【八四】 左ノ語句ニ讀假名ヲ附シ且ツ解釋セヨ (米澤高工)

操觚者 村度 曠日彌久 玉緒 斷末魔 常闇 莫逆 長袖者流 布衣  
 暖簾 縞子 餉臺 喫驚 骨牌 躡着 擲擡 換氣 腎所

- 【解釋】 【操觚者】——【一三】 參照。
- 【村度】——【四三】 參照。
- 【曠日彌久】——【一〇】 參照。
- 【玉緒】——【四四】 參照。
- 【斷末魔】——いまはのきは。しにぎは。臨終。
- 【常闇】——永久の暗黒。いつまでも闇であること。轉じて、世の亂れて、久しく治らないことはいふ。

【莫逆】——【八三】 參照。

【長袖者流】——長袖の着物を着てゐる者の。即ち、公卿殿上人。僧侶。

【布衣】——位を帯びてゐない人。平民。庶民。

【暖簾】——【一三】 參照。

【縞子】——綾織物の名。

【餉臺】——食卓。

【喫驚】——おどろくこと。びつくりすること。

【骨牌】——紙又は、薄板で作つた賭博又は、娛樂用の札をいふ。

【躡着】——だますこと。あざむくこと。虚言をつくこと。

【擲擡】——【六六】 參照。

【換氣】——空氣の入れかへをすること。

【腎所】——【三〇】 參照。



書  
取  
篇

7/2

狂瀟の濤

Handwritten notes and diagrams on the right page. Includes circled numbers 20, 21, 22, 23, 24, 25 and various scribbles and arrows.

【一】(イ)クワンザイ(手厚くむかへる) (ロ)キヤウランドタウ(大きな浪のこみ)

(ハ)リンキオウヘン(場合に從つてあてをするこみ) (ニ)センスキテイ(水中をはしるする  
らいの一種) (ホ)ランマン(花のさきみだれるこみ) (大正元、海軍兵學)

答 (イ)狂瀟 (ロ)狂瀟 (ハ)狂瀟 (ホ)狂瀟

【二】(一)テキガイシン (二)ゼンゴサク (三)ヒカクケンキウ (四)ブツカトウキ

(五)シリメツレツ (六)ロウドウホケン (七)イシヤウザンシン (八)セツケイザン

(九)キボクワクチャウ (一〇)ケイザイテキカチ (大正元、名古屋高工)

答 (一)廉價心 (二)廉價策 (三)比較研究 (四)物價騰貴 (五)支離騰貴 (六)勢騰騰

(七)廉價新 (八)廉價新 (九)廉價新 (一〇)經濟的價值

【三】玉はサレキに<sup>砂線</sup>りて玉人をマてり。世にタフトビオモンぜらるゝ人はた此の如きが。俊  
秀は多し。ロウカウに生れて自ら人にヌイでたる所あり。セツサタクマのゴウ経れば、マツタ  
キタマミなりて、遂には世の光ミカドやき國のチカラにタフト<sup>ト</sup>ばあゝヒキキ<sup>キ</sup>ト<sup>ト</sup>し。大正元、東

京外語

雑字抄

【四】 誤ヲ正セ  
答 砂礫 奉 待 尊 重 陋巷 拔出 切實 功 完玉 煉 繁 華

古は螢を聚め膝に錐しし人だにありきぞ聞け。吾等の境遇を顧みば物恐ろしきばかりの幸福にはあらずや。たゞひ天賦の厚薄はあれども勉めて惰らばんばまた聖代の一學徒なるを免れざるべし。天はその寶庫を人の爲に開くるを吝まず、然れども鍵の用意を人自りせざるべからず。今や秋高ふして氣彌々濟む燈下親しむべきの好時季なり。何ぞ碌々として空過すべきに非ず。光陰矢の如く滔々として流れ去る。努力せざるべけんや

(大正元、廣島高師)

答 ● 錐し——「錐せし」 ● とぞ聞け——「とぞ聞く」 ● 顧みば——「顧みれば」 ● 物恐ろしきばかりの——幸福の形容詞として物恐ろしといふ語は穩かでない「無上の」或は「いひがたき」など改むべきであらう ● 幸福にあらずや——「あらずや」 ● 有れども——「有りとも」 ● 一學徒なるを免れざるべし——「一學徒たるを得べし」 ● 開くる——「開く」 ● 鍵の用意を——「用意は」 ● 秋高ふして——「高うして」 ● 燈下——「燈火」 ● 空過すべきに非ず——「空過すべし」

んや ● 努力せざるべけんや——上に「豈」を入れた方がよいが、前にあるから省いてもよい

【五】 トレイヤなる都會の地にはケツツワヤレカヤなる無数のイトウワキヤの多量にヒソあり。

(大正元、長崎高商)

答 繁華なる都會の地には不潔不健康なる無数の誘惑物の到る所に潜めるあり。

【六】 (イ)かゝるモウマイクドのトが世間のトヨクシヤをハクせんはワタクシドモのタウテイレウカイのできないどころです

(ロ)タトヒ雨が降りてもタトへば花の散るが如し

(ハ)セウカイ(ひきあはせる) (ニ)セウクワイ(ミひあはせる) (大正二、名古屋高工)

答 (イ)かゝる蒙昧愚鈍の徒が世間の書讀を博せんとは私共の到底了解のできないところですから (ロ)假令雨が降りても鐘へば花の散るが如し

(ハ)紹介 (三)照會

【七】 (一)ツモゴリ (二)メテ (三)ユクト (大正二、東京高師)

書 取 篇

齋  
齋  
齋

答 (一) 晦日 (二) 右手又は馬手 (三) 香才

【八】生活カイゼン上ジユウライのヘイフウをケウセイするには多少のギセイを拂はねばなるまい。ヒタスラキウククをのみボクシユシ インジュン コツクを口にする者は現代の人間云ふ事は出来まい

答 改善 律來 弊風 矯正 犧牲 只管 積債 困窮姑息 大正二 富山藥專

【九】 インギン にアイサツす スカシナダむ 勢をタノみてパツコす (大正二、専門檢定)

答 形勢 難狀に接す 難難に接す 難し侍む 勢を待み 跋扈 又 功名 大正二、専門檢定

【一〇】 ナポレオンは世界の文化に エウロペ せし所少からず。雖もヒタスラノウミヤウを追ひて ワシントン をランヨウシクワコ レキシントン を重んぜずして徒にヘイドンを急ぎクンシユを易置すサウセイ一時彼れが シツカ に クツク す。雖も各國の クンミン エンコン フンゲキする者クワタミなり殊に普國の如きは賢相 テツカク シヤ等の ジンザイ ハイシユツしてキヨコクダ

臥薪嘗膽

臥薪嘗膽

ワシンシヤウタンしてクワイケイのチジヨクをソツガンミせり (大正二、商船)

答 寒花 食味 東華 功名 民軍 濫用 過去 歴史 習慣 俳春 君主 赤生 膝下 庸俗 君民 怨憤 憤激 夥多 哲學者 人材輩出 舉朝 臥薪嘗膽 會稽 恥辱

【一一】 キレハワコロの キキヨク はシヨシワオキナリヤウなる キキヨク の オノノ にイシヤレトキシンのタワウイウをクワイコウシソソウのキトクをタイヤウせんことをコヒネガム (大正二、上田憲林)

答 朕は方今の世局に處し我が忠貞なる臣民の協翼に倚藉して維新の皇猷を恢弘し祖宗の遺徳を對揚せんことを庶幾

【一二】 かゝるモウマイグドンのトが世間のシヨウサンをハクせんはワタクシドモのタウテイレウカイのできないところ。 タトヒ雨が降りても タトへば花の散るが如し セウカイ(ひきあはせること) セウクワイ(こひあはせること)

(大二、長崎高商)

三四七

【大】 ト同シレヤトナ

答 蒙昧 愚鈍 徒 賞賛 博 私共 到底 了解 假令 譬 紹介 照會

【二三】 ツラノアンするにイガイのスウセイはイマヤヘイワのカクリツにキフキフたりワがクニはゴダイキヤウコクのハンにレツシセカイのヘイワにコウケンするのヂユウニンをオムヨロしくウチはカウキをシユクセイしサンゲフをサカンにしてコクリヨクのジユウジツをハカいソトはコクカウをアツうし井シンをノべてコクウンのシンテンをキすべきなり

(大正二、北大論科)

答 熟々案ずるに宇内の趨勢は今や平和の確立に汲々たり。我が國は五大強國の班に列し世界の平和に貢献するの重任を負ふ。宜しく内は綱紀を肅正し産業を盛にして國力の充實を圖り外は國交を厚うし威信を伸べて國運の進展を期すべきなり。

【二四】 そば バン いわし かつを かつり しほり おまんばい

(大正二、長崎高商)

答 蕎麥 麴麴 鯉 鰯 飛白 絞 撞梅 面倒

【二五】 (イ) <sup>莫大</sup>バクダイ(最も大なり) (ロ) <sup>カ</sup>カ(カ) (ハ) <sup>ヒダ</sup>ヒダ(國名) (ニ) <sup>ソウサク</sup>ソウサク(國名) (ホ) <sup>ガイ</sup>ガイ(がいある) (ヘ) <sup>ソウサク</sup>ソウサク(さがす) (ト) <sup>ゼンゴサク</sup>ゼンゴサク(跡始末をつくる事) (チ) <sup>ジツセンキウカウ</sup>ジツセンキウカウ(實地にふみ行ふ) (大正二、神戸高商)

答 (イ)莫大 (ロ)嗜好 (ハ)飛驒 (ニ)對島 (ホ)弊害 (ヘ)搜索 (ト)善後策

(子)實踐射行

【二六】 (イ)名をアゲ家をオコす (ロ)家をアけて南米にイヂユウす (ハ)君子は獨をツシむ (ニ)ツ、シみて君が代を祝す (ホ)日に三度我身をカヘリミル (ヘ)カヘリミテ他を言ふ (ト)善をススメ悪をコラス (チ)ヘイハクを神前にソナふ (大正二、海兵)

答 (イ)名を揚げ家を興す (ロ)家を舉げて南米に移住す (ハ)君子は獨を憚む (ニ)謹みて君が代を祝す (ホ)日に三度我身を省る (ヘ)顧みて他を言ふ (ト)善を勧め悪を懲す (チ)幣帛を神前に供ふ

【二七】 (イ)一目レウ然たり (ロ)疵にハウタイを施す (ハ)細節にコウデイせず

(三) 辭句をテンサクす (ホ) 毫も心にヤマしからず (ヘ) アミ曳して漁獲多し (ト) 頼光の四天王に渡邊ツナミいふものあり (チ) 道鏡は皇位をキユセリ (リ) 夢かうツツかマボロシか (ヌ) 靴を隔て、カユキをカクが如し (大正三、陸軍士官)

答 (イ) 瞭然

(ロ) 綱帶

(ハ) 拘泥

(ニ) 添削

(ホ) 疚

(ヘ) 網

(ト) 綱

(チ) 覬覦

(リ) 現・幻

(ヌ) 痒・搔

【一八】 (一) テンシンランマン (二) キカン(残念に思ふ)

(三) 人のモハンミすべし

(四) マイキヨに追あらず (五) 國をハジめ徳をタツ

(六) 心中をヒレキす (七) ツウヤウを感じず

(八) クンキチダツせらる (九) ハイ人(不具)ミなりて業々ハイす

(一〇) 他のセイチウを受けず (大正三、名古屋高工)

○ 答 (一) 天真爛漫

(二) 遺憾に思ふ

(三) 人の模範とすべし

(四) 枚舉に違あらず

(五) 國を

(六) 心中を披瀝す

(七) 痛痒を感じず

(八) 勳位授受せらる

(九) 擬人

となりて業を廢す (一〇) 他の掣肘を受けず

【一九】 (一) バウコヒヨウカ

(二) ケンセイヨウゴ

(三) シゼンタウタ

(四) アンザイ

欠

# 欠

答 (1) 頻繁 (2) 挽回 (3) 盡瘁 (4) 折衷 (5) 磨突 (6) 挨拶 (7) 義捐 (8) 犠牲 (9) 評判 (10) 選擇 (11) 辯妄 (12) 乱目 (13) 御清適 (14) 御判断 (15) 不取敢 (16) 爲被下

## 【二四】 誤ヲ正セ

(イ) 大悟轍底 (ロ) 癡兵院 (ハ) 山間僻地 (ニ) 觀業博覽會 (ホ) 人心胸々たり  
(ヘ) 海上不隱の恐あり (ト) 大雨を犯して京に赴く (大正四、海軍兵學)

答 (イ) 徹 (ロ) 癡 (ハ) 僻 (ニ) 勘 (ホ) 恫 (ヘ) 穩 (ト) 胃

【二五】 (一) シンセウボウダイ (二) ケンチクサウレイ (三) カウジャウハツテン  
(四) キクワイキントウ (五) ジュケンジュンビ (六) ダンパンフテウ (七) キヤウサウ  
ダキジン (八) シヤウバツゲンメイ (九) ガククワクワテイ (一〇) トリシマリレイカウ  
(大正四、名古屋高工)

答 (一) 針小棒大 (二) 建築壯麗 (三) 向上發展 (四) 機會均等 (五) 受驗準備 (六) 談判





ジャウヤクをテイケツシまたグワイコクトカウのキンをハイす (大正五、専門検定)

答 べるりの來訪は國民が惰眠を覺醒する警鐘なりき。幕府は世界の趨勢に鑑みて大船製造の禁を解き  
歐米大國と通商假條約を締結し又外國渡航の禁を廢す (三)

【三〇】 誤テ正セ

蒼々たる天漠々たる此の土との間國を立つもの幾何ぞ。東に睥睨するもの西に覬覦するものあり  
南に北に前に後に互に備互に窺う既に國を此間に立てるもの宜しくその兵を強くしその富を  
にぎはし退ひては百萬の敵軍海を蔽ふて來ることも守護するに足るべく進むでは懸軍萬里異疆絶  
域に望むことも勝を製するに足ることを計らざるべからず (大正五、陸軍士官)

答 蒼々たる彼の天 漠々たる此の土との間國を立つもの幾何ぞ東に睥睨するもの西に窺するもの  
あり南に北に前に後に互に備へ互に窺ふ

既に國を此間に立てたるもの(立つるもの)宜しくその兵を強くしその富をにぎはし退いては百  
萬の敵軍海を蔽うて來るとも守護するに足るべく進んでは懸軍萬里異疆絶域に臨むとも勝を制す  
るに足ることを計らざるべからず

参考 覬覦(キユ)より上に向ひてうかひのぞむこと 非望を企つこと 窺(キユ)隙をね  
らふこと

【三一】 誤テ正シ、且ツ片假名ヲ漢字ニテ書ケ  
ツラツラわがクニゲンジのセイシンカイをクワンサツするにセイヤウブンメイのトウゼンする  
にトモナイ、シンキウシサウアヒサクザツしてスコブるコンランにオチイリジンシンそのキカウ  
するトコロをウシナイ、コクミンのダウギヒにオトロシヤクワイのフウキツキにスタれんこし  
ジツにイウリヨにタゆべからざるものありこのまきにサイしそのヘイガイをケウセイせんこせ  
ばまづホンパウコイウのダイダウをセンメイしコクミンダウトクのシンコウをシヤウダウせざ  
るべからじ (大正五、高等學被)

答 熟わが國境時の精神界を觀察するに西洋文明の東漸するに伴ひ、新舊思想相錯雜して頗る混亂に  
陥り人心その歸向する所を失ひ、國民の道義日に衰へ社會の風紀月に廢れんとし實に憂慮に堪ふべ  
からざるものありこの時に際してその弊害を矯正せんとせばまづ本邦固有の大道を開明し國民道  
徳の振興を唱道せざるべからず

【三二】 (一)トキキキヨハチキザイヤノトイフ (二)トクウゼンにもキガイにサウダウ

- (三)ヘイコウヂヘイをへウバウす (四)ケイセイをジュンチす (五)キシセンメイ
- (六)タイドアイマイ (七)ケイテウフハク (八)シサウキヨウコ (九)ホシヤシンシ
- (一〇)ハンモクシツシ (大正六、名古屋高工)

答

- (一)新所に題材を配す (二)偶然にも危害に遭遇す (三)秉公持平を標榜す (四)形勢を馴致す (五)旗色鮮明 (六)態度曖昧 (七)輕佻浮薄 (八)志操鞏固 (九)輔車唇齒 (一〇)反目嫉視

【三三】 誤ヲ正シ、且ツ片假名ヲ漢字ニテ書ケ

ゲンコンセカイのジジャウはヒをオフてワがコクミンのセキニンをオモからしむイヤシクもセイネンガクセイたるモノはコンゴイチダンのセイレイをクハスイチイガクゲフのケンサンにツトむゴトモにセンシントクセイのシウヤウにシタガイタジツゲフをチハリテシヤクワイにイづればヨクハウカスエウのキザイミシしてコクウンのハツテンにキヨシモつてセイダイのケイタクにムクふるトコロナかるべからず

(大正六、高等學校)

答

現今世界の事情は日を遂うて我國民の責任を重からしむ苟も青年學生たる者は今後一段の精勵を加へ一意學業の研鑽に勤むると共に専心徳性の修養に従ひ他日業を率へて社會に出でば能く邦家を

須要の器材となりて國運の發展に寄與し聖代の惠澤に報ゆる所無かるべからず

【三四】 誤ヲ正セ

- (イ)老ひて後に悔ゆこまなかれ
- (ロ)冀北の野に馬群空しきこは馬なきこいふにあらす良馬なきをいふなり
- (ハ)彼もし「死ねば玉を碎けて」こいひし兄の勇敢なるに似れば死して名を成さむもし又弟の如き卑怯ならば生きを辱を受くるべし
- (ニ)彼等のうち大雪に遭ひ飢へ且つ凍へたるもの多し (大正六、七海軍兵學)

答

- (イ)老いて後悔ゆることなかれ
- (ロ)冀北の野に馬群空しとは馬なしといふにあらす良馬なきをいふなり
- (ハ)彼もし「死ねば玉を碎けて」と云ひし兄の勇敢なるに似れば死して名を成さむもし又弟の如き卑怯ならば生きて辱を受くべし
- (ニ)彼等のうち大雪に遭ひ飢へ且つ凍えたるもの多し

【三五】 (一)グウゼンにもキガイにサウグウす (二)キシセンメイ (三)タイドアイマイ

(四) ケイテウフハク (五) ハンモクシツシ (六) テキシヨにテキザイをハイす

(大正六、名古屋高工)

答

- (一) 偶然にも危害に遭遇す
- (二) 旗幟鮮明
- (三) 態度曖昧
- (四) 輕佻浮薄
- (五) 反目嫉視
- (六) 適所に適材を配す

【三六】

(イ) 獨逸は米國よりサイゴツウテフを受けたリ (○) 内地にはクワウキテツダウ未だフセツせられず (ハ) 彼はシヤシをニクムコミダカツの如し (ニ) ハネチドリツマツキ

タフル

(大正六、軍兵學) (大正六、海軍機關)

答

- (イ) 最後通牒
- (ロ) 廣軌鐵道。敷設
- (ハ) 奢侈。惰。蝸蝸
- (ニ) 跳。躍。頭。倒

【三七】

(甲) 投げ込むツナにスカササトリスガリたれき雪風吹きササミテ身をもツンザくはかりのこ、チセリ。

(乙) トジャウホシイママにバンイのバテイにジウリンせられキユウデンダウウ盡くハキクワイホウされて終にヘイクワのチマタミクワシラウニヤクリサンしてクワウハイ見る影もなくさし

もナンコウフラクミ稱せるフキウのダイトも忽にしてメツパウしたり (大正六、商船)

答

- (甲) ツト(刺) スカサズ(透かす) トリスガリ(取組) ササミテ(荒みて) ツンザク(劈く)
- (乙) トジャウ(都城) (ホシイマ、(恣) バンイ(蠻夷) バテイ(馬蹄) ジウリン(蹂躪) キユウデン(宮殿) ダウウ(堂宇) ハキ(破毀) クワイホウ(壞崩) ヘイクワ(兵火) ラウニヤク(老若) リサン(離散) クワウハイ(荒廢) ナンコウ(難攻) フラク(不落) フキウ(不朽) ダイト(大都)



【三八】 我等はステに日本人たり我等の日本人たるは我等のヨウパウ我等のフウサイ我等のシサウ我等のキヨドウ我等のシカウ我等のカンジャウ之をシヨウメイし我等日本人カクジの間にはテツサもてツナぎたるが如きケンゴなるレンラクを有す然れば一個の日本人のゲンカウ即ち直ちに國家のクワフクミなるこ同じく我が日本國のコウハイは又直ちに我等國民のソンプウにクワンケイす (大正六、陸軍士官)

答

- 既に。容貌。風彩。思想。舉動。嗜好。感情。證明。各自。鐵鎖。

繫。堅固。聯絡。言行。禍福。興廢。存亡。關係。

【三九】 顧みれば歲月をケイクワするこゝ二年有半リンジャウをハクワイし公道をベツジヨシ  
イウシ以來未曾有のザンギヤクヒサンを人類に加へたる世界的大戦争は戦熄の期何れの日にあ  
るか之を窺知し能はざるのみならず獨逸のキヤウバウなる潜航艇封鎖のセイゲンは遂に米獨國  
交のダンゼツを來たし國際政局のフンキフ彌々甚だしきを致せり此の秋に際して獨り東洋はセ  
イヒツカウネイ民衆熙々としてタイヘイをオウカす是れ全く我帝國の力に據らざるばあらず  
(大正六、東京外語)

答 經過 倫常 破壞 蔑如 有史 殘虐 悲慘 狂暴 宣言 斷絶 紛糾  
靜謐 康寧 泰平 謳歌

【四〇】 (甲)昨日のアレにひきかへて今日は風ナギいミノドカなるヒヨリなり  
(乙)英國の學者が學者的ケンチを保ちつゝマナコをセンランのクワコミセントミにハせて其の  
ハウフをトロするのガイや見るべきものあり。

の眞イギをセンメイし或はドイツ國民のキンラウ的セイカクを説きケンレンのカチを論ぜるが  
如き敵ながらも一道のセイキ其の間にパウハクたるものあり (大正六、商船)

答 (甲)アレ(荒) ナギ(風) ノドカ(長閑) ヒヨリ(日和)

(乙)ケンチ(見地) マナコ(眼) センラン(戦亂) クワコ(過去) ゼント(前途)  
ハセ(馳) ハウフ(抱負) トロ(吐露) ガイ(概) ドイツ(獨逸) クワイコ(回顧)  
セイシン(精神) カウテウ(高潮) イギ(意義) センメイ(闡明) キンラウ(勳勞)  
セイカク(性格) クンレン(訓練) カチ(價値) セイキ(生氣) パウハク(稱讚)

【四一】 ヒトモシリガイのダサンにのみシタガいてカウドウせんかジンセイはイカにカンサウ  
ムミなるべしヒトはワウワウにしてソクエキのガンチュウにレキゼンたるをムシしてトツシン  
オキヨクゲンせばレイセイなるタイドをモツてコノんでシチにツクこゝすらあるなりシチにツ  
クがごこきはヒジャウのこゝなりこゝいへごもニチジャウのこゝにおいてトクシツのウへにテウ  
ゼンたるべきバアヒケツしてスクナしませず (大正七、高等學校)

答 人若し利害の打算にのみ従ひて行動せんか人生は如何に乾燥無味なるべき人は往々にして損益の